

モンハン リアル補正 ～英雄の軌跡～

ふーてんもどき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスターの恐ろしさと、人間の底力。

※一話〜六話までは短編作品、七話〜十一話は連載作品となっています。ご了承ください。

目次

短編集

ただの人	1
夢を追いかけて	8
大切なもの	19
古龍観測録	38
続 古龍観測録	54
熱い瞳に焼き付けて	73
お嬢様奮闘記	
1	99
2	119
3	151
4	171

エピローグ

短編集

ただの人

遺言を書き忘れてきた。

鋼の額当てをしている若い男は、ふと思い浮かんだ言葉を打ち消すようにシワの寄った眉間を強くつまんだ。顔についていた蠅が飛んでいく。

シダやイネの茂みの中で、できる限り音を立たないよう慎重に、ウエストポーチから団子に似た白くて丸いものを取り出す。少しでも気配を見せれば、奴らは素早く男に気付き、首筋にかじりついてくるだろう。

茂みから離れた草地で、肉を食い漁るモンスターを睨みながら、男は何回も作戦を頭の中で反芻する。

青い鱗に黄色い目の肉食竜。ランポスと呼ばれるモンスターである。成人男性ほどの身の丈に、ノコギリのような牙と、鎌状の鋭い鉤爪を前腕に持っている。彼らは仕留めた獲物に群がっている。

食われている死体は人間のものだった。

ほんの数分前で、男と行動を共にしていたハンターの身体だ。一緒に教習所を卒業

男は叫んだ。

反射的に絶叫し、それと同時にきつき手に握った団子を投げ付けていた。団子が手前の一匹の頭部に当たって碎ける。当然、傷なんか付けられない。しかしそれと同時に事は起こった。

強烈な音。

爆破にも、大型のモンスター咆哮にも聞こえる、絶大な音量が響き渡った。

半狂乱の男が両手で耳を覆うことができたのは奇跡に近い。ランポスたちは非自然的かつ突然のことに目を閉じて、背を丸める格好で頭を低いところへやった。

隙ができた。

たった数秒にも満たない、ランポスたちの隙の真つ只中に男は飛び出した。

前転一回したところに、ちょうどランポスの首がある。利き手に持ったククリナイフを男は力の限り細長いランポスの首に降り下ろした。

メキユツ、とすごい音がして骨を削って作った刃がめり込む。切断はできなかつた。しかし、頸椎をへし折られたランポスは鳴くこともなくその場に崩れ落ちる。

男は止まらなかつた。すぐにナイフを引き抜くと、次に近い方のランポスに同じく攻撃する。硬直から解けかかっていたランポスは、迫る男の姿を見て後ろに飛ばうとした。

そのせいで首に当たるはずの攻撃が額に入った。

「ギャイイ！」

ランポスの甲高く鳴いた。黄色い爬虫類の瞳が男を睨んだ。首の骨よりかは頑丈な頭骨が、刃をランポスの命から隔てている。

殺し損ねた。

男がそう思った瞬間には、ランポスの鉤爪が脇腹に食い込んでいた。金属に守られていないなめし革が無惨にも貫かれる。

何ともないと感じたのは一瞬で、すぐに焼けるような痛みが襲ってくる。腹に溢れた血が喉をせり上がって口から泡を立てて吹き出る。内臓が破れたのだ。

「おおっ、死ぬ、死ぬよおおお」

男は叫びながら、もう一度ランポスの頭にククリナイフを降り下ろした。骨を割る固い音がして、今度こそ二匹目のランポスは痙攣して倒れた。ランポスの爪が抜けた傷口から、血が流れ、足元の草を真っ赤に染める。押さえる手の隙間からピンク色の腸が覗く。

男はもう自分が何をしているのかさえ分からなくなっていた。極度の興奮に脳味噌が痺れていた。

そうして一瞬だけ遅れた行動に、付け入れられた。

「があああああ！」

背中に入った激痛。

最後のランポスに背中を抉られたのだ。どのくらい深いかは分からない。ただ、腸を押し止めていた左腕がプランと垂れて言うことを聞かなくなった。

男は一心不乱にナイフを振るった。固い感触。男は止まらない。

まだ振る。振る。振るう。

それはもう鬼神のように、変形してナイフでなくなつた骨の塊を、何度もランポスに打ち続けた。



肉食竜の卵の採取クエストを受けたハンター二人が、腐りかけの死体となつて街に戻つたのは、二日後のことだつた。

半日経つてもベースキャンプに戻つてこないの、水夫兼使用人のアイルー達を探しに行つたところ、絶命したランポス三匹とハンター二人を見つけた次第だ。

クエストは失敗。ハンターのリュックに入っていた卵は割れてしまつていた。血の具合や、片方のハンターには食い荒らされた跡が見当たらないことから、死んでから少

ししか経っていないことが分かった。

こうして死ぬと、モンスターに骨も残らず食べられることはよくあり、今回の件は遺体を持って帰れただけでも運が良いとすら言える。

そんな日常茶飯事の報告が張り出された掲示板を、ほとんどのハンターはチラリと見るだけで気にも留めない。受付嬢などは見向きさえしない。

昨日まで、集会所の酒場で笑っていたハンターが死んでも、それは日常のひと欠片でしかなかった。

ハンターの世界は残酷である。英雄だの竜殺しなど、おとぎ話の絵空事でしかない。教習所で、入学から卒業までずっと叩き込まれる教訓だ。夢見る半人前に現実の厳しさを教えようと、どの教官もまずそれを教えるのに必死になる。その甲斐あって、近年の死亡率は3割ほど減っているのだ。ギルドもこれを誇りに掲げている。

若き二人のハンターが死んだその日、世界中で数多くのハンターが、同じように命を落とした。

ギルドは相変わらず賑わっている。

一人でキノコの採取に行く者。十数人のグループで怪鳥イャンクックの討伐に向かう者たち。クエストを達成し祝杯を上げるハンター。または失敗し、しかし拾った命に感謝する狩人。

そして、死んだ知人のために涙する人たち。
世界は今日も、変わらぬ営みを紡いでいく。



おわり

どき」

別のテーブルからもフォローが飛ぶ。

「そうそう。生きて帰れただけでも上出来だつて」

「あたしもモスには何回か焼き入れられたよー」

「ソロで活躍とか無理だべ。地道が一番」

確かに、と青年は俯く。

夢見ていた輝かしいドラゴンキラーの英雄にはほど遠く、豚に転ばされるといふ最低の初陣だったが、こんなのは何処でも誰でもある失敗なのだ。

思いつがるな。思いつがる奴から死んでいく。教習所でもつい先日まで、叩き込まれてきた教訓である。

俺も凡人に過ぎないんだよな。

そんな諦めに似た気持ち湧いてくる。

「なに言つてんだ！男ならやつぱデケエことしなきゃなんねえぜ！」

髭面が周りに叫んだ。笑つてはいるが、さつきまでの蕩けた表情でなく、真剣な眼差して新入りの青年を見つめる。

「デケエことつて？」

痩せ気味が聞く。彼の腹のどこに入るのか、いつの間にか追加の Pasta を食べ始めて

いた。

髭面は太い腕でジョッキを掴み、半分ほど残っていた酒を全部のどに流し込んだ。野太いゲツプが出る。

「そりやあドラゴンキラーよ！レイアやレウスなんかをぶつ倒すのさー！」

一瞬、酒場がシンと静まりかえった。皆が近くに座るお互いの顔を見合わせる。

その後には、音爆弾みたいな大笑いが起こった。

男たちの馬鹿笑いがこだまして、ウェイトレス等の女性陣も口元を隠し、声を抑えて笑っている。言った髭面まで、愉快そうに笑っていた。

その中で一人だけ、青年だけがポカンと呆けている。

「いやー笑った。やっぱり凄いやあんだ。本気で言ってるんだもん」

「な、なんで笑うんですかー！」

涙を拭う痩せ気味の言葉に、硬直から解けた青年が嘸みつく。自分と同じ夢を語る男をバカにされていると思っただのだ。

「いいじゃないですか、夢見るくらい！笑うことないでしょー！」

青年の剣幕に少し驚きつつも、痩せ気味は落ち着かせるように微笑んだ。

「あー、バカにしてるわけじゃないんだ。むしろな、俺たちはこの人を尊敬してるんだよ」

「えっ」

毒気を抜かれた青年が、笑いがある程度治まった周囲をキョロキョロ見渡す。

バカにしていると言うには皆の表情は明るく、嬉しさが見えた。心なしか、さつきよりも酒場全体の雰囲気華やいでいるようだ。

「皆同じさ。ハンターを志した奴なら誰だって、あの強大な竜を狩りたいと思う。名声を、一身に浴びる自分を夢に見るものなのさ」

「でも、教習所でそんなことは絶対に考えるなつて」

「そりゃ教官はそう言うしかないだろ。でもな、そう押し殺せるもんじゃないさ。本当の自分の願いは」

「押し殺す必要などない！」

受付嬢におかわりのエールをもらった髭面が、話に割って入る。痩せ気味は譲るように笑って黙った。

「夢を見ずに何がハンターだ！俺はいつかやってやるぞ。ここにいる仲間と、大老殿の優秀な奴らも巻き込んで並みいる飛竜を狩ってやる」

キラキラと輝く武器を身につけ、空と陸を統べる飛竜を手に凱旋してくる精鋭たちを思い浮かべ、青年はうっとりした。その中に自分もいたら、どれほどの幸せか。

「いやいや。それだけじゃねえ。あの古龍って呼ばれる化物たちすら倒して、伝説

になつてやらあ！」

いいぞいいぞと、他の席の酔つ払いから野次が飛んでくる。

髭面はスターのように腕を振りかざして声援に答える。調子に乗つて空いてるテーブルによじ登り、古龍討伐の寸劇なんかを始めた。

囃し立てる声はさらに高まり、酒盛りはお祭り騒ぎの様相へ。

「ハハあー！」

そこへ受付嬢がやってきた。木のお盆で髭面の尻をひつぱたく。古龍にとどめを刺そうとしていた髭面は少女の一撃に、ステージの上から転がり落ちた。

「誰が掃除すると思つてるんですか！ それにもし壊したら弁償ですからね、弁償っ」

「英雄が受付嬢に負けてらあ」

皆が笑う。青年もいつの間にか、破顔して手を叩き笑っていた。

楽しげな笑い声に集会所は彩られ、星よりも輝かしい夢の話が、街の夜を照らしていた。



墓前に、一人の男が膝をつき、祈りを捧げている。

黙禱する男は青年ほどの若さであった。いつからそうしているのか、その必死さほどこか痛ましく、反対にどこか神聖でもある。

その後ろから声がかかる。

「よう。また来てたのかい」

よほど熱心だったのか、気配に気付かなかつた青年は驚いたように、勢いよく後ろを振り返った。視線の先で、少し頬がこけている痩せ気味の男が、沈痛な微笑みを浮かべて立っていた。

彼を見た青年はホツと息を吐き、また滑らかな石で作られた墓に向き直る。

「ええ。狩りの前は、こうすると落ち着くんです」

「そっか…… あれからもう、一年も経つな」

何か言おうとして、青年がぐつと言葉を飲み込んだ。

その様子を見てから、痩せ気味の男は言った。

「強かつたよな、あの人は」

「……でも」

震える声で、青年が言う。

「でも、死にました」

痩せ気味は持ってきていた酒ビンの栓を抜いて、墓の棚に置いてある石の杯に、静か

に酒を注いだ。

青年は独り言のように続ける。

「強くても、死んでしまいました」

痩せ気味の男は、自分も直接ビンに口をつけて飲み、どう答えたものかと頬を擦った。しばらくしてから、痩せ気味は口を開いた。

「あの人がどう戦ったか、話したよな」

青年は振り返らず答える。

「ええ、何度も。興奮したイヤンクツクがベースキャンプを壊そうとするのを、止めようとしたんでしよう。たった一人で」

イヤンクツクとは巨大な鳥の名である。火のタンを吐き出し、岩みたいな甲殻を持つ、個体によつては民家より大きい怪鳥。

これを討伐するためには、ボウガンを中心とした連合部隊を組むのが望ましいとされている。近接戦は緊急時のみ。それも单身とくれば、断崖の身投げよりも背筋が凍る話である。

「あの時、もしベースキャンプ——俺たちの船がやられていたら、俺を含めた12人のハンターと1人の観測員、それからアイルー4匹が、あの孤島に閉じ込められることになった」

青年は黙つて痩せ気味の話を聞く。

「実際には、ランゴスタにやられた重症者がいたからな。あのままだったら、船ごと殺されていた」

「だから、命をかけて立ち向かった、と」

「そうだ」

普段の飄々とした様子はなく、痩せ気味の男は力強く言った。

「イヤクツクに最後のアタックをかけようと俺たちは躍起になって奴を探し回っていた。怪我人の看病と見張りでキャン普残った、あの人以外はな」

「皮肉なもんだよな。結局、手薄になった俺たちの拠点を、あの方は必死こいて守り抜いてくれた」

「仲間の一人が異変に気がついて戻ってみれば、空へ逃げていくイヤクツクと、右半身が焼け焦げたあの方が倒れていた」

一言一言が、青年の胸に深く突き刺さる。

捻挫などしていなければ。自分がもし一緒に行けていたら、もつと違った結果になつたんじゃないか。一年経つた今も、そんな考えが過る。

理性では、それが妄想であると分かっていた。過ぎた時間も失つた命も、どうやつたつて戻らないのだ。狩人になってから一年と少しの間に、青年はそんな摂理を骨身に

染ませていた。

「もう息絶えていたあの人は、無事な方の左手でしつかり剣を握っていたよ。すげえよな。身体の半分使い物にならなくされても、戦おうとしたんだよ」

頭の中でグルグル回る妄想を振り払うように、青年は言った。

「まったく、どうやったんだか。普通に火の玉くらつてもそうはならないですよね」
語り口調が熱っぽくなっていた痩せ気味は、少し考えてから答えた。

「たぶん。嘴でくわえられて、直に浴びせられたんだと思う」

「うわぁ」

地獄のような想像に、青年が呻く。それが存外間抜けた声で、話題に反してほんのちよつと雰囲気や和らいだ。

痩せ気味が見上げた。遠い青空には、飛行に特化した小型の鳥竜が群れをなして飛んでいる。

「本当、本当にあの人は、強かったんだ。若いときには、デカイ猪の突進を真正面から受け止められたんだぜ」

「敵わないなあ。俺なんかモスにも負けちゃいましたよ」

青年の言葉に痩せ気味が苦笑する。

「一年前だろ、それは。体も出来てきて、今ならあの人の後釜にもなれるんじゃない

かつて、パーティ内でも噂になつてゐるぞ」

「まだまだですよ。全然敵いません。化け物に単身で挑むなんて、まるで英雄じゃないですか」

青年は取り合わない。遙か彼方の憧憬を見つめるように、遠くを眺めている。その真剣な瞳が、謙遜ではなく心からの言葉だと物語っている。

痩せ気味が、妙に大人になつてしまつた青年に肩をすくめて言った。

「そろそろ行くこうか。皆待つてる」

青年が立ち上がり、墓に一礼してから背を向けた。

「はい。ランポス5匹の討伐でしたね」

「ついでにアプトノスのメスも狩つていくかつて話になつてる。今は繁殖期の始めで肉が美味いからな。高く売れるぞ」

「くれぐれもランポスの獲物を横取りはしないでくださいよ。奴ら、5匹どころか群れ総出で追っかけて来ますからね」

「へいへい。頼もしくなつちまつたな、まつたく」

痩せ気味は鼻クソをほじりながら言つて、ふと、また真面目な顔つきに戻つた。

「なあ、一年前さ、集会所であの人が叫んだ夢、覚えているか」

歩き出していた青年は立ち止まり、間を置いてから答えた。

「ええ。ドラゴンキラー、でしたね」

「そのさ、可能だと、思うかい」

今度は痩せ気味の声が震えてた。

くぐもったような質問に、しかし、青年は晴れやかに笑った。その笑顔が、かつての髭面の男にどこか似ている。

「当然です。どんな不可能も可能にしましょう。俺たちは、ハンターなんですから」
豪快で穏和な、その明け透けな笑顔に連られて、痩せ気味の男も笑った。懐かしくて、堪えないと涙が出そうになった

「そうだな。俺たちはハンターだ」

ハンターたちは今日も狩りに出る。ある者は富を求め。ある者は名声を求め。そうして人々の生活を支えていく。

モンスターが蔓延り、人間が自然と共存していた数世紀。厳しくも輝かしい時代がそこにあつた。



おわり

大切なもの

青年は昂っていた。目の前の存在が放つ威光に酔いしれている。

フルプレートの鎧兜一式。

お金を貯めること、苦節3年の今日。訓練生時代の支援金さえも切り詰めて、青年はようやく憧れの鎧兜を手にしたのである。

上質な鉄鉱石とマカライト鉱石のみを使って作られた、まさしく『騎士』が身に付けるような贅沢な逸品だ。

「お前さんが言った通り、ドスファンゴの突進にも耐えられる代物だぜ」隣でタバコをふかしている鍛冶屋の主人が自慢気にそう言った。

「しかし物好きだねえ。今どきこんな注文、どこからも入ってきやしないぜ。最初聞いたときはオイラ、驚いちまったよ」

青年がフンスツと鼻息を荒く吹かせた。

「いやあ、ロマンだろ、おやつさん。これを夢見ない男がいるなんて信じらんねえや」

「ま、確かにな。ロマンたっぷりだわな」

ピカピカに磨き上げられたプレートが眩しい。

胸部分に施された飛竜の彫り物は、青年がどうしても頼み込んだ装飾だ。これのせいで費用がバカ高くなったが、本人はてんで気にしていない様子である。

「んじや、所有者登録する前に、試着済ませちまうか。これが専用のインナーな」
「おうともさ」

鍛冶屋に言われて、待つてましたとばかりに、折り畳まれたインナーを受けとる。紐や輪つかなんかが付いていて、これを着ないことには鎧を固定できないのだ。

試着室がないので、狭い採寸室で下着姿になる。

半裸になり、腕に力瘤を作ってみて自分の肉体美に惚れ惚れする。実際にはハンターとしては痩せ型の体型だが、青年は至って満足そうだった。

「さっさとしろ」

ポーリングを決めているところを急かされて、顔を赤くしながら全身タイツのようなインナーを慣れない手付きで着る。恥ずかしいのか、チラチラと鍛冶屋を何度も横目で見ると、鍛冶屋の呆れたようなため息。

「き、着れたよ。なんかスースーする。これだけだと変じゃないかな」

「ああ、変態だな。ギルドナイトが飛んでくるぜ」

「態は余計だろ!?!」

鍛冶屋は全身タイトの客に辛辣な感想を浴びせつつも、鎧を着るのを手伝ってやる。

「いちおう一人でも着れるように作つたが、すこぶる面倒だからな。できれば誰かに手伝ってもらえ」

「うん、ありがとさん」

「じゃ、まずは脚の装甲からだな。違和感ねえか？」

思ったよりも上質な履き心地に、青年は感動した。耐熱性と肌触りの観点から、ケルビのなめし革を裏地に使った効果である。

次々に各部位のパーツが取り付けられていく。一言一句、鍛冶屋の説明を聞き流さないうよう努めながらも、これを着て集会所で凱旋するであろう自分に惚れ惚れしていた。

「ほれ、これで完成」

口元以外を覆う兜を最後に被り、騎士の青年は完成した。座つたままで、鏡に映る鎧姿の自分に釘付けになっている。

「ちよつと立って歩いてみな。屈伸とかもして、変なところがねえか確認しろや」

「おうー」

立ち上がるだけで意気揚々。膝から下に力を入れたその時、青年はふと違和感を覚えた。

「ん？ どうした。早くしろよ。俺は仕事上がりの酒を飲みたくてウズウズしてん

だよう」

「う、うん」

そうして青年は立ち上がって動作を確認した。

問題ないと言って、また脱ぐのを手伝ってもらう。汗が滲んでいる手の平をズボンで擦って、所有者登録と後納金の支払いを済ませ、布でくるんだ鎧をリアカーに乗せる。

鎧を積んでいるとき、すでに鍛冶屋は飲みに出かけてしまっていた。

なんて親父だ、と思いつつ、緩やかな上り坂が続く自宅までの道を、リアカーを引いて行った。



ウエイトレス姿の受付嬢が、目をパチクリさせて青年を見つめている。

鎧を受け取ってから数時間後、クエストを受注して準備を済ませた青年は、鎧を身に纏い棧橋の上に立っていた。

「ちよ、ちよつとあんた。何よその格好」

受付嬢が聞く。不意打ちを突かれたように、困った顔をしている。

青年は兜越しでも表情が分かるほど自慢気な声で言った。

「前から言つてたろ。マカライトをふんだんに使つた鎧を注文したつて」

「ええ……あれ冗談とばかり……それにしてもあんた、その格好でクエスト行く気なの？」

「当たり前だろ」

「でもこれから行くのつて、キノコ取つてくる依頼じゃないのさ」

受付嬢の呆れた声。

「へっ、ついでにランポスやブルファンゴも狩つてきてやるぜ。『ついでに』な！」

青年の張り切りすぎな啖呵に、受付嬢は頭を抱えた。
彼女と青年は子供の頃から付き合いがある関係だが、今回の彼の馬鹿さ加減は過去最大級だった。

受付嬢は肩から下げていたカバンから革製の包みを取り出した。それを青年に勢よく突き出す。

「これ、持つていきなさい」

青年が露骨に顔をしかめた。

「ええー、小さな船しか借りられないから、荷物は少なくしておきたいんだけど」

「つべこべ言わずに！」

文句を一蹴されて、背負っていたポーチに無理矢理その包みを入れられる。

「なんなんだよ、毎回毎回」

腕を組んで受付嬢はフンツ、と鼻を鳴らした。

「餞別よ。中身はナイシヨ。困ったときに開けなさいな」

「いつつもそう言うけどよお、前なんか石ころ詰めてやがったじゃねえか」

「でも役に立ったでしょ。」

青年は嫌そうに、フェイスガードの下で眉を寄せる。

受付嬢は勝ち気そうな顔に反して、柔らかに笑った。少女つぼさが残る、綺麗な笑い方だった。

「今回のはまともよ。あんたソロでやってるからって最近調子に乗っちゃってさ。見せて危なっかしいんだもん」

「ふうん。心配してくれてんだあ。幼馴染みだもんなあ。ん？」

からかうような青年の言葉に、受付嬢はその可憐な容姿からは想像もできない見事な回し蹴りを、青年の尻にぶち当てた。金属の固い音がなる。お尻もキツチリ、丈夫な鎧で守られていた。

「うっさい！ 客が減ったら困るって話よ。さっさと行って帰ってきな」

受付嬢のキツイ激励に「効かねー」と笑いながら船に乗り込む。待ちかねていたアイルーがすぐに船を漕ぎ出した。

遠くなっていく船を、兜を被った青年の顔が見えなくなるまで、受付嬢は手を大きく振って見送った。



「旦那、どうしたニヤア」

水夫のアイルーがそう聞いた。

陸を離れてちょうど半日が経った。今はとつぱり日が暮れた、新月の夜である。月明かりが無い分、空を埋め尽くす星々がよく映えている。

クエストに備えてもう眠らなければいけない時間だが、青年はモゾモゾと頻繁に動いて、ちつとも寝る気配がなかった。眠るために脱いだ兜を抱えたまま横になって、右へ左へ寝返りを打ち続けている。

「慣れない鎧で寝苦しいニヤ？でも、その状態でぐっすり寝られないと厳しいのニヤ。実地は一日で終わるクエストだからまだしも、大型の討伐クエストなんか行くときには鎧で寝るなんて日常茶飯事ニヤ」

ニヤーニヤーとお節介なアイルーに苛立って、短く返事をする。

「知ってるよ。放っておいてくれ」

モゾモゾは止まらない。むしろ、時間が立つごとに頻度が多くなっている。しばらく経って、寝付けないアイルーが抗議に出た。

「あー、寝れないんでそろそろ静かにして欲しいニヤ。船の番は交代制だから、休めるときに休みたいのニヤ」

青年の動きがぴたりと止まる。いやに不自然な静止だった。背中に観念したような哀愁が漂っている。

「……………なあ、相談なんだけどさ」

「ニヤ」

「ウンコ、したいんだけど」

今度はアイルーが固まった。

青年は我慢が限界に近いのか、また忙しなく動き始める。

青年のすかした尻が臭くて、アイルーは顔をしかめた。鼻を押さえているために、ダミ声で答える。

「じゃあ鎧脱いですればいいニヤ」

「え、でも、面倒臭いし」

「さっさとするニヤ」

アイルーの言葉には気迫がこもっている。

このフルプレートの鎧、クエスト出発前に試しに一人で着てみたら、ぐうの音も出ないほど四苦八苦させられたのだ。クエストが終わるまでは脱ぐものかと決めていたが、便意という不測の事態に、早くも決断を余儀なくされた。幼馴染みの受付嬢が知れば、チョップを放たれるだろう間抜けっぷりだった。

今日はよく急かされるなあ、なんて思いながら渋々、アイルーに手伝ってもらって鎧を脱いだ。気を遣ってか呆れてか、そっぽを向いているアイルーに感謝しつつ、夜の海原に失敬した。

「ハンターって、大変なんだな」

「たぶんそのハンターは旦那だけだニヤ」



空が白み始めた早朝に起きれば、もう狩り場である島がすぐそこにあつた。小さな船なので、そのまま砂浜に乗り上げる。

「しつかし貴族はすげえよな。バカ高い報償金払ってでも、この島の特産キノコが食いたいなんてさ」

「僕らの税金が彼らの懐に入ってると思うとイライラするニヤ」

アイルールの辛口な物言いに苦笑し、また猫の手を借りて鎧を着る。武器の点検もバツチリで、背負った槍の穂先が、太陽の光を反射しキラリと光る。

万全の状態。しかし青年は腰を下ろしたまま動かない。

陽射しの熱で鎧の肩越しに蜃気楼の揺らめきが見える。じりじりと熱されていく中で、青年はまだ動こうとはしなかった。

「旦那。どこか具合でも悪いのかニヤ？」

「いや、そうじゃないけどさあ……」

青年の濁した返事に、アイルールが肉球でパシパシ背中を叩いた。

「なら早く行くニヤ。僕らアイルールの仕事は日払いだから、少しでも早く済ませて

時給単価を上げなければならぬのニヤ」

可愛い見た目にあるまじき発言である。

青年はそうしてようやく、腰を上げてよろよろ森の方へ歩いて行った。新米ハンターにしたって酷い、どうにも頼りない足取りに、アイルールは首を傾げるばかりだった。



ベースキャンプから大分離れて、青年は出っ張っている木の根に座り込み、息を吸っ

て叫んだ。

「ん重いん重いん」

すつぽり全身を覆い隠している鎧兜の内側で、青年は滝のような汗を流していた。土地ゆえの蒸すような暑さもあるが、何より鉄とマカライトをふんだんに使った鎧の重さは尋常ではなかった。まるで拘束具を付けて歩かされている囚人の気分である。

「くそつ、ここまでは思ってたぜ」

鍛冶屋で試着した時から、違和感は覚えていた。あれ、思ったよりもヤバイぞ、と。しかし実際に狩りに出てみて、ついに認めざるを得なくなつた。

「これ着てハンターやるの無理じゃん……」

ガツクリ項垂れる。上げていたフェイスカバーが音を立てて閉まる。

青年はうんざりした。

視界は遮られているし、音の方向も兜の中で反響して分かりづらい。何より歩くだけで、普段走ると同じくらいの体力を消耗していた。

圧倒的な防御力を誇る半面、ハンターとして必要なもののほとんどを失ってしまったわけだ。なぜフルプレートが世の中から姿を消したのか、青年は泣きながら痛感した。排泄も満足にできないのだから踏んだり蹴つたりである。

「三年間……三年間の努力が無駄になった……キノコ採って、もう帰ろ

う……」

グローブのせいで器用さの欠片もない手付きで、ギルド支給の地図と依頼書を広げる。

今回お目当てのキノコが寄生する木は、現在地から島をグルリと回り込み、緩やかな丘を登った先に群生しているらしかった。

長い道のりにさらに気が滅入る。

仕方なしと、重い足を引き摺るようにして、再び歩き出す。草木を掻き分けて一時間も進めば、島の反対の海岸に出る。人間サイズのヤドカリが潜伏している目印である砂の噴出に注意しつつ、地図と照らし合わせながら島の中央に向かう。

ランゴスタをやり過ぎ、肉食竜の気配に怯え、コンガのなわばりを避けて行く。そうして登り、さらに一時間が経った。

「つ、着いたあ」

肩で息をしながら、青年は尻餅をついた。登りきった所に開けた場所があり、目的の木々が疎らに生えていた。

キノコは木の根元の土に埋まっているらしいので、キノコ漁りをしているモスを目印にする。モスがそこで土を掘り始めたら、可哀想に押し退けて横取りするのである。

怒ったモスに突撃されること10回。モスに謝りながらもようやく、目標の数のキノコ

ノコが採れた。

「ああ、腹へったなあ」

太陽の傾きから見て、もう正午にさしかかろうとしていた。早い時間に出発したはずなのに、この体たらくは笑えてくる。体力を使いすぎて、背中とお腹がくつきそうだった。

食料を探してポーチを探る。ギルドから支給される携帯食料が、中に入っているはずである。

「あ、あれ？」

ゴソゴソゴソゴソと、ポーチの中身をかき混ぜて見るごとに、青年の顔から血の気が引いていった。

「うあ、ああ…… 忘れた、のか……」

訓練生でもないようなミスだった。鎧ばかりに気が行って、肝心なことすらまもらないでいた。端から見れば自殺志願者である。

調理のための着火器具も持ってきていないし、近くに食べられそうな物も見当たらない。自分をぶん殴りたい衝動に駆られるが、疲労困憊でそれすら億劫である。

「くそつ、あいつの言った通りになっちまった」

最近調子に乗っている、と言ってきた受付嬢の顔が思い浮かぶ。

確かにそうであったと認める他ない。モンスターへの攻撃に負けない鎧を着て餓死しましたなんて、笑えもしない。運良くこのまま生きて帰ったところで、受付嬢に何て言えばいいのかわからない。ただただ恥ずかしかった。

受付嬢のことを考えていると、彼女から革袋を受け取っていたことを思い出した。ポーチには先日、彼女にねじ込まれた状態のままの袋が、ちゃんと入っていた。

「つたく、今度は何入れやがったのか……」

悪態をつきつつ紐を解く。中身を見て、青年は押し黙った。

干した果物にクルミなどの木の実、そしてたつぶりの干し肉が入っていた。雑多に詰め込まれているのが彼女らしい、温かな饞別だった。

「あいつ……」

しばらく呆けて、それから勢いよく手を合わせ、手でいっばいに鷲掴んで頬張った。

「ぐ、ぐう。くそう、くそう……」

青年は泣きながら木の実を噛み締める。

情けなさとありがたさで、心がぐちゃぐちゃになっていた。忘れてきた携帯食料とはほとんど変わらない食事なのに、こっちの方がずっと美味しく感じられたのだ。

食べ切つて水を飲んで一息つくつと、鎧が少し軽くなった気がした。力が湧いてきて、もうちよつと頑張ろう、と前向きな気持ちになれた。

「ンニヤ、ニヤニヤっ」

立ち上がったその時、茂みの奥から一匹のアイルーが飛び出してきた。野生じやない。服を着ている。

落ち着いて見れば、それはベースキャンプで待っているはずの、仲間のアイルーだった。

「どうしたんだお前。こんなところ来て」

そう言うと、アイルーは乱れた毛並みを舐め整えてから心外そうに答えた。

「どうしたって、旦那がなんだか体調悪そうだったから、心配して見に来てやったのニヤ。ほら、支給品も忘れて行っちゃったし、お腹空いてるでしょ？」

「そっか……」

「規定外の仕事だニヤ。感謝するがいいニヤ」

「うん、ありがとう」

アイルーは薬や携帯食料を青年に渡すと、魚の燻製を取り出してかじり始めた。青年ももう一回、干した肉やら果物やらの保存食を食べる。

「やっぱ、さっきのが一番だったな」

「ん、なんか言ったニヤ？」

なんでもないよ、と青年は笑う。

「ところで旦那、採ったキノコはどこにあるニヤ？」

「ああ、それならあそこに……」

横に置いてあつた袋を取ろうとして、青年は絶句した。

影も形もない。

慌てて探そうとしたら、すぐそこで、モスがそのキノコを入れた袋を食い破っているのを見つけた。苔を生やした豚が、袋に顔を突っ込んで一心不乱にキノコを食いまくっている。

「ぎゃああああああああ」

青年とアイルーと揃って悲鳴をあげた。

太陽がそんな一人と一匹を笑うように、西へと傾き始めていた。



その翌日、街に戻った青年は、クエスト達成の報告をしに集会所へ出向いた。カウンターで頬杖をついていた受付嬢が、入ってきた青年を見て叫ぶ。

「ああっ！あんた、遅かったじゃない。なにしてたのよ」

「わりいわりい。ちよつと色々あつてさ」

納得していない表情の受付嬢。

「ふうん。まあ、無事ならそれに越したことはないけど……その格好で来たってことは、依頼は失敗したってことかしら？」

「え？」

青年がすつとんきような声を出して聞き返す。

「てつきり鎧で凱旋してくるものだと思っていたから。キノコを掲げてね」

青年の今の格好は、大部分が革でできている、ごく一般的なハンターのものだった。青年はムスツとして、相変わらずからかってくる受付嬢の前に納品用の袋を置く。

「あるから、ほれ」

袋に指定のキノコが入っているのを確認して、受付嬢は意外そうに言う。

「あら。じゃあどうして鎧来てこなかったのよ。行く前にあんどけ見せつけてきたくせに」

「あー、それなんだけど」

青年が言いにくそうに頭を掻いて目を泳がせる。

「重くて、無理だった」

受付嬢は目を丸く見開き、次の瞬間には、腹を抱えて笑った。口元に手を当てて堪えているが、ブフツと隙間から笑い声が漏れる。

「笑うなよ」

「んくつ、うふ、あははははっ。だから言ったでしょうに」

恥ずかしがって明後日の方を向く青年に、受付嬢はもうニヤニヤしているのを隠そうともせず聞いてくる。

「じゃあ、あの鎧どうするの？家に飾っておくの？」

冗談めかした口調に、青年は「そりゃあね」と肩をすくめて言った。

「今はまだ無理だから、着れるようになるまではお蔵入り」

受付嬢が青年の言葉に感心したようで、ピタリと笑うのを止めた。てつきり諦めるものだとばかり思っていたが、真剣に鍛えるつもりのようである。

「へえ。あんなだけ装備装備って言ってたあんたがねえ。少し見直したわ」

「見損なつてたのかよ。シヨックなんだけど」

「ふふつ、まあ、頑張りなさいな。期待はしてるんだから」

受付嬢はまた笑った。さつきまでの嫌味やからかう表情とは違う、静かな微笑み。

青年は不覚にも彼女の笑顔にときめいた。出掛ける前にも見た、彼女がたまにする、柔らかな笑い方だった。

それが、彼女の言葉が嘘でもお世辞でもないことを証明していた。

船着き場の小さな栈橋で、中年の鍛冶屋とアイルーが並んで座って、海を眺めながらタバコをふかしている。

アイルーが言った。

「おつちゃんは何んターにとって、何が一番大切だと思ふニヤ？ やっぱり装備かニヤ」

鍛冶屋が少し間を空けて答える。

「んなもん知らん。まあ、強いて言うなら」

「言うなら？」

「大抵、気付かないうちに手に入ってるもんさ」

▼
おわり

古龍觀測録

小柄の老人が、ベッドに横たわる少年の隣に、腰を深く落ち着けている。地面を擦りそうな長い白髭はその半ばほどで結わえてある。杖を持つ手はシワだらけで骨と皮ばかりだが、薄緑の瞳に宿る光には古い枯れているとは思えぬ鋭さがあつた。

その老人の後ろには二人の屈強そうな男が、扉を塞ぐようにして立っている。直立不動の姿勢に、ただならぬ緊張感が見られた。

「すまんね、挨拶もそこそこに座り込んでしまつて。儂も昔はハンターとして名を馳せたが、歳には勝てんのだよ」

老人の言葉に、少年が慌てて答える。

「あ、い、いえ。その、ギルドの方、でしたっけ」

「いかにも。役職などは言えぬが、決して怪しい者ではない。先ほど見せた紋所がその証じゃ」

「も、もちろんです。信じます」

結構。老人は頷いて、少年をじつと見つめる。

少年は傷だらけだった。頭から始まり爪先までも、包帯でグルグル巻きにされてい

る。足も手も固定されて、身動き一つできぬ状態だ。もつとも包帯がなかったからと言って、各所が骨折し、全身を打撲している少年がまともに動けるわけでもないが。

「重ねて謝らせてほしい。そんな状態の君のところへ急にやって来て、話を聞かせろと言うのだから。本来なら心身の回復を待つてからゆつくりと聞くべきなのだろうが、如何せん時間がない。これから辛いことを思い出させてしまうかもしれないが、大丈夫かね」

少年が唾を飲み込み、こくりと頷く。理解している様子に、老人は満足して話を続ける。

「よろしい。では本題に入ろう」

老人が一呼吸置く。病室内の空気が張り詰める。

「古龍、クシヤルダオラを、君は見たのだね」



大都市ドンドルマより北東にある山村は、遙か昔からハチミツと鉱石の名地として知られている。季節毎に色とりどりの花が山を埋めて彩る、たいへん綺麗な場所だ。女は蜂と共に働き、男は鉱夫として汗を流す。それが村の営みであった。

異変は足早にやってきた。

ちようど日が落ち始めた夕刻、晴れ渡っていた茜色の空に、どこからともなく雲が集まってきた。まるで意思のある生き物のごとく、瞬く間に山の上空を覆い尽くす。厚い層を成した灰色の雲は、ポツリと細い雨を疎らに落とし始めた。

「おや、今日は降らないと思っただけどねえ」

花の世話をしていた一人の女性が、顔に当たった水滴を撫でてそんな風に呟いた。

雨脚は強くなり、洗濯物を取り込む暇もなく、土砂降りの豪雨が村に降り注いだ。穏やかだった風も吹き荒れて、さながら暴風雨の様相を呈していた。

ちようど鉋石掘りに行っていた男たちが手ぶら帰ってくる。ばしやばしや泥水を撥ねながら、自分の家を素通りし、村の中央にある集会所の軒下に入り込む。

集会所にはだだっ広い温泉があり、雨に降られれば皆そこへ集まるのだ。男たちが所狭しと集会所の玄関に集まるまで降り出してから十分もかからなかったが、皆ずぶ濡れになっていた。

集会所の大扉から手拭いを女性らが手拭いを抱えて出てくる。

「あんたたち、ピッケルや鉋石はどうしたのさ」

むさ苦しく押しくらまんじゆう状態になっている男たちにタオルを渡しながら、女性の一人が聞いた。

「どうしたもこうしたも、こんな大雨の中持つて帰られるかよ」

「途中で置いてきた」

「夜になつたらどうしようもないからなあ。明日取りに行けばいいさ」
それより風呂に入りたいと、口を揃えて言う男たち。

「風呂は待ちな。今は泥んこになつた子供らを奥様方が洗つてるんだからね」

ブー垂れる男共に、貫禄がある女性が「うるさい」と一喝して黙らせる。

天気が変わりやすい山間で生活する彼らにとつて、雨に濡れるのは日常茶飯事である。

そんなときに風邪を引かぬよう備えとして、すぐにハチミツと干した果物で、甘いスープを作つて振る舞うのだ。これが格別に冷えた身体に効く。

水気を拭き泥を落とした男たちはガヤガヤ屋内に上がり、湯気が立つハチミツのスープを美味そうに飲む。

「そういえば坊やはどうしたのさ」

次々と来るおかわりを注ぎながら、さきほどの貫禄たつぷりの女性がそう言った。

「坊やつてどの坊やだい」

と男が返す。

「ほら、今日お試して鉱石掘りに連れてくことになつてた、あの子だよ」

ああー、と思い出したように男たちが声をあげる。

「採掘所の入り口に、選別所と併せた仮眠小屋があるだろ？あの埃っぽい寢床のところが良かったのか、あいつすつかり気に入っちゃってさ。今日はここに泊まるって言うて聞かねえんだ。一応ハンターさんが一緒にいてくれるから、大丈夫だぜ」

「ふうん、心配要らないならそれでいいんだけどね。それにしても変わった子だねえ。小さい頃から散々、鉱石掘りに行きたいって駄々をこねていたし」

「俺はわかる気がするなあ。やっぱ宝探しは男のロマンだよ」

「俺も俺も。最初に仮眠所に泊まったときはなんか知らんがワクワクしたもんな」

「大して美味くもない備蓄食が、ご馳走に見えたっけなあ。食いすぎて親方に叱られたよ」

そんなことを話していると、女たちが自分の子供を連れながら風呂から出てきた。子供のほとんどは父親を見つけると、満面の笑顔になって飛び付こうとする。「汚れるでしょうが」とそれを奥さんが引き止める。

男たちは待ちに待ったとゾロゾロ風呂場へ入っていく。せつかちで脱衣所でもないのに服を脱ぎ始めていた男のケツを、その妻が張り手でひつ叩く。

風呂を上がった女の一人が、さつきまでハチミツスープを配っていた女性に訊ねた。

「あの、うちの子は帰ってないんですか？」

「ああ。あんたんとこのなら、今日は仮眠所に泊まるんだつてき。ハンターさんが付いているらしいし、この時期は肉食のモンスターも大人しいから心配はいらないだろうよ」

「そう、ですか」

「それにしてもひどい雨だねえ。生まれてこの方、こんな豪雨はお目にかかった覚えがないよ」

木組みの集会所を、スコールが激しく叩きつけ、地鳴りのような音を響かせている。

雷鳴が近くに轟き、面白がつて騒ぐ子供たちと、大泣きしてしまう子供たちの二つに分かれる。小さい子らをなだめつつも、少年の母は不安を隠しきれないといった様子で、集会所の大扉の方を何度もチラチラと見ていた。

止むどころか弱まりすらしない雨と風。堅牢な大扉を打ち破つてきそうな、そんな不気味さと恐ろしきがあつた。

雷が、近づいてきていた。



「私たちが気球船により観測できたのは、君の村が暗雲に覆われ始めた頃までだ。それからは厚い雲と、凄まじい乱気流のせいで、何も分からず仕舞いだ」

看護師に淹れさせた熱い茶を啜って、老人は説明を区切った。

少年は震えていた。顔色は悪く、とても話せそうにない。

クシヤルダオラ。

その名前を出した途端、この調子になってしまった。老人は申し訳ないとは思ったが、それよりも先決すべきことがあった。少年の回復を待つ間、なだめるように、緩やかに話し続けていた。

「ご、ごめんなさい。もう、大丈夫です」

真つ青な顔をした少年が言う。震えはある程度収まっている。老人の付き人が冷や汗を垂らしてバケツを抱えていた。吐くかもしれないからと、老人が持つてこさせたものだ。

「こちらこそ、性急であつた。ふむ、報告によると、君が発見されたのは村からしばらく離れた、採掘現場の奥深い洞窟だつたと聞いている」

少年が頷く。

「ええ……あの日は、僕にとつて晴れの日でした。憧れてた鉱石掘りをやらせてもらえるはずだつたんです。実際にはピッケルを振らせてはもらえなかつたけど。と

でもワクワクしていい」

「それがどうして、血塗れで気を失う事態になったのかね」

再び震えだした肩を抱き、荒い息を吐き出す。

「こ、こつそり採掘したくて、我が儘を言ったんです。今日は、仮眠所に泊まっていなくて。そしたら、そうしたら………」

「落ち着いて。ゆっくりで良い」

「はい……はい。洞窟の奥深くに、居たんです。あんなに大きな生き物を見るのは初めてで、飛竜かと思いました。でも、でもすぐに違うって分かりました。こつちを向いたあいつは、あまりにも………」

老人は黙って、少年の続きを待つ。つつかえつつかえ、深呼吸を挟み、喉に絡むタンを飲み込んで、少年は話した。

「あれは、モンスターなんかじゃない。神です」

そこまで言つて、ハツと思ひ至つたように、少年は身体を急に起こそうとした。しかし重症の体が痛むばかりで、ギプスの固定もあつてまんじりとも動けはしない。首だけが突然跳ねたように見える。

付き人の男たちが驚いて身を乗り出す。それを老人が片手で制した。

「僕の村は、母ちゃんはどうなつたんです。同じ病院にいるなら今すぐ会いたいよ」

叫ぶ少年の頭を、乾いた手が優しく撫でる。老人の薄緑の瞳は同情の陰りがさしていた。

「我らが最高戦力、ギルドナイトの精鋭部隊が、救援に行つておる。しかし極めて情報 が薄い相手だ。君が今、話してくれる内容によつて、形勢が変わるやも知れぬ。教えてはくれまいか。何があつたのか。何を、見たのかを」

老人の言葉には切実さがあつた。少年は唇を噛んで、混乱を抑える。

「僕が見たのは…… たつた一瞬でした。大洞窟の岩壁にせり出している鉱石の塊を、あの龍が食べているところに出くわしたんです」

「色は何だったか、分かるかな。」

「銀色でした。金属みたいな、鈍い銀色。僕はそれに見とれてしまつたんです。あいつは僕に気付いて振り向き…… 息を吹きました。こう、フツと、何気ない感じで。そこから先は、覚えてません。気が付けばこんな状態になつて、今ここでこうしています」

「ならば君は、やつこのブレスに当てられたのだ。文献では、クシャルダオラは風を自在に操るといふ。たつた一息で、虫を払うが如く、人間を破壊してのける質量弾を撃てるといふことじやろう。なるほど、聞きしに勝る怪物ぶりじや」

「そんな馬鹿げたことが……」

堪らずに付き人の一人が、そう呟いた。ため息一つで人を殺せる空気の砲弾。それが本当なら、火竜のプレスが可愛く思えてくる人智を遥かに越えた力だった。

老人が頷き、その付き人に言った。

「そろそろ時限じゃな。待機している第二波の部隊に出動の旨を伝えよ。僅かな口の動きにも警戒せよ、とも」

敬礼一つ、院内にも関わらず、男は病室から駆けて出ていった。少ない情報ではあるが、それがこれからの闘いの行方を左右するかもしれない。ハンターである彼は、そのことを骨身に染みて分かっていた。

夜が開けようとしている。白んだ空には、一つの雲も浮かんでいない。王都が誇る氣象観測隊の雨予報をバカにするような、白々しい天気である。

それは神の御業か、物の怪の所業か。



真つ暗な山道を、男が一人で降りていた。背に負ぶっている少年は、か細い息を小刻みにしている。気を失っている身体は小さくとも重く、男は歯を喰い縛って行かねばならない。

死が迫っていた。時間は幾許もない。

男は左手では少年を支え、右手には松明を持っていた。持つと言っても、グチャグチャにねじ曲がった肉と骨に、藤のツルで松明を縛り付けているだけである。痛みはとつとつに消え失せ、強引に布を巻いてある肩口からは、血が滲む程度だ。男の右腕は既に事切れている。

どれほど歩いただろう。麓のギルド管轄の連絡小屋まで、霞む頭で覚えている限り最短の道を進んだ。

夢か現か、向こうの方に明かりがポツポツと見える。

そう思ったときには、男は一步も歩けなくなっていた。その場に座り込んで、こちらに来る明かりの列に、全て託そうと思った。

「——ろーっ——っかり——!!」

誰かが呼んでいる気がする。血が抜けきった男の耳には、何も聞こえない。ただ安穩と近付いてくる常闇があるばかりだ。

最後に、背にいる少年を想う。死にゆく男の体に、少年の弱々しい鼓動が伝わってきた。

生きている。間に合った。

男は血だらけの顔に微笑みを浮かべて、そのまま動かなくなった。

勇敢なるハンターの亡骸と、彼が命を懸けて守った少年を街に連れ帰るために、ギルドナイトの部隊から、数人が抜けた。

隊長を始めとした残りは、雨の中を進んでいく。目的地である村に近づくほどに雨足は強くなる。しかしそこは誉れあるギルドナイトで、皆愚痴の一つも言わずに、鹿のような速さで山を登っていった。

「……いた」

先導を勤めていた隊員が、片手を上げて隊を止める。目の前に破壊された村の門がある。

ここに来るまでに嵐と比べても遜色のない豪雨だったが、ちょうど、今来たそこら一带だけが、カラリと晴れている。空を見れば丸く雲が開けていて、真上にある月明かりが、辺りを松明よりも明るく照らしている。

それはまるで、台風の日に入ったようだった。

崩れかけた村の門の先。月光にその身体を煌めかせ、クシャルダオラは眠っていた。村は全壊と言って差し支えない状態である。木片があちこちに散らばって、家と呼べ

るものは何処にもない。緊急の連絡を受けてからたつた三時間で、この惨状が作られたというのか。

「第二隊の合流を待ちますか」

部下の極小さい眩きは震えている。大至急向かった第一隊の任務は、被害状況の確認と生存者の保護である。討伐用の第二部隊を待つはずもない。

クシャルダオラとの交戦など、初めから選択肢にも入っていないが、実物を目の前にした部下は冷静さを欠いているようであった。

「そんな時間はない。手筈通り散開しろ。クシャルダオラが寝ているのは奇跡的な好機だ。起こさぬよう、細心の注意をはらって搜索する」

隊長の命令に、固まっていた隊が村を囲むように散っていく。

村の中央、集会所のなれの果てに鎮座し、規則的な呼吸を続けるクシャルダオラに、起きる気配はない。全身を覆う金属質の甲殻。村の入り口に残った隊長と側近は、あまりの神々しさに目を奪われていた。

もう少し近くで見たい。無意識に思った、その時だった。

クシャルダオラの目が開いた。

のそりと巨軀が起き上がる。隊長も、搜索していた隊員も、啞然としてそれを見つめていた。

ミスはないはずだった。虫の音すらない山の中で、熟練のギルドナイトたちは完全に、足音を始めとして気配の全てを殺していたはずだった。何があのモンスターを起したのか、誰にも分からない。

突然吹き荒れる強風。

瞬時に雲が上空には集まり、雨が降り注ぐ。瞬き数回の間をやってきた嵐の中で、クシャルダオラの厳めしい瞳が、強かに隊長を睨み付けていた。

雷鳴にもひけをとらぬ咆哮を最後に、ギルドナイト第一搜索隊の活動は、幕を下ろすこととなる。



それから二日跨いだ日中、ギルドナイトの総本山である大老殿には、重苦しい空気が流れていた。

人里近くに古龍が現れるという事象は、極めて稀である。直近では10年前に、火の国が空飛ぶナナ・テスカトリが落とす炎の塵により、間接的に苦しめられたという記録があるだけだ。直接人を襲ったなどというのは、一世紀遡ってみても事例がない。

戦力差は歴然だった。

火竜の討伐経験をいくつも持つギルドナイト隊長を中心とした、少数精鋭の第一隊。そして彼らが交戦したとの報告を受け、送り出した討伐のための大規模な第二隊。

どちらの隊も、逃げ出す暇すらなかった。

すっかり心を折られた生き残りに事情を聴けば、クシャルダオラが息を吐くごとに隊員の身体が木っ端微塵になっていく光景を、切々と語られる。どれだけ注意しようとも、あれは避けられるものではなかった、と。

二つの部隊が五割以上の犠牲を出した引き換えに持ち帰ったものは、僅かな戦闘の情報と、削り取れた甲殻の破片のみであった。

村は全壊。生き残りは一人もおらず、クシャルダオラがあこの山を去らなければ、行方不明者の搜索もできないと判断が下された。

噂に違わぬ、それはれつきとした天災だった。人為ではどうしようもない、圧倒的な力があつたのだ。

「痛わしや……」

一席に座している、小柄の老人が、そう呟く。

先日、話を伺ったあの少年は、きつとまだ村の誰かが生きていることを切に望んでいるはずである。英雄、ギルドナイトを信じて。

それがどれほど救われぬことか。

パイプを燻らせる。数十年、慣れ親しんだ煙の味は、どこか辛く、苦かった。



おわり

続 古龍観測録

伝説とは、語り継がれるがゆえに伝説なのだ。

時を経て、大事件にあらゆる尾ひれが付き、幻想的に話が彩られてこそその、伝説である。そうなるまでは大抵、それはただの事件であり、この世の出来事の内だ。

しかし稀に例外というものが出てくる。

誰しもが記憶に強くとどめることになる、尋常ならざることがあるのだ。

これは伝説になるのだろうかという、確信めいた思いを掻き立てる出来事が。



どこぞの週刊紙は、ドンドルマの街は夜こそ輝くと紹介したことがある。それは射た見解であり、ハンターの総本山たる大都市は、夜になれば酒場という酒場にならず者じみたハンター達が集まり、そこいら中でドンチャン騒ぎをしている。

しかし大通りから外れて住宅街へ行けば、さすがに夜の静けさが取り戻され、その中

にひっそり紛れるようにして営む店もまた、騒ぎとは無縁の、穏やかな空間を提供するものである。

その日は雨だった。

それもスコールのような大雨なので、祭り囃子みたく聞こえてくるはずのバカ騒ぎも、激しい雨音にかき消されていた。

密集した住宅街からさらに街の端へと行き、もはや家とも呼べぬ場所に住む、正真正銘のならず者どもの住処。その一角に、安譜陳を精一杯きれいにしたような小さなバーがあった。

灯りは壁にかけられた蠟燭だけの薄暗い店内で、二人の男が酒瓶とグラスが乱雑に乗ったテーブルを挟んで何事かを話し合っていた。

一人は頬がこけた痩せぎすの中年で、欠けた歯と痘痕だらけの人相がいかにも悪人の印象を与えている。汚ならしい格好からも、この辺りの貧民街の人間であることは明白だ。

もう一方の男は対照的で若く健康そうで、いかにもまともな職に就き、まともな生活を送っているように見受けられた。格好こそラフだが、座り方の品位からしてこの辺の浮浪者とは違っていた。

カウンターの奥にいるマスターは、いかにも怪しげな客二人にまるで興味関心がな

いようで、淡々と店仕舞いの支度を始めていた。

「お会いできて光栄です。正直ホツとしています。なにぶん若輩者なので、こういった場所での振る舞いも分からず、ひよつとすれば身ぐるみを剥がされる覚悟で来たものですから」

そう言ったのは、若い小綺麗な男の方だ。

瘦せぎすの中年は赤ら顔で口をへの字に曲げ、安物の蒸留酒を自分のグラスに注いだ。中年の足元には既に空っぽの酒瓶が二本転がっている。

「ずいぶんお喋りだな。良いとこの奴らは皆そうなのかい」

「どうでしょう。気分を害されたならすみません。良いところかどうかはさておき、私がお喋りなのは自覚しています。記者は人と話すのも大切な仕事なのでご容赦ください」

記者と名乗る若い男はぺらぺらと滑らかな調子で言った。

中年はそれを鼻で笑い（笑うというよりは粘っこい鼻水を啜ったような音だったが）グラスの中の酒を半分、一気に飲んで荒い息を吐いた。

「なら場合つてもんを考えるんだな。次に長たらしくくつちやべったら、瓶で頭かち割るぞ」

「気を付けます」

短い記者の答えに満足したようで、中年は残り半分の酒をあと、鬱陶しげな表情を潜める。

「それで、約束した物は持ってきたんだろうな」

「これですな」

記者が手提げ鞆から取り出したのは、薄く小さい木の箱だった。

金銭が入ってそうには見えないそれを中年は記者から受け取り、中身を確認した。

「おお、これこれ」

木箱から葉巻を一本取り出す。中年の取材報酬はその高級そうな葉巻のようだ。

「ハサミは持つてるかい」

「専用のがありますよ」

記者はギロチン型のカッターを中年に渡した。葉巻の吸い口を切るためだけの、贅沢な道具だ。

「物持ちが良いんだな」

「趣味なもので。それも葉巻と一緒に差し上げますよ」

「ふん。金持ちは気前がいいな」

憎まれ口を叩き、中年はマッチを擦って葉巻に火を灯した。ゆったり煙を吸って、溜めてから吐き出す。バーによく似合う、独特の匂いが立ち込めた。

「さて、では取材に移りますかね。是非お聞かせください。あなたは『彼』を見たの
でしよう?」

記者の言葉に、中年は酔っ払って惚けた顔を引き締め、または引き吊らせ、その目は
真剣さを帯びた。

「『彼』ね。見たさ。見たともさ。これまでも何度となく話してきたが、誰も信じな
かった。あんたは信じるのかい」

「信じますとも。それが私の勤めですから」

中年が追加の酒を注文する。無表情のマスターが席までやって来て、愛想もなく酒の
ボトルをテーブルに置いていった。

新しく酒を注ぎ、今度はそれを舐めるように飲みながら、中年の男は語り出した。

「では話そう。そうさな、あれは人間じゃあなかったよ」

▼
俺は今ではこんな所で腐っちゃいるが、若い頃は方々の辺境を巡るトレジャーハン
ターだったんだ。ギルドに登録していない、非公式のフリーのハンターだがね。

鬱蒼とした熱帯雨林。

熱砂と寒波が行き交う砂漠。

灼熱の活火山。

色々な場所に行った。ポイントはできるだけ人が嫌がりそうな、つまり人間が寄り付かなさそうなどころに行くことだ。そうすりゃ獲物はたくさん採れるし、誰それに犯罪者として訴えられることもないからな。

あ？　今までで行ったところで一番良かった場所？　おまえの用件とは関係ないだら……ふうん、次に書く特集のネタにねえ。まあ、シガーカッターも貰っちゃまったし、いいか。

一番良かったっていえば、海だな。モガって知ってるだろ？　そう、辺鄙なところさ。俺はあの頃は基本野宿の生活だったが、あそこは過ごしやすかった。

昼に吹く潮風は気持ちがいいし夜もあまり寒くならない。景色も良くて、なにより飯が美味しいのよ。透き通った海に潜ればな、蟹やウニが簡単に採れるんだ。

あそこにいる間は、トレジャーってよりはバカンス気分だったな。

逆に一番厳しかった所は、まあ間違いない雪山だな。火山の暑さも相当しんどかったが、極寒の地獄に比べればなんてことはない。寒すぎて身動きできなくなったこともあった。

ほら、俺の右手の小指がないだろう。凍傷で切り落としたのさ。足の指も二本ほどな

いが、まあ雪山のハンターにはよくある話だ。

そうそう、これから話す本題も、雪山での出来事だぜ。それくらいは調べてきてるか。うん、フラヒヤ山脈だ。

俺は麓の村をベースキャンプにして探索をしていた。俺みたいなグレーゾーンのハンターが泊まりに来るような村は、結構あるものなのさ。

そんなときは雪山草のブームが来ててな。あの雪下で育つ甘い山菜が、高額で飛ぶように売れた。

俺もそれを狙った。体力も経験も、人一倍自信に溢れていたから、イカれハンター以外の人間は寄り付かないような高所に登っていった。俺もイカれてたんだと思うよ。

洞窟を抜けるのはモンスターに襲われる可能性が高いから、岩肌をよじ登った。酸素が薄いんで、ランポスの鳴き袋に麓の空気を入れて持って行ってな。すげえ膨らむけど破けねえんだ。休憩のときに少し吸うだけでもだいぶ違うものさ。

それで手付かずの雪原を掘り返し、夢みたいな量の雪山草を採り、有頂天になって帰り支度をしていた。

思えば兆候は、その時にやってきた。

山は天気が変わりやすいなんてのは子供でも知っているが、あれは酷かった。大抵慣れているれば遠くの雲の形から天気の予想ができるもんだが、その時はなんの前触れもな

かった。

どこにもなかった雲が意思を持ったように集まり出して、気付けばブリザードが吹き荒れていた。こうなってしまうと、行くことも退くこともできなくなる。

マイナス10℃の中で立ち往生することの恐怖が分かるか？　さらには吹雪の強い風が体力をことごとく奪っていくんだ。あれは地獄だった。

俺はなんとか岩の隙間に身を振って入れ、難を逃れることにした。あとは風が止むのを祈り、運に任せるのみさ。

無事に帰れることだけを考えるようにしながら、意味がわからん吹雪の中で縮こまっていた、そんな時さ。

銀色の龍が舞い降りたんだ。

凶鑑ですら見たことでもない龍だった。

俺がいる場所からはかなり遠かったが、ホワイトアウト寸前の視界で、やけに奴の姿がはつきり見えた。金属質の滑らかな甲殻は、フラヒヤの雪よりも冷たい印象を受けたな。

敵めしいそいつの面を見て、俺はこの吹雪の原因が奴にあることを、本能で実感した。あれが伝説に聞く、古龍ってやつなんだな。

思い返せば、その日の雪山はなんだか様子がおかしかった。

モンスターが一匹もないのさ。普段群れをなしているポポたちも、そのポポを探して回る白ランポスも、やたらめつたらに縄張りを広げる雪猿のブランゴも。

避けても見かけるはずのモンスターの、一切合切がいなかったんだ。

野生っていうのはすごいな。地震や台風が来るときにはそれを予感して、避難するんだからな。

つまりだ。あの銀色の龍、クシャルダオラは、そんな大自然の権化つてことだ。

クシャルダオラが一步踏み出せば奴を中心に突風が吹き荒れ、雪を舞い上がらせた。

恐ろしかったが、この世のものじゃないみたいに神秘的だった。

息も潜めてそいつに魅入っていると、あることに気が付いた。

クシャルダオラの角の長さが、不揃いなんだ。

奴の後頭部には何本も角が生えているが、頭頂に近い一際大きな二対の角の右側が、少し短かったのよ。見間違えかとも思ったし、またはもともとそんな形なんだろうとも思った。

しかし、あの神々しい生き物の一部にしては不自然だと、理屈ではない確信があった。だからと言ってクシャルダオラに傷を付けた者がいるなんてことも、到底信じる気にはなれなかったね。同じ古龍同士が戦えば、そういうこともあり得るのか？天災の喧嘩なんて想像もしたくねえが。

だが認めざるを得なかった。奴に対抗する存在がいることを。

クシャルダオラが突然咆哮をあげた。研ぎ澄まされた金属が割れたような、甲高い雄叫びだった。何十メートルと離れているのに、俺はあの時ほど死を側に感じたことはない。

その直後、爆音が鳴った。

それは生き物の声じゃなかった。クシャルダオラに向かって、爆発物が放たれたのさ。自然にはない人工の燃焼だ。クシャルダオラに届くことはなく、暴風に弾かれたがな。

吹雪を掻き分けるようにして現れたもう一つの存在を見て、俺はついに寒さで頭が狂っちまったのかと思ったよ。

考えられるかい。

古龍の前に人間が立ちはだかつていたんだぜ。



「それが、『彼』であると」

それまで一言も発つさず、中年の男の話に耳を傾けていた記者は、震える声でそう聞

いた。

「たぶんな。お前が探している奴かどうか、俺は知らんが」

中年は三本目の酒瓶を脇にどけた。もう空になっていたが、中年は顔が赤くなっている以外に酔った様子はない。

アルコールよりも、当時の強烈すぎる記憶が、彼の脳を占領しているようだ。

「何をやっているのか全部分かったわけじゃねえ。凄まじくてな、呆然と見ているしかできなかった」

「戦っていたのですよね」

「そう、そうだな。一人の男が、古龍と戦っていた。男は現れたとき、銃を持っている。ハンターがよく使うボウガンより、いくらか軽量化されているようだったな。あの爆発はきつと、そいつでクシャルダオラに榴弾を撃ち込んだんだ」

「銃でクシャルダオラと渡り合っていたと言うんですか」

「いや、獲物はそれだけじゃなかった。短刀、短槍、他にもいろいろ持っていたかな。どれもハンターにしては小さすぎる武器だった」

「小さいとは……どれくらいでしょう」

「昔のことだからな、そんなのは覚えてねえよ。そうさな、長さは少しでかい包丁くらいじゃないか？」

記者は舌を巻いた。

相手は人間の何倍もの巨体を持つモンスターである。いくら切れ味が良くても、包丁程度では役に立たないことなど素人でも想像に難くない。

「すげえ光景だったぜ。突発的に、次々と雪原が吹き飛ぶんだ。何もしていないように見えたが、たぶんあれはブレスだったんだろうな。まるで不可視の大砲のようだったよ」

「25年前、ギルドナイトの精鋭部隊が敗北を喫したという、あの」

「しようがねえだろうな。あれは人間が対抗できるものじゃなかった」
記者が固唾を飲み込む。

人間が太刀打ちできないことなど百も承知だ。

しかし、今話しているのはまさに、その人間が天災に立ち向かっている話なのだ。

一人の男が伝説へと挑んだ、現実の話だった。

中年の男の語り口調には熱が宿り、その様子はケチな浮浪者から、世界中を飛び回る探検家のものになっていた。

そんな彼が話す英雄譚はお伽噺のようでありながら、どこまでも現実味を持っていた。

「ブレスは『彼』に当たらなかった。ノーモーションに見える敵のどこに注意してい

るのか知らんが、雪の足場の悪さなどものともせずには避けやがる」

「避けるって、どのように」

「さあ、転がっていたりもしたが、気付けば別の場所に移動していた感じだ。敵が攻撃しようと思識する、それ以前に行動しているようだった」

「クシャルダオラには絶対強者としての意地があつたんだろう。避けながらも距離を詰める『彼』に対して、奴はその場から動かなかつた。

自身の異能に絶対の自信があつたんだ。もしくは、それ以外の戦い方などしたことがなかつたのか」

「『彼』は間合いまで辿り着いたよ。ブレスを神憑り的な反応で避けきり、どうやったのかクシャルダオラが纏っているはずの暴風の鎧すらすり抜け、片手で持った短筒からさらに榴弾を放つた」

▼
大自然が慄いていた。

世界を跨ぎ地上を遙か見下ろす山脈の高峰。何者をも寄せ付けない凍てついた場所。雲と雪と風が支配するこの世ならざる地で、鋼の龍と、人間の男が、雌雄を決してい

た。

一直線にクシャルダオラの頭を穿つはずだった榴弾は暴風にさらされ、目標間近で軌道を大きく曲げる。

しかしその瞬間に、何にも当たっていないのに、火薬仕込みの弾丸は爆発した。『彼』が仕込んだ、発射後すぐに爆発するよう細工した特製の弾だった。クシャルダオラの風の性質と、第六感的な反応速度すら計算の内に入れている。まるで、この一瞬のためだけに設えたような代物だ。

一瞬だけクシャルダオラの集中が途切れ、風のバリアが乱れる。

その隙を無駄にせず、『彼』はクシャルダオラの喉元に、いつの間にか構えていた短槍を突きつける。

狙うは龍の急所。逆鱗の隙間、その一点。

針を縫うような正確さで放たれた突きは、翼で力任せによつて起こされた風圧に止められる。クシャルダオラが持つ、強者に似合わぬほどの危機察知能力が成せる判断だった。

『彼』は槍を突き通すことも退くこともせず、目の前に来た鋼の翼をがつつり掴んだ。翼と共に急激に中空へ上昇した『彼』が、いさつきまでいた所を、鋼鉄の巨腕が振り抜かれる。分厚い雪の層が消え去り永久凍土の地面が現れた。古龍の信じがたい膂力。

だが『彼』も、その力は人間離れしていた。台風より猛々しく振り上がった翼を掴んだまま、片手一本で己の体勢を維持していたのだ。

直後繰り出される第二の刺突。

凄まじい金属音を立て火花を散らし、翼の付け根に短槍の切っ先が潜り込む。

クシャルダオラが嘶いて再び暴風を撒き散らす。それにフワリと乗るようにして『彼』はクシャルダオラから距離をとった。

握る槍には僅かに赤い血が着いている。穂先からたつたのーセンチ弱。

それはクシャルダオラの異常な防御機能を示していると同時に、天災と並び称される古龍に、凡百の存在である人間が傷を負わせた証だった。

恐るべき体幹でクシャルダオラの背後に降り立った『彼』がダメ押しでの攻撃をかける。まるで見えているかのように、クシャルダオラは死角から迫る槍を尻尾で弾き飛ばし、巨体を瞬時に百八十度回転させる。

『彼』の神経は極限まで研ぎ澄まされていた。

槍は投擲されていて、すでに彼の手には別の武器が握られている。銃も雪の上に放り出し、両手で短くも斧のように無骨な刀剣を上段に構えていた。

クシャルダオラが振り向く。

『彼』はその頭部を狙い、渾身の一撃を振り下ろさんとした。

「それから先のこととは分からん。さらに強いブリザードが吹き荒れ、視界が完全に白一色になっちまったからな」

「決着は、決着はどうなったのです」

「それが分からなかったんだよ。しばらくすると吹雪は夢だったみたいになり、空は晴れ渡った。そしてその場にはもう、クシャルダオラも『彼』もいなかった」

「そこまで語り終えて、中年の男は一息ついた。いつの間にか身を乗りだし、拳に力を込めて話していたのだ。」

記者も緊張を解いたように、ハンカチを取り出して額の脂汗を拭いた。

「ありがとうございます。この度は素晴らしいお話を聞きました。貴方のような人がいてくれて良かった」

「俺の若気の至りで偶然そこに居合わせただけさ。奴らにはお互いを殺すこと以外眼中になかった。しかし分からんね。なんで今になって、十年以上も前の話を取り上げようなんて思ったんだ」

中年の男は葉巻を吹かして記者に訪ねた。煙の向こうで記者が答える。

「実はまだ公になつていない話なのですがね。つい最近、あるモンスターの遺骸が発見されたのですよ」

まさか。

酒と煙草の酩酊も忘れ、中年の男はまじまじと記者を見た。

「風翔龍、クシャルダオラです」

公にされていないということは、必然、秘匿性がある情報だということだ。

インタビュー先の中年と寡黙なマスターしかいない夜中の店内だとはいえ、それを漏らしてしまう記者も、伝説の熱に浮かれているようだ。

「バカな」

独り言のような呟きが漏れる。常識の範疇を越えた前代未聞の重大事件だった。

「ある巨大遺跡にて、名門の探検隊が見つけたようです。寿命で死んだとも考えられます。むしろその方が自然ではある」

「古龍も不死身じゃない」

中年の男の言葉に、記者は深く頷いた。

「そう、貴方ならばそう言えるでしょう。だからこそ私はコンタクトを取ったんです。まだ私が子どもの頃だったかな。まことしやかに囁かれていた、ある一人のフリーハンターの噂。クシャルダオラの一件を聞き付けてから四方八方に手を伸ばし、あらゆる

る所に聞き込みをかけ、ようやく貴方に辿り着けた。本当に、いい話が聞けましたよ」

「ご苦労なこつた」

記者の熱弁に照れ臭そうに視線を逸らし、吸いきった葉巻を灰皿に押し付ける。すでに記者から受け取ったほとんどの葉巻を吸ってしまった。

立て付けの悪い店の扉が軋んで開き、ドアベルが来客を告げた。冷えた外気が入り込んでくる。

新しい客は背の高い男で、使い古された外套を着ていた。いかにも貧民街の人間のように、顔は傷だらけで歩き方も足を悪くしているのか、どこかたどたどしい。

それで区切りとするように、記者は中年の男に改めて礼を述べ、支払いを済ませて店を出ていく。

中年の方もほんの少し、外套の男を見つめてから、浮浪者のくたびれた雰囲気に戻って、夜の貧民街に去っていった。



「ずいぶんとご無沙汰だったな」

二人が出て行ってから、マスターがカウンター席に座った外套の男に口を利いた。注

文もされていないのに、一杯のカクテルが男の前に置かれる。

男は外套を脱ぎ、カクテルを美味そうに一口飲んでから、傷だらけの顔で微笑んだ。
「なあに。最近、良いことがあったからさ」



おわり

熱い瞳に焼き付けて

戦わない狩人ハンターがいるなんてことは、夢見がちな少年でさえ知っていることだ。むしろ、ハンターと呼ばれる職業に就くほとんどの人間は採集を生業としていて、さらにその大部分は僅かな鉱石やちよつとばかり珍しい虫なんかをはした金に替え、その日の糊口を凌いでいる有り様だ。

数々の物語では英傑のごとく描かれるハンターという職業も、現実というフィルターを通してしまえば何ともしよっぱいものである。

「ねえ、お話しよう」

それだから男は今、困っていた。

まだ10歳にもなつてなさそうな小さい女の子が、男の足に引つ付けて話をせがむ。

「ハンターって色んな場所に行くんでしょ？ いいなあ。ねえつ、オーロラって絹のようだと聞くけど、それって本当なの？ 砂漠では、すつごく大きい竜が砂の中を泳いでるって、一体どうやってるの？」

かれこれ一時間はずつとこの調子だった。この少女はハンターの毎日がロマンとスリルに満ちていると信じきっていて、現役のハンターである男にお伽噺のような冒険譚

を語って聞かせろと言うのだ。

男はほとほと困り果てていた。なにせ日雇いの労働者と大差ない自分に、何者でもない自分に、心踊るような話の引き出しなど一つも無いのだから。

「良かったじゃねえか。なつかれてよ」

そう声をかけてきたのは馬車引きの馬の手綱を握っている相棒の採掘家だ。知り合いのツテで紹介を頼み、今日からのクエストを案内役として手伝ってもらうことになった次第である。

知人曰く、鉱石に詳しいベテランの採掘家とのことだが、酒を片手に少女になつかれている男を冷やかす姿は、ただの酔っぱらいの中年だった。

「勘弁してくれよ、他人事だと思つて。あんたは面白い話とかないのか」

男がそう言うのと案内役の中年は構わず酒をグビグビ飲み、吐き捨てるように言った。

「俺はな、ガキは嫌いなんだよ。特にそんなみすぼらしいガキはよう。鬱陶しいんなら二、三発ぶん殴つておけば大人しくなるぜ」

男の裾を握る少女の手が強張った。顔を覗くとさつきとは打つて変わつて、恐怖に顔色が蒼白になっていた。

「できるか、そんなこと」

少女の頭をポンポンと軽く撫でるように叩きながら、男は侮蔑を込めて言った。

男はこの中年が嫌いだった。品性がないからである。子供に暴力を振るうことを良しとするなんて許しがたいことだった。

それでも、今回の仕事には必要な人間だ。最近になって富裕層の間で宝石集めが流行りだして、ピンからキリまでの鉱石の価値が軒並み急上昇し始めている。それで一攫千金を狙うために、高い前金と、採れ高から六割の報酬を渡すことを条件に、この中年を雇ったのだ。

中年はフンツ、と嘲るように鼻で笑って、馬の方に向き直った。少女の手から徐々に緊張がなくなっていくのを感じて、男はひとまず、安堵した。

三人を乗せた馬車は街からおよそ半日をかけて、目的地である山あり谷ありの森林地帯へと移動する。街道から外れればすぐにそこは大自然となり、空も何故か違って見えてくる。

低い草木しかない草原をゆるゆると渡り、やがて植生が変わり大きな木々が雑多に茂る森の縁までたどり着く。

「今日はここでキャンプを張って、明日たんまりと掘ろうや」

馬車を止めて馬の綱を木にくくり着けた中年がそう言った。空はすでに茜色になり始めていて、東から夕闇が広がってきている。

男も異論はなく頷いた。

「お前、火の番はできるか」

男が少女にそう聞くと、少女は嬉しそうに答えた。

「うん、できる、できるよ」

「そうか。じゃあ馬車の薪を下ろしておくから、頼んだぞ」

少女は火を焚くのが大変上手だった。駆け出しのハンター等よりも遥かに手際がよく、太陽が暮れるまで火が着けば良いと踏んでいた男の予想を、良い意味で外してくれた。

夕飯は男が作るようになった。中年が明日の準備をするとかで、馬車の中に閉じ籠ってしまつたからだ。

作ると言っても男の料理はとても簡素かつ大雑把で、持ってきた乾燥させた芋とキノコ、そしてその辺りに生えていた山菜を大鍋一杯に煮込み、塩で味付けしただけのものが、その晩の夕食だった。

肉が食いたかつたらしい中年には不評だったが、少女は喜んで食べて、どんどん何杯もおかわりした。

「じゃあ俺は馬車で寝るがよ、おまえさんはどうするね」

あくび混じりの中年の質問に、男は首を振って答えた。

「いや、狭いだらうから遠慮しとくよ。火も消えないよう見張っておかなきゃいけな

いし」

すると中年は怪訝そうな顔をして、

「そんなもん、ガキに任せときゃいいだろ。この役立たずはそれくらいしかできないんだからよ」

男の中に真つ赤な怒りが燃えた。しかし賢明にもそれは押さえ込み、平素な口調で返す。

「一晩中となると、そうもいかないだろ」

「お優しいことで」

中年はさして興味も無さそうに言つて、再び馬車の中に戻り、カーテンを占めた。すぐ後から、唸るようなイビキが聞こえてくる。

「つたく、どうしようもないな、あのオツサンは」

男が火に薪をくべている少女に言った。

少女はどうやら中年が本当に寝たかどうか聞き耳を立てているようで、しばらくして、安心したように息を吐いて立ち上がり、おぼつかない足取りで小さく右往左往し始めた。

なにかを探しているような様子に、男は声をかける。

「俺はこつちだよ」

すると少女は男の方を向き、うんつ、と嬉しそうに返事をして、数歩ほどの距離を小走りで行って来た。

勢い余ってぶつかりそうになったのを、男が軽々受け止める。

「おい、危ないぞ」

「ごめんなさい」

男の注意に、少女は照れたように笑った。

男は焚き火の前であぐらをかいて座り、その上に少女を乗せる。

「寒くないか？」

「ううん、温かいよ」

そう言う少女はうっとりとして焚き火を見つめる。男は、今の位置からでは見えないが、少女の瞳のことを思い、憐れんだ。

少女は、目が見えないのだ。

そもそもこの少女をこうして連れてきたこと自体、男の本意ではなく、まったく予定にないことだった。

知人に探掘家の紹介を依頼した際に、遠征では何かと身の回りの世話をする人間も必要だと言われて、余分に渡した金で人手を見繕ってもらった。

その結果が、この盲目の少女というわけだ。

男にとって日を跨ぐ遠征など初めてのことで、勝手もよく分からないまま人任せにしたツケとも言える。

もちろん男は目を白黒させた後に、知人を問い詰めようとしたが、契約書にはもう判を押してしまったことを思い出し、投げやりな気持ちで、胡散臭い中年のハンターといたいけな少女を伴い出発した。

自分の頭の弱さを至極残念に思っていると、少女がその小さな手を、男のゴツくて大きな手の甲に乗せてきた。

「やっぱり、邪魔かな」

少女の哀愁漂う声に、男が聞き返す。

「突然どうした」

「今、不安そうだったから、あたしのことで悩んでるのかなって」

「そんなことが分かるのか」

少女は笑った。少女らしからぬ、悲しみを抱えた微笑みだった。

「なんとなく分かるよ。こうして近くにいると、よけいに。普通は分からないものなの？」

目が見えないと、それ以外の感覚が鋭くなると聞いたことがある。男は少女の火付けの手際の上さを思い出し、妙に納得した。

「そうだな、俺はよく分からんな。たぶん、お前の目の代わりに、耳とかが頑張ってるんだろな」

「そっかあ」

少女の声は少し嬉しそうなものに変わった。まるで新しい発見をしたかのような。炎の揺らめきも見えないのに、網膜を透けてくる明かりは分かるのか、少女は小さくなりかけていた火に適切に薪をくべる。

「あたし、これが普通なのかもしれないって思ってたの。目が見えないことじゃなくて、気持ちに分かるってことね」

「気持ち、ねえ…… まあ安心しろよ。確かにちよつとは不安だけどさ、お前が邪魔ってことはないよ」

男の心からの言葉だった。それは少女にも伝わったのか、少女はホツとため息をついた。

「良かったあ。なんだかね、不安の感じがお母さんとすごく似てたから、びっくりしちやった」

「お母さん？」

男は少女の言葉に引つ掛かりを覚えた。と言うのも、少女の親はもういないものだと、勝手に決めつけていたからである。

なにせ盲目であるにも関わらず、慣れ親しんだ大人の随伴もなく小間使いとして連れてこられたのだから、知人の元で飼われていた、身寄りのない子供だろうと思つていたのだ。

それが売り払われる形で追い出されたのだと、男はそう予想していた。

「お母さんがいるのかい？」

「うん、いるよ」

少女は当然そうに答えた。

「お父さんはいないけどね、お母さんはいるの。ずっと二人で暮らしてるの」

二人で。

少女の口ぶりからは、少女とその母親は今も一緒に暮らしているようだった。

しかし男は嫌な考えを巡らせる。

母親がいるとして、その母親と一緒にいるとして、ならば何故、この少女はこんな所にいるのか。何故目も見えない小さな子供が、怪しいルートを通つて、ハンターの小間使いなどと紹介されて来たのか。

少女が着ているボロ布の合間から見えるアザに似た傷痕が、彼女の境遇を何よりも雄弁に語っているように、男には見えた。

「……火の付け方は、お母さんに習つたのか？」

「うん！お母さんはね、もっと早くできるんだよ」

「そっか……」

「あ、でも、ここだけの話ね、料理はお母さんより、お兄さんの方が上手だったよ。お母さん、料理はそんなに得意じゃないんだ」

少女はえらく今日の鍋を気に入っていたようだ。男は苦笑して、

「ありがとよ。さあ、そろそろ寝るか。最初は俺が火の番をしておくから、お前は先に寝な」

「でも、あたしの仕事は……」

「夜は長いんだ。交代交代でいこうぜ」

頭を撫でると、さっき話していたように男の感情が伝わったのか、少女は次第に瞼を落とし、やがて静かな寝息を立て始めた。

男は羽織っていた厚手の布を少女の方までそっと回してやる。

森に近い夜の暗闇は濃い。のっぺりした黒い帳にさらに厚い雲が覆っていて、星の一つも見えない空が冷たく淀んでいる。それが男の胸に、なんとも言い表しがたい気持ち悪さを去来させた。

とりあえず、次にハンターの物語をせがまれた時に何か一つでも話せるよう、作り話でもいいから、考えておこうと思った。

「良い鉱脈だな。あまり人の手が入ってねえ。街からかなり離れた所まで来た甲斐があるぜ」

「ああ」

男と中年のハンター二人は、森林の中にある岩壁にツルハシを振り下ろしていた。朝から掘り続けて数時間、すでに予定以上の収穫を上げていた。

腰に巻いた袋には、澄んだ青が覗く上質なマカライトの原石や、竜輝石と呼ばれる竜の鱗に似た模様の美しい鉱石が詰まっている。

「さて、ずいぶん重くなってきたな。大将、そっちはどうだい」

「ああ」

まるで心ここに在らずといった男の生返事に、中年は舌を打った。

「さつきからどうしたんだ。何か考え事か？」

そう言われて男はようやく我に帰ったのか、中年の方を見て答えた。

「あ、いや、たいしたことじゃない」

「……………ふうん」

男は昨日のキャンプ地に置いてきた、盲目の少女のことを考えていた。

さすがに身体ができていない上に目が見えない子どもを連れて、森の中や洞窟内を探検することはできなかった。

一応、何かあった時のための信号弾を持たせ、手探りでも分かるよう使い方を教えたが、一日中あの少女を置いてけぼりにするのは、後ろ髪を引かれる思いだった。

「しかしあの凶暴な肉食竜どもの姿がこれっぽっちも見えねえな。寒冷期のど真ん中を選んだのは正解だったな」

「そうだな。いくら恐ろしいって言っても、奴等も体温を維持できない爬虫類だ。夜にあれだけ冷えればな」

男はあくび混じりにそう言う。

少女を起こすことが忍びなく、結局一晩中、起き続けて火の番をしていたのだ。

少女は朝起きたら顔を真っ赤にして男に謝ってきた。そして今日こそは自分が起きているから、と言った少女の表情は昨晩よりもいくらか晴れやかだった。

「おいおい、お前まだこんだけしか採れてないのかよ」

「悪かったな、あんたと違って慣れてないんだ」

男の巾着には中年が採った量の半分ほどしか入ってなかった。脆い結晶などを壊さず綺麗に掘り出すのは、かなりの技術が必要なのだ。

しかしそれでも、火の番も申し出ずに一人だけ馬車でたつぷり寝た中年に言われる筋合いはないと、男は心の奥で齒軋りを立てる。

「まあいい。じゃあ俺はそろそろ戻って削り出しでもしてるがよ、お前は どうする」
「削り出し?」

「原石にくつついてるいらぬ石を落とすのさ。そうすると少しばかり価値が高くなる」

「へえ、器用なんだな。俺はもう少し掘るよ。感覚が掴めてきたしな。あんた、俺の鉱石も持って削り出しつてのやつといてくれよ」

男がそう言つて鉱石が入った袋を渡すと、中年は意外にも素直にそれを受け取り、了承した。

「ああ、いいぜ。じゃあ精々頑張れよ」

もつと渋るかと思つていたので、男は怪訝に思いながらも、新しい袋を腰にくくり着けて鉱石掘りを再開した。

慣れたことと鉱石群が密集しているポイントを当てたことにより、男の袋はみるみるうちに満たされていく。

そうして、もうそろそろ戻ろうかと思ひ歩き出したのだが、男はあるものを見つけた。

「なんだこりゃ」

不可解な足跡が、水捌けの悪い緩んだ地面についている。

鶏のような前に三本、後ろに一本の鋭い爪痕。しかしその大きさは男の足など比べようもないほどだった。成体は並みの人以上の大きさになる肉食竜、ランポスの姿を思い浮かべるが、それにしたって、この足跡は巨大だった。

不穏な想像をする前に、男の思考は打ち切られた。

非常用の信号弾が空に上がったのだ。それは、少女の身に異常が振りかかったことを示している。

男は空に向かって上った地味な花火を見て、手に持っていた鉱石を放り捨て、すぐに走り出した。

シダの茂みを乱雑に切り伏せ、倒れた木を飛び越え、行きは迂回した道を通らず直線を選び、キャンプ地までの最短距離を行く。

使われることはないだろうと考えていたから、まるで寝耳に水だった。肉食の獰猛なモンスターは今の時期は活動を休止していて、あのキャンプ地が厄介な奴らの縄張りでないことも、確認したはずなのだ。

それならあの信号が意味するものは何なのか。

先ほど発見した足跡が脳裏を掠めた。悪寒が走り、嫌な汗が手にじつとりと滲み出

る。

しがないと言えどもハンターである男は見事な早さで森林を駆け抜け、一時間近くかけて歩いて来た道程を十分に戻り、林の外へと飛び出た。

そして、目の前の光景に絶句した。

「やめてっ、やめてよっ！」

そう叫んでいるのは少女だ。盲目の少女が、中年の足にすがり付いて泣いている。

中年は現れた男を見ると顔に焦りを浮かべ、一転、悪魔のような形相で少女を睨み付け、その脇腹に何回も蹴りを入れた。

「クソツ、さっさと放せ！死ね！」

鳩尾を蹴り上げられたのか、少女はえづいて中年の足を放す。

中年は馬に飛び乗り、男の方を一瞥する。馬の背には自身が持ってきていた荷物や、一部に男の荷物が積まれている。

その意味が分からないほど、男は愚鈍ではなかった。

「ふざけるな！」

怒号をあげて飛びかかろうとするが、中年はニヤリと嗤い、馬を駆って行ってしまった。遠くなっていく背中に銃を乱射する。しかしどんどん小さくなる的に当てるのは容易ではない。

咄嗟に追いかけてようとして、地面にうずくまる少女に気が付き、一瞬の躊躇いの後、少女の方へ駆け寄った。

「おい、おい、大丈夫か」

まだ咳き込んでいる少女の背をさする。大人に思いきり蹴られたのだから無理もない。血を吐いていないことから内蔵は傷ついていないらしく、それが少し男を安堵させた。

しかし少女は血と砂に汚れていた。

あの中年を止めるために、必死になったのだろう。元々ボロ布だった着物はさらに所々が破けている。喀血はないが、口内を切ったらしく、口の端から赤い血が流れている。

「ゴホツ、だい、じょうぶ」

咳混じりの声はとても大丈夫そうには聞こえなかったが、少女は男の肩に掴まり、なんとかよろよろと立ち上がろうとした。

「っ!？」

そして声にならない悲鳴をあげて、崩れるように腰を下ろす。立てないほど痛むらしく、少女は右足首を手で押さえる。

「無理するな」

男は一先ず少女を寝かし、馬車から手当ての道具を取り出す。ナイフなど幾つかの金目の物がなくなっているが、それ以外の荷物は無事だった。

腹の奥底が煮え立つ思いだったが、不幸中の幸いと無理矢理に割り切る。

少女の怪我は膝の擦り傷といくつかの青アザ、そして口を切っているだけで、大事はなかった。酷いところと言えば右の足首だが、そこも骨折までにはなっていないかった。

「痛っ」

「我慢しな。洗って軟膏を塗つとけば化膿しないから。足首は包帯を巻くくらいしかできないな」

「その薬はお兄さんが作ったの？」

「ん？ああ、そうだな」

「すごいね。ハンターさんって、何でもできるんだね……」

少女はそう言つて俯き、黙つてしまった。まだそんなに痛むところがあるのかと心配した男の耳に、小さなすすり泣きが聞こえる。

「あたしは、無理だったよ。ごめんね。鉱石も、お兄さんの物も、盗られちゃった」
「いいんだ、それは。ほら、泣くな。にしてもよくあいつが盗みをはたらいてることが分かったな」

少女の涙に胸を痛めながら、男は言う。

「だって、なんだか、怖かったんだもん。触んなくても分かったんだよ。おじさんが凄く怖い顔してるって」

「そうか。そうか。いや、今は休むと良い」

男は自分の頭の足りなさを悔やまずにはいられなかった。あの中年が怪しいことは明白だったのに、鉱石を何も考えず自分から手渡し、挙げ句、少女を傷付けるはめになってしまった。

(どうしたものかな)

休むと良い。そう言ったものの、男は一抹の不安を拭いきれずにいた。それは少女の信号弾が打ち上がる直前に見た、巨大な足跡に起因する。

(動くべきか。いや、動いたとして、今の俺たちの状態で安全を確保できるか? いたずらに体力を消耗しては……)

ひよつとしたら、ここに留まるべきではないのかもしれない。男は一刻も早く街に向かいたいと、本能からそう思った。

しかしもう既に陽は落ち始めていて、今から足を痛めた少女を連れて、ある程度でも移動するのは至難であった。

「ねえ、お話してよ」

しばらくして、少女はおもむろにそう言った。あぐらをかいた男の固い膝枕に不満そうにもせず、少女は男の手を柔らかく握っている。

(もし、俺の悪い予感が当たっているとしても、群れていないあれの行動範囲は決して広くない。ここまでは届かない、はず。たぶん、大丈夫だ)

男は僅な可能性である悪い予感を振り払い、再びこの森の縁で夜を明かすことを決めた。

「少し待て。火を起こすから」

ゆっくりと少女の頭を膝から畳んだ布に乗せ換え、男は近くで薪を広い集めて火をつける。ついでに昨日と全く同じ内容の夕食の準備もする。

「やっぱり火をつけるなら、お前の方が早いかもな」

そう言うのと少女は得意気な顔で、そうでしょ、と言わんばかりに笑った。

「終わった? じゃ、お話ししてよ。お兄さんが今まで行つたところのお話し聞きたいなあ」

「どうして、そんなに聞きたがるんだ?」

男の質問が意外だったのか、少女は少し考える素振りを見せて、やがて自分の中で納得がいったのか、口を開いた。

「ほら、あたしって目が見えないでしょ? でも想像だったらできるの。お話しを聞

いて、その中の景色を想像することだったら、簡単にできるんだよ」

想像する。なにも見たことがないのに景色を想像するということが、男にはイマイチ理解できなかつた。理解はできなかつたが、それが少女の心の拠り所であるということとは、何となくだが察してやれた。

「土のざらざらした感じや、冷たい水も、すつかり想像できちゃうの。お母さんが持っていた絹の服もすごく触り心地が良くて、きつと綺麗なんだろうなああつて思うの。火は触れないけど、音が凄いから、絶対に力強い見た目をしてるんだつて分かるの。そうでしょ？」

だからね、と少女は続ける。

「だから、あたし物語って大好き。物語って想像の塊でしょ？それならあたしにも、普通の人と同じ景色が見られる気がするんだ」

男にはそれを肯定することも否定することもできない。少女が見えない目の奥底で何を思い描いているか、男には想像がつかなくなつたからだ。

しかし盲目だからと言って、それだけで飛び抜けて不幸だと言うことはない、そのことが分かつただけでも、それは男の救いになつた。

「よし、分かつた。それじゃあとつておきの話をしよう。まずは雪山の山頂に現れる、幻のオーロラの話だ」

少女は飛び上がりそうな勢いで喜び、男の産み出した物語が始まれば黙って耳を澄まし、想像の世界に浸っていった。

夕食を食べ終えてまたしばらく『お話し』をしてやると、少女はウトウトし始め、すぐに寝てしまった。

今日は必ず火の番をしようと決めていた少女の、実際のところのあどけなさに苦笑して、男はもう一晚徹夜する覚悟を決めた。多少体力的に厳しいが、今は少女が少しでも足の具合を良くして、街まで無事になり着くことを考えねばならない。

男は傍らで寝る少女と一緒に仰向けになり、空を見上げる。

冷たく澄んだ夜空には、昨日とは打って変わり、雲が一つもなく黒の壁紙を覆い尽くさんばかりの星々が輝いている。

それはついさつき少女に話して聞かせた、想像の幻のオーロラと同じか、それ以上に綺麗な景色だった。まるで一枚の絹のように暗い夜空を流れる星の川。

「お前にも、こんなものを見せてやれたらなあ」

隣で眠る少女は、星空と言われて、一体どんな景色を想像するのだろうか。

そんなとりとめもないことを考えていると、こつちまで寝てしまいそうで、男は淀みかけた頭を振って眠気を散らし、また上体を起こして座り直した。

異音。

男の思考が瞬時に覚めて、五感の注意全てが耳に集中する。

茂った森の奥から微かに聞こえてくる音が、だんだんとハッキリしてくる。こちらに何か近付いてきている証だ。

嘘だろ。

そんな呟きも漏らせないほどに、男にかかった緊迫は凄まじかった。

「おい、起きろ」

男は少女の肩を揺さぶって、多少無理矢理に目を覚まさせる。

「ご、ごめんなさい！また寝ちゃって……」

起こされた意味を勘違いした少女はまた顔を赤くして弁解しようとするが、今回、それでなごむ余裕は、男にはなかった。

「足はどうだ？」

「えっ、う、うん。痛いけどなんとか立てる、みたい」

「よし」

男はよたつきながらも立ち上がった少女を抱えあげて馬車に乗せる。その意図するところが分からず、少女は混乱したようだ。

「どうしたの？その、おじさんのとは違うけど、怖いよ。お兄さん、何かあったの？」
少女の質問には答えず、男は言う。

「いいか。馬車から絶対に出ちやいけないぞ。どんな物音がしても、どんなに心細くても、決して声を出したり、ましてやカーテンを開けて外を見ようとなんてするな」

「なんで、どうして？」

「朝まで静かにしてるんだ。そうしたら、またお話し聞かせてやるからな」

男は最後に作った微笑みを浮かべた。盲目の少女にそれがどれほどの意味があるのか、それでも余裕がない中で男が見せた、精一杯の優しさだった。

馬車のカーテンを閉める。松明を焚き火にかざして火を灯し、空いた利き手には既に矢を引き絞ったボウガンを持つ。

「俺の勘も、なかなか馬鹿にできないな」

夜の冷えた空気が男の呼吸を白くする。焚き火が一層激しく燃え上がり、地面に落ちた枝を踏み折りながら現れた来客を照らした。

男は舌を打つ。そのの体軀は、通常のものとは比べ物にもならなかった。元々が凶悪な爪は戦闘用の大鎌のごとく鋭く、鋸状の牙はその一本一本がナイフのようだった。そして筋肉が隆起している二本の後ろ足は、見た目にもその俊敏さを伝えてくる。

「異常……いや、特異体つてところか。でかすぎて巣穴に入っていられなかった

か」

男の呟きに答えるように唸り声が聞こえる。鳥の嘴によく似た口からは粘っこい涎が垂れている。明らかに肉に飢えている様子だ。

「不便だよな、周りと違うってのはさ」

ほとんどの場合、群れのボスほど大きく成長すれば、その過程でいくつもの傷跡を体に残すことになる。しかし明らかにボスという枠組みさえも超えて異常発達した怪物の表皮には、一つの掠り傷も見えない。

それは敵を知らぬ生まれながらの強者、そして群れの爪弾き者であることを雄弁に語っている。

「いいぜ。やってやるよ」

不敵に笑った男の笑顔も、正常な人間の雰囲気からかけ離れている。日雇いで小銭を稼ぐことだけに日々を費やす者にはできない、なれない姿。

それは、ある種のハンターがする、決死の表情であった。



ある晴れた昼下がりのこと、一人の少女が見るからに手製の物干しに、洗濯物を整

然と干していた。慣れた手つきでサツとそれを済ませて、家の中に入る。

「洗濯物、終わったよ」

居間の暖炉の前に椅子を置き、深く腰かけている男にそう告げる。

男は首だけで彼女の方へ振り返り、礼を言った。

「ああ、ありがとう。ずいぶんと、色々できるようになったな」

感慨深げなその言葉に少女は嬉しそうに、それでいて悲しそうに笑った。年齢に不
相応な、どこか大人びた笑顔。

「ねえ、後悔してる？あたしを庇ったこと。もしあたしがいなければ……」

「そうさな」

男は自分の頬に手をやって考える。その手は、不自然に強張っているようだった。

「未練がないってことはないけどな。でもそんなもそもは少し、寂しいかもな」

男がそう言って立ち上がる。少女が男の方へ行こうと駆け寄ろうとして、その足が
棚の角に当たり、躓きそうになる。

「よつと」

男は少女を倒れないよう受け止める。男もバランスを崩しかけたが、踏み止まれ
た。

「危ないぞ。この生活に慣れてきたって言うてもだな」

「うん。ありがとう」

男は再び椅子に座り、少女も男のすぐ側に自分の椅子を持ってきて腰掛ける。暖炉の小さくなりかけている火に薪をくべる所作は、さきほどの危なっかしい足取りからは想像できないほどスムーズだ。

「ねえ、あの時のこと、お話してよ」

少女のお願いに男は苦笑する。

「またか？何度も聞いてるじゃないか」

「何度だつて聞きたいの。だって、どんな物語よりも好きなんだもん」

それはきつと、本当にあつた話だからだ。

少女のもつとも身近にある英雄の話を、彼女は好む。たった二人しか知らない、無名の英雄のお話を。

お嬢様奮闘記

1

「遅いですわ」

むさ苦しい男共がひしめく集会所には場違いな、少女の声が上がった。

使い古された木の椅子に厚手のクツションを敷き、さらに厚手のドレスを折り目正しく着て座っている少女は、キツイ目付きで集会所の開け放たれた玄関を睨んでいる。細く白い指は苛立たしげに組んでいる腕をトントンと叩き、これでもかと焦れつたさを表していた。

「遅い。遅すぎます。いったいどれほど待っているというのです」

誰に言うともなく声を荒げる少女に、その側で立っていた初老の男が、かしこまつた様子で宥めた。

「お嬢様。まだ約束のお時間まで5分はあります」

「それがなに！」

噛みつくように怒りをぶつけられ、初老の男は「もう少しだけご辛抱ください」とだけ言いつて引き下がった。その張り合いのない態度が気に食わなかったのか、少女はさら

に不機嫌になったようだった。

酒場と併設されているハンターの集会所には明らかに釣り合わない、いかにもお嬢様然とした少女。

彼女は実際に、貴族の令嬢だった。ハンターズギルドの重鎮と太いパイプで繋がっている貴族の一人娘である。

彼女の後ろには護衛役の兵士が五人並んでいる。貴族の家紋が彫られた立派な鎧を着る彼らもまた、賑やかな下町を思わせる酒場からは浮いていた。

少女はソワソワと腕時計と玄関に目を行き来させている。

一分経つ。もう一分経つ。

さらに分針が時計の頂点を回り、耐えられなくなったのか、少女は音を上げて立ち上がった。

「おっそー……い？」

叫び声が尻すぼみに小さくなる。吊り上がっていた目が丸く開いて、玄関を見つめた。

大扉の頂点に届きそうな大男が、集会所に入ってくる。少女はそれをまじまじと確認して、そして再び瞳に怒りをたぎらせた。

「遅い！ちよつと、その貴方！そう、背の高い貴方ですわ！」

男は、指を立てた手を上下に激しく振つてくる少女に気付き、のっそりと無表情に、少女がいるテーブルまで歩み寄つた。

「あんたが依頼人か」

低く唸るような声。それと近寄られれば自分を遥かに見下ろす長身に、少女は僅かに怯んだ。

「そ、そうです。私がこの度、貴方を指名した、アニータ・リオハートです」

「そうか」

男は少女——アニータが名乗り上げている最中にドカツと腰を下ろし、おずおすと注文を取りに来ていたウェイトレスに酒を要求する。

あまりに無作法なその態度にアニータは絶句し、それを見かねた護衛兵の一人が男に詰め寄つた。

「貴様、無礼だぞ。この方をどなたと心得て……」

「ま、待つて！」

兵士がそこまで言いかけて、アニータが割つて入つた。

「この人と話しているのは、私です。私が一人で話をつけます」

仕えている相手にそう言われ、不承不承、兵士は元の位置に下がつた。

男はまるで気にした様子はなく、運ばれてきた酒をグラスになみなみ注いで飲み始め

た。

「この度は依頼をお受けいただき、ありがとうございます。まずは自己紹介から……」

「もう知っているからいい。それより、依頼書は持ってきたか」

仕切り直しの挨拶すら遮られ、アニータは屈辱と怒りに打ち震えた。今までに、ここまで庶民にぞんざいに扱われたことなど、彼女はまるで経験がなかった。

しかし気丈にも爆発しかけたものを飲み下し、いかにも高級そうな手提げ鞆から、折り畳まれた依頼書を取り出した。

「これですわ。ご確認を」

手渡しでそれを受け取り、男はじつくりと目を通す。しばらくして読み終えたのか、視線をまだ立ったままのアニータに向ける。

「ここにある内容は了解した。だが、その後ろの連中はなんだ。聞いてもいないぞ」男がアニータの後ろに控える五人の兵士をじろりと見回す。兵士のうちの何人かは、気圧されたように後ずさった。

「私の護衛の兵士です。私は別にいらなさいと言ったのですが、お父様がどうしても付けろとおっしゃいます……この五名も同行しますの」

それを聞いた男の眉間にシワが寄った。邪魔だと言わんばかりの態度である。

「いいだろう。ただし俺の契約はあくまで、あんた一人の安全を守ることだ。それつらまで対象には入れない。いいな」

今度は兵士たちに敵意がこもる。男に聞こえないほどの声量で「ならず者が」という
呟きが漏れた。

「かまいません。その依頼書に書かれた内容が全てですわ」

「分かった」

男はそう言つて判子と朱肉を取り出して、依頼の受領に印を押した。

龍を形取つた赤い判を見て、アニータは納得したと言うように頷いた。

「これで依頼手続きは完了、ですわね。それにしても貴方、どれだけ私が待ったのか
お分かりになつて？あまりにも無礼が過ぎますわ」

アニータの毅然とした物言いに、男は相変わらずの無表情で答えた。

「俺は時間通りに来たはずだ」

「紳士であれば、約束よりも早く来て、淑女を待たせないものです」

男は面倒くさそうにグラスに残つた酒を煽る。ボトルで置かれた琥珀色の酒は、いつの間にか半分ほどに減っている。それなのに男の顔は赤くもなつていなかった。

「知らない。俺は紳士なんかじゃない」

ボトルに栓をして、男が立ち上がった。座つていてようやく立つたアニータと視線が

重なっていたが、アニータはまた見上げることとなり、その巨体に圧倒された。

「用件は済んだな。じゃあ次はクエストの当日に……」

男がそう言いかけたところで、今まで黙っていた執事が歩み出て、男に言った。

「ああ、そうそう。今回のクエストには執事である私も付き添わさせていただきますので、よろしくお願いします」

「はあ？」

初めて男が無表情を崩した。訳が分からんと言いたげな顔で、アニータを見る。

男を見上げていたアニータは視線が合うと、目を逸らすように、こくりと頷いた。

「執事も、私の護衛ですわ」

頭痛をほぐすような仕草で眉間を揉む男に対し、さらに執事が言葉を重ねる。

「その他にも、もう一つのハンターのグループにも依頼を出しています。こちらは三名ほどですが」

「ちよつと！」

うんざりした男より先に、アニータが執事に抗議した。

「先日会った、あの男たちも本当に連れていくの!?! 信じられない! だって、これは私が決めるべきことなのよ。お父様にも、そう言われたのよ」

瞳を潤ませて激昂するアニータに、執事は至って温和な口調で諭す。

「これでも足りないくらいなのです。お嬢様、貴女にもしものことがあれば、私は旦那様に顔向けができません。どうかご理解ください」

執事と少女が睨み合う。

アニータは今にも泣き出しそうに執事を睨み、執事は何を考えているのか、穏やかに彼女の目を見据えている。

「まあ、どうでもいい。邪魔はするなよ」

蚊帳の外に出されて内輪揉めを見せられた男は、辟易したように言った。これ以上は話すことなどないと、酒場から去って行く。

遠くなる男の背中をしばらく見つめて、アニータは向き直らずに執事に言葉を投げた。

「もういい。今日は、帰るわ。明後日には出発だから、その準備もしなくちゃいけない」

そこまで言っ、横目で執事を睨む。その目には思春期の少女らしい純粹さと、屈折した思いが入り交じった複雑な感情の光が宿っていた。

「後でその勝手に契約した依頼書を私に見せなさい。いい？ 命令ですからね」

「仰せのままに」

恭しくお辞儀をする執事にフンツと鼻を鳴らし、アニータも大股で肩を怒らせ、酒場

から出て行つた。執事がクツションを持つて彼女に続き、ずっと待ちぼうけを食らつていた護衛兵たちも、慌ててその後を追つた。

彼らのやり取りを肴に酒を飲んでいた周りの連中は、すぐにとりともめないことを喋り出して、酒場はまた平時の空気に戻つていった。



酒場での一件があつた、その翌日の晩。

アニータは荷物の整理を終えて、額の汗を拭つた。

特大の旅行カバンは、化粧道具やクツキーなどのお菓子、そしてたつぷりの着替えでメタボリックに膨れ上がつていた。

「これだけあれば、たぶん大丈夫ですわ」

二泊三日の野宿をしに行くとは到底思えない大荷物の前で、アニータは満足そうだった。

家と学校を歩き来するだけしかしてこなかつたアニータには、旅に何を持って行つたらいいかなど検討も付かなかつたのだ。

そもそも、今回のクエストの目的は、彼女の世間知らずを矯正することにある。

アニータはあともう少しで十六歳、つまり成人となり、そのすぐ後には婚約している相手と契りを結ぶこととなる。

しかし婚儀を控えたお嬢様は、お世辞にも大人びているとは言えなかった。ずっと箱入り娘として育てられた——彼女の場合は放任されていたと言う方が正しいが——そのツケが今回、成人式を迎えるにあたって回ってきた。

ハンターズギルドの重鎮とコネを持つ貴族の令嬢とは思えないほどの世界に無知であり、ハンターへの依頼の仕方から、ギルド内部の仕組みまで、何も知らなかったのである。そんな彼女が成人して世間に出るということは、火の起こし方も分からない子どもを野山に置きざりにするようなものだ。

つい最近になってようやく、その問題に気付いた彼女の父親が慌てて執事に相談したところ、

『何かを学ぶなら、本職に付いていくのが手っ取り早い』
という助言を得て今に至る。

世間を学ぶ。その想いを胸に抱えて、アニータは小さな拳を握った。

「お父様、私はやり遂げて見せますわ。そうすればお父様は私を見てくださるし、きっと、私もお父様のことが少しは分かるわ」

アニータが父親から言い渡された用件は、自分でハンターに依頼を出し、それに同行

するというものである。その結果をレポートとしてまとめて提出するまでが、今回の彼女の試練だった。

つまりは、お使用のようなものだ。

最初、ならば巨大モンスターを間近で見たいと言い出したアニーだったが、それは父を驚かせただけで当然叶いはしなかった。

執事の仕切りのもと、三日間だけ大自然のなかで過ごしてみる、という内容に落ち着いた次第である。

これまで一度もなかった父の言い付けに従って、自分で一からやりたいと願うアニーは執事に反発していたが、今ではすっかりキャンプに思いを馳せていた。

「ああ、いったいどんな三日間になるのかしら。ケルビつて凶鑑で見たらとても可愛らしかったし、是非会いたいわ。満天の星空というのも、生まれてこの方、見たことがないわね…… あ、もうこんな時間」

やりたいこと、見たいものを想像しメモに書いていたら 置時計が鳴り、もう深夜であることを知った。

明日に備えてもう寝ようと、寝巻きに着替えたところで「そうだわ」とアニーは手を打った。

「お茶の葉を忘れていました。クッキーを食べるのに紅茶がないだなんて、まる

で拷問じゃない」

すでに押しくらまじゅう状態の鞆のどこに詰めるというのか、さつそく厨房まで取りに行く。

自分の部屋を出て階段を下り、屋敷の反対側にあるキッチンまで行こうとしたその途中で、アニータは足を止めた。

「だから、もう少し兵をだな………」

通りすぎようとした部屋から聞こえてきたのは、父の声だった。仕事が忙しく、ほとんど家を空けている父。前に会ったのは、アニータに課題を出した一週間も前のことだ。

久しぶりに聞いたその声に、アニータの胸は弾んだ。

「お気持ちには分かります。しかし、お嬢様も大人数で行くことは嫌ってらっしゃいますので」

もう一方の声は執事のものだ。物音を立てないよう耳を扉にくっつけてみるに、どうやらアニータが明日から出向くクエストについて話しているようだった。

「しかしあれに万が一のことがあつては」

「大丈夫です。私が選んだハンターのチームは腕利きですし、我が家の護衛兵も付いています。それに、お嬢様がお選びになったハンターも精鋭の中の精鋭、G級でござ

います」

アニータはその会話に、大変な喜びを覚えた。

父と話した記憶は少なく、しかもそのどれもが大して面白くもない、仕事の話ばかりだった。幼い頃から今の時分まで、構ってもらえなかつた寂しさが思い出の大半を占めている。

そんな父が自分を心配してくれているというだけで、アニータには舞い上がるような幸せだった。

そして執事も、その言葉は密かにアニータの意向を十分汲み取ろうとしているように聞こえる。アニータが全て一人で取り仕切りたいことを知っていて、しかし現実として彼女を守らなければいけないために、妥協点を探してくれたのだ。

（お父様には感謝を……執事には、謝らなくてはいけないわ。私、すっかり勘違いしてしまつて）

自分はしつかり、見てもらっていた。

じんわり胸に暖かいものが広がって、一人ぼっちの苦しさが和らいだような気がした。

「うむ、しかしだな、やはり娘の身に万が一なにかあつては……」

父のモヤモヤした話し方に、アニータは口に手を当てて声を抑えて笑う。

(全くもう、いくらなんでも心配しすぎですわ)

遠くにいた父を、扉越しでも今は近くに感じる。それがアニータには堪らなく嬉しかった。

しかし、それは儚くも崩れ落ちた。

「なにかあつては、我が家のこれからがだな……」

父のその言葉を聞いたとき、目を瞑つて聞き耳を立てていたアニータは、衝撃のあまり大きな瞳を見開いて固まった。

「あれが婚約者と上手くやり、我が家の跡取りを残してくれなければ困るのだ」

アニータは愕然とした。天国から地獄へまっ逆さまに叩き付けられた気分だった。喜びに溢れていた心に、冷たく黒いものが覆い被さった感覚がした。

父は、アニータを見てくれていたわけではなかったのだ。アニータを通した先にある、自分と家の安泰だけが、彼の目には映っている。

それをすっかりと理解したアニータは、無意識のうちに涙を流していた。悔しさから下唇を噛み締める。

騙されたと思った。裏切られたとも思った。自分が可哀想だとも、同時にどうしようもない能天気だとも思った。

勝手に期待して、バカみたいだと思った。

もうその場にいるのが苦しくて、気配を消す余裕もなく、アニータは自分の部屋に駆け出した。

（分らない。私には、お父様が全然分らない）

途中ですれ違った使用人がどうしたのかと聞いてくるのにも気付かず、顔を伏せて部屋に飛び込み、乱暴に鍵を閉める。

ズルズルと扉に背を預けたまま床に座り込み、アニータはついに、めそめそと静かに泣き始めた。置いてけぼりにされた子どものように、すすり泣いた。

薄々感づいてはいた。父親が、自分のことなどどうとも思っていないことくらい。だからこそ、今回の試練で成長し、認めてもらいたかったのだ。その為なら、政略に満ちた結婚だつてするつもりだ。

しかしやはり、誰にも愛されていないという事実は、少女には酷であった。

やがて泣き疲れて涙も止まり、もう寝なければとベッドに仰向けになる。赤く腫れた目尻はいつもより鋭さを増して、ベッドの天蓋を睨んだ。

「見返してやるわ。いつか、必ず」



翌朝、アニータは護衛兵と執事を含めた七人で、ハンターズギルド集会所へ向かっていた。アニータが持つ鞆は今にもはち切れそうで、キャスターが付いているとは言え、歩くのも四苦八苦といった様子だ。

護衛兵の一人が何回目かになる台詞を言う。

「お嬢様、我らがお持ちしますので……」

アニータは乱れた息遣いでそれを突っぱねる。

「結構、です。これっ、くらい、自分で持て、ます」

ようやく集会所へ着いたときには、約束の時間のギリギリ一分前だった。間に合ったことに安堵し、アニータは酒場へ入っていく。

「あら」

どこに座ろうかと見回した彼女が、奥の席に座って食事をとっている大男を見つけた。

「今日は先に来ていらしたのね」

男に近付き、やや挑発的な口調でそう言う。男は顔をあげてアニータを見てから、ああ、と短く返事をして、また黙々と食べ始めた。

厚切りのベーコンやオニオンやトマトが大雑把に挟まったサンドイッチを頬張る。アニータがいつも食べるものの三倍はある大きさが、男が持てば普通のサイズに見える。

る。それがもう二個、木の皿に乗っている。

手に持っていたサンドイッチを数口で食べ切った男は、コーヒーを啜ってから口を開いた。

「待たせるなど、お前が言ったことだ」

アニータは僅かに眉を上げた。まさかこの男が、そんなことを覚えていたとは、意外だった。

少し機嫌を良くして、また椅子にクッションを置き、その上に座る。

「食うか」

正面に座ったアニータに、男がサンドイッチの皿を押し出した。

いっぱいに広げた手の平よりも大きいそれを見て少し怖じ気づき、男に断りを入れる。

「いえ、もう食べてきましたわ。ごめんあそばせ」

「そうか」

男は無愛想にそう言うと、また巨大サンドを手を取ってかぶりつく。

たいして時間もかけずに食べ切った男は、コーヒーのおかわりを頼んでから、アニータに話しかけた。

「クエストの段取りの再確認をしたい。俺以外に依頼したって言うハンターはまだ

いないのか」

アニータが答える前に、執事が言った。

「もう少しで来るはずですが…… ああ、彼らです」

玄関を振り返った執事がこちらにやって来る三人組を見つけて手を上げた。三人のうちの前頭にいた男が手を上げ返す。

アニータが雇ったハンターよりはいずれも小柄だが、それでも一般人から比べれば十分すぎるほどに逞しい体つきをしている。

「よお、待たせたな。執事の爺さんと、あと依頼主の嬢ちゃん。一週間ぶりか？ 割りの良い仕事をくれてサンキューな」

「よろしくお願いします。と言つても、私が依頼したわけではありませんが」

自分よりずっと年下のつつけんどんな口調にこたえた様子もなく、リーダー格らしい男は豪快に笑った。

「ハハハッ、相変わらず気の強い嬢ちゃんだな。んで、こつちが嬢ちゃんが雇つたつて言うG級ハンターさんか」

視線を移されても興味がないといった風に、大男は無表情でコーヒーを飲んだ。

「よろしくな。あんたの噂は常々聞いてるぜ。伝説のG級と一緒に仕事ができるなんて、光栄だよ」

「ああ。足は引つ張るなよ」

ぶつきらぼうどころか喧嘩を売つてるようにしか聞こえない大男の言い方にも機嫌を悪くした様子はない。

「善処するよ。しかし引つ張るつつても、今回の依頼は嬢ちゃんのピクニックの護衛だろ？それもこんな大人数だよ」

「ピクニックですつて！」

アニータは叫んで、執事が雇つた男たちを睨み上げた。

「これは私が成人を迎える上で、重要な試練なのです。ピクニック呼ばわりは許しません」

「おお、怖い。けどあんたもそう聞いてクエストを受けたんだろ」

話を振られた大男は「まあな」と答えてアニータに依頼書をテーブルに出すように言った。

納得いかない様がありありと顔に出てはいるが、アニータは二枚の受領済みの依頼書を、旅行鞆とは別にして持つていたポーチから取り出して広げた。

「齟齬は、ないな」

アニータと執事がそれぞれで依頼した証明書を見比べて、大男が頷く。名義人や報酬額は違えど、依頼の内容は全く一緒だった。ハンターズギルドを通した、正式なクエスト

ト。

「この二枚にある通り、依頼内容はアニータ・リオハートの護衛。森丘で二泊三日のキャンプをするこいつを守ることに。サブの目標はなし。それでいいな？」

アニータが頷き、執事や他のハンター三人も同意を示した。

一同の反応を確認したところで、大男はアニータを見て言った。

「もう気球も飛び立つ準備はできているが…… それにしても」

ジロジロと見られて居たたまれなくなつたアニータは埃か何かでも付いているのかと、自分の服を叩いて埃を落としたり、シワを探してみたりした。

「な、何か変なところでも？」

町歩きにすら向かなそうなハイヒールに、フリルがついたロングスカート。そして少女の細腕ではなだらかな坂を運ぶことすら苦勞するほどの大荷物。

とてもこれから大自然に赴くようには見えない。いや、外国への旅行ですらしないうな格好に、大男は内心で頭を抱えた。

キャンプをするお嬢様のお守り。楽すぎる仕事だと思っていたが、どうやらハンターの本分とは違つたところで苦勞しそうだった。

「とりあえず、行くか」

前途多難を思い遠い目をする大男に、苦笑する三人のハンター。執事は変わらず穏や

かな微笑みを浮かべている。

「ち、ちよつと。え、何なんですか？ああ、もう！教えてくださいいな！」

気球を待たせてある外へ歩き出した男に、何も知らないアニータは、慌てて声をかけながら、その大きな背中を追った。

昔の夢を見ている。まだ幼く、身長も周りの子どもたちと変わらなかつた遠い昔の記憶だ。

決して面白いものではない。孤独に暮れた幼少時代など思い出したくもないのだから。

やがて夢の中の少年は青年となり、果ては屈強な狩人へと成長する。その過程で誰かが隣に立つことはなく、孤独なことに変わりはなかつた。

しかし夢の主は、狩人にまでなつた自分に対して満足していた。

苦しめてどうしようもなかつた子ども頃とは違い、腕一本でのし上がった先には、どこまでも広がる大自然が自分の世界を満たしていたからだ。この世界でならば、一人でも生きていけると、そう思えた。

振り返ることなく進み続けた人生。いつしか男は、孤独から孤高になっていた。

「……………ル……………さん」

そんな漠然とした夢に音が響く。

「……………ル口、さん」

自分の声ではない。落ち着きがない高い声は、少女のもののようにだった。男はまどろんでいる意識を持ち上げ、ゆっくりと夢の世界から脱け出していった。

▼
「カルロさんっ」

G級ハンターの大男、カルロが目を覚ますと、依頼主である少女の顔が至近距離にあった。

強い風の音が聴こえる。少女から視線を逸らすと、手を伸ばせば届きそうなほどに近い雲がすぐそこを通り過ぎて行く様が、小窓から見える。

どうやらまだ気球船に揺られて目的地向かっている最中のようにだった。

カルロは起こされた不機嫌さを隠そうともせず、少女に文句を言った。

「なんだ。到着まではまだあるはずだ」

「探していましたのよ。せっかく気球に乗っているのに景色を見ないなんて勿体ないですわ。ほら、少し寒いけど、すつごく綺麗なんです」

アニータは自分が雇ったハンターの手をぐいぐいと引っ張って、気球船に付いてる仮眠室から外へ連れ出そうとする。もうすぐ成人になるうというのに、落ち着きのなさは

幼子のようだ。

カルロは鬱陶しそうに、掴まれた手を振り払った。

「二人で見てくればいいだろう」

見るからに嫌がっているカルロの率直な拒絶にも堪えることなく、アニータは顔をキラキラと輝かせて、さらに手を引いた。

「もう二時間は見ましたわ。まだまだ見足りないけど、貴方も見た方が良く思っています」

無邪気なアニータの言葉に毒気を抜かれたのか、カルロは呆れたようなため息をついた。剣呑さを幾分か緩めて、アニータの期待がこもった瞳を見据える。

「俺は見飽きている。ハンターだからな。気球での移動も何回もしたことがある。それよりも、いざって時に備えて体力を温存しておきたい」

しつかり断ると、ようやく自分が浮かれていたことに気付いたアニータが顔を赤くする。

彼女の両手にはそれぞれ、双眼鏡と小鳥用の餌として細かく千切ったパンくずが入った袋を持っていて、いかに空の旅を満喫していたかが分かる。

「ごめんなさい。私、自分の考えでばかり……」

しおらしいアニータの謝罪。

この少女は貴族特有の高慢ちきかと思つていたが、案外、道理というものを知らないだけで素直な奴なのかもしれない。カルロは少し、見方を改めた。

折り畳んでいた足を伸ばして起き上がる。気球船の簡易寢床ではカルロの大きな身体は収まりきつていなかった。壁と床に固定されているベッドがぎしりと軋む。

「あの、別に寝てらしてもいいんですよ」

「目が覚めた」

カルロはそれだけを言うと仮眠室を出て、デッキに上がった。アニータも遠慮がちにあとに続く。

よく晴れた日に気球船から眺める景色は素晴らしく美しい。

緩やかな山がいくつも続き、その合間を細い川が流れている。温暖期に向かう途中の緑は明るく萌え、遠目からもその瑞々しさが分かる。気球船に平行に漂う薄くて小さな雲が、時おり身体を通り抜けていくのが実に清々しい。

「素敵ですわね。今すぐにも降りてお散歩したい」

アニータが靡く髪を押さえて言った。

その気持ちはカルロにもよく分かった。仕事などと野暮なことを言わずのんびり過ごしたくなる、麗らかなピクニック日和だった。ピクニックなどと言うと、アニータは集会所の件によるしく、怒ってしまうのだろうか。

「ほら見て。大きな川の中に島がありますわ」

アニータの指差す方を見ると、確かに川の中央に楕円型の陸地が浮かんでいる。それを質問と受け取ったらしくカルロは説明した。

「中州だな。川の土砂が積もって出来る」

「あ、学校で習いましたわ。そう、あんな風になっているのですね。本から想像したのとはだいぶ違うわ。私も乗れるかしら」

「あの大きさなら、俺でも上がれるだろう。意味はないが」

カルロが付け足した言葉に引つ掛かりを感じたアニータが、そんなことはないと言

う。
「川の真ん中に立つだなんて、ロマンがありませんこと？ それになんだか詩的だわ」

そんなものだろうか。カルロは中州に立つ自分とロマンを頭のなかでくっ付けてみる。

カルロが想像している間にも、アニータは次々と新しい発見をし、その度にカルロにそれがなんなのか聞いては教えてもらった。

そんなやり取りを繰り返していると、執事がアニータを呼びながら現れた。

「お嬢様、何をされているのですか？」

「カルロさんと景色を見ていましたの。どうかしましたか」
上機嫌なアニータに目を細めて、執事は頭を軽く下げた。

「そろそろ昼食に致しませんか。あと一時間もすれば着陸するようですので、その前に」

執事の言葉に従って、アニータとカルロは仮眠室の裏に併設されているダイニングへ足を運んだ。

三名のハンターたちはすでに食べ始めていて、五人の護衛兵と執事はアニータを待っていたのか、まだ食事に手を付けていなかった。気球船の乗組員であるアイルも隅で魚の干物をかじっている。

「これは……」

席について、執事が持ってきた食事を見てアニータが硬直した。

「干し肉とライ麦パンとオレンジです」

簡素すぎる執事の説明に、アニータは震える声で聞いた。

「……スープは？」

「気球船の上では火を使えないのです」

「じゃあ、食後のケーキは」

「ある程度保存が効く物しか、ギルドの船には積まれません。ああ、でもお菓子でし

たら、クルミ入りのビスケットがあります」

アニータは完全に沈黙した。あまりのカルチャーショックに頭が追い付いていかなかった。

そんな少女の横でカルロは何の問題もなさそうに干し肉を食い千切っては噛み締めている。執事や護衛兵も、不動のアニータに断つてから食べ始めた。

しばらく冷たい食事を見つめていたアニータだったが、意を決したように、ようやく手を付けた。

「っ……！ かったですわ、これえ！」

それから時間をかけ、アニータが食べ終わつたのは目的地に着く直前だった。



「ここが、森丘なのね」

気球船から大地に降り立ち、草原の香りを深く吸い込んだアニータは、感慨に浸つた。もうすでに大冒険をした気分になる。だがこれからあと三日間、ここで過ごすのだと思うと心を奮わせるものがあつた。

空が高い。あんなに近くにあつたはずの雲が、今はずつと遠くにある。

数時間ぶりの地面の感触は、なんだか自分が生まれ変わったみたいに新鮮に感じた。

「きゃっ」

アニータが突然口を覆った。ひどく驚いた視線の先には、岩陰から飛び出したケルビがいた。

こちらを見つめる、つぶらな瞳が愛らしい。それなりに距離はあるが、アニータの声に長い耳をピンと立てて、微動だにせず人間たちを警戒している。

「すごいっ、すごいっ！ とつても可愛い！」

はしゃぐアニータに、ケルビは一目散に逃げてしまう。

それを夢中で追いかけようとして、アニータは派手にスツ転んだ。「ぎゃびっ」と麗しの令嬢にあるまじき、潰れた蛙のような声が漏れる。

「お嬢様！大丈夫ですか!？」

護衛兵たちが駆け寄る。アニータはよろよろ身体を起こそうとしながら、なぜ何もなるところで転んだのかと不思議に思った。

「お嬢様、やはりハイヒールでこのような場所を歩くのは無茶です」

助け起こしてくれた兵士に言われ、アニータは衝撃を受けた。

なるほど。確かに踏みしめる感触が街道とは違う。平行に思える地面は所々凹んだり、逆に盛り上がっていたりと大変歩きにくかった。

思えば自分は、家と学校を往復するだけの生活しかしておらず、石畳の道以外を歩いたことなど数えるほどしかなかったのだ。そもそもハイヒールが街道でしか使えないだなんて想像すらできなかった。

顔を蒼白にさせたアニータは執事に泣きついた。

「どうしましょう。せつかく来たのに、満足に歩けもしないなんて」

「そんなこともあろうかと」

執事はそう言つて、自分が持つてきていたカバンから靴を取り出した。小さくて踵も高くない、今のアニータにはぴったりの歩きやすそうな靴だ。

「さ、どうぞ」

アニータは履き替えながら、羞恥で顔を真っ赤にする。己の世間知らずっぷりがどれだけ酷いかを、思い知らされてしまった。

「どうして出発前に教えてくれなかったのです」

ふて腐れたお嬢様に、執事は穏やかに笑った。

「私がお嬢様のお荷物に手や口を出しても、聞き入れてくださらないと思ひまして」

「そんな」と……」

そんなことがないとは言ひ切れないアニータ。自分でも張り切りすぎていた自覚はあった。きっと、他の靴を持つていけと言われても、一番のお気に入りを履いていくと

意固地になっただけだろう。

「その通り、ですわ。ごめんなさい。苦勞をかけますわね」

「勿体ない御言葉です」

履いた具合を確かめてみる。サイズはしつかり合っていて、新品なのに足によく馴染んだ。歩きやすさも、ハイヒールとは比べるべくもない。

気球が上空へと浮かび、去っていく。

「おい、もう行くぞ」

それを見つめていたアニータは、待ちくたびれたカルコの呼び声に振り返り、草木が広がる自然の中を歩き出した。



森丘とはギルドが付けた狩り場の名前であり、ここら一体の土地は正式にはシルトン丘陵と呼ばれている。高低差がほとんどない丘と草原が連なり、西側にはシルクオーレの森が横たわる、生命豊かな土地である。

ギルドが狩り場として管轄している地はその中の一部だけで、そこから出れば地図にも載っていない土地が延々と広がっている。

つまり今アニータたちがいる場所は、大自然に見えてその実、人の手が入った土地と言える。その証拠に気球船の発着場所とハンターたちが使うベースキャンプはしっかりと設置されているのだ。

お嬢様と彼女を守る男たちの一行はそのベースキャンプに向かっていた。

気球船の発着所は小高い丘の上の拓けた草原にあり、そこから川沿いに下へと降りていく。そうして川の縁をずっとなぞれば、やがて岩肌に空いた洞窟に着く。その中が、ギルドが定めたベースキャンプとなっているのだ。

「川だわ。ねえカルロさん、触ってきてもいいかしら」

「キャンプ場所へ行くのが先だ」

アニータが何かにつけて寄り道をしようとしてはカルロが止める。キャンプに行く道中だけでも、アニータを魅了するものは多くあったのだ。

そうしてお嬢様を引っ張るように進んでいき、ようやくベースキャンプに辿り着いた。

自然にできた岩のアーチに興奮してきつそく潜ろうとしたアニータを、カルロがまた止めた。持っていたアニータの荷物（アニータの力では運べなかった）を降ろし、じつと聞き耳をたてる。

「どうしましたの？」

「喋るな」

相変わらず失礼に聞こえるカルロの言い方に少しムツとするが、カルロは今までになく真剣に岩のアーチの向こうを探っていた。岩肌を耳をつけ、それから伏せて地面の音にも注意する。

十秒ほどそうして、立ち上がったカルロは、何かと見守っていた周りに対して掠れるような小さな声で話しかけた。

「奥にランポスがいる」

それに真つ先に反応を示したのは、三人組のハンターたちだ。

「嘘だろ？ ギルドが管理しているキャンプ場所だぜ」

「とにかく、一旦離れるぞ」

一同はカルロの指示に従ってその場から、慎重に距離を置く。しばらくしてようやく事態が掴めたのか、アニータが口を開いた。

「ランポスって、あのランポスですよ？ 大人の男の人以上に大きな、肉食竜」

カルロが頷く。

「そうだ。数は三匹いる」

「すげえな、G級は。音だけで数も特定できるのかい。それでどうする。殺るか？」
「いや、俺が追い出してくる。お前らは近くの物陰に隠れている」

言うがいなや、カルロは一人でキャンプ場所へ行ってしまった。残されたアニータと護衛兵は不安そうに彼の背中を見送る。

三人のハンターは、雇い主である執事へ目配せをした。

執事はただ首を横に振り、森の奥にそびえるこの辺りで一番高い山を、じつと見つめた。



「もう大丈夫だ」

間もなくして、カルロが待っていたアニータたちに言った。

カルロの手並みは鮮やかだった。しかし、その時のことを思い出して、アニータは笑わずにはいられなかった。

ベースキャンプは、岩のアーチから10mほどの洞窟を抜けた先の、まるで上から円柱状に岩をくり抜いたようなスペースにある。天井はないが、石造りの部屋を思わせる。

カルロはその上へ登り、ランポスたちに姿を晒したのだ。

太陽を背にして、大きな葉っぱを両手いっぱい持って広げた。何か巨大な鳥をイメー

ジしたのだろう、奇天烈な甲高い声で鳴き喚きながら、さらには葉っぱの羽ばたきに合わせてダメ押ししの煙玉が投げ込まれる。

大の男が白い煙が立ち込める中で、葉っぱを振り回しながらクエクエグオグオと喚き散らす。

常に無表情のカルロからは想像もできない奇行だった。

珍妙としか言えない有り様だったが2mほどもある大男がそれをやると結構な迫力があり、ランポスは一斉にキャンプ地から逃げ出していった。

「ねえ、カルロさん。くふつ、うふふ。ああいうのは、よくやりますの?」

「何を笑っている」

そう、褒め称えるべき鮮やかさだった。

だがアニータはそれどころではなかった。無表情に戻ったカルロを見ると、治まってきた笑いが一層強くなって込み上げてくる。

しばらくカルロの方は見ないようにしようと、アニータは俯いて震えながら思った。

煙幕が晴れたキャンプ地に入ると、嫌な臭いが鼻を刺した。腐りかけの肉の臭いだ。

その原因がキャンプ地の真ん中に、無造作に放られている。ランポスに食い荒らされていて原型を留めてはいないが、それはケルビの死骸のようだった。

アニータがショックのあまり後ずさる。そんな依頼主の様子は気にもとめず、カルロ

が状況を説明した。

「ランポスどもは、ここで死んでいたケルビを食っていた。だが、それは本来はありえない事だ」

「そうだなあ。ギルドのベースキャンプはモンスターが入ってこないよう、色々な工夫がしてあるからな」

三人組のリーダー格が同意する。

彼が言うとおり、ハンターが安全に休めるよう、ベースキャンプにはモンスターの侵入を拒む工夫がされている。単に侵入しづらい立地を探すのはもちろんのこと、モンスターの棲息域なども調べて何処に設置するかが検討される。場合によっては丈夫な扉を付いたり、さらにランポスなどのモンスターが嫌う臭いがする植物を周りに植えたり、生育が難しそうであればベースキャンプにそれを直接塗ることもある。

とにかく安全を第一に考えて、やれることは何でもやる。それがベースキャンプの在り方だ。

「そもそも、ベースキャンプにケルビの死体があること自体おかしいぜ」

その男の言葉に、カルロはああ、と答えた。

「ケルビは狭い場所、とくにこんな袋小路は嫌う。まず入ってこない。とすれば……」

「俺たちの前にキャンプを使った誰かが、ケルビを狩ってそのまんま放っておいたら、まいったらうな。この腐った臭いは、そんなに日は経ってないだろうがよ、これに釣られてランポスたちは寄ってきたんだらうぜ」

危なかったと、カルロは思った。ランポスの爪は凶悪だ。一撃で人間を容易く殺せる。もしも、アニータが我先にとベースキャンプに入っていたら、大惨事になっていただろう。

そもそも何故、ケルビの死体があつたのか。

ベースキャンプを使用する際の注意事項として、ギルドはこうした獲物の放置をしないよう厳しく言っている。なぜなら今回のようにキャンプ地に危険なモンスターが入り込むし、最悪、そこがモンスターの巣穴になってしまう場合も考えられるからだ。

しかし今回、そのルールを無視した輩がいる。

早急にケルビをキャンプ地から引きずり出し、なるべく遠くへ捨てる。死体を置いておけば、ランポスたちはまた必ず食いに戻ってきてしまう。それに、死体をそのままにしておくというのも、色々と気が滅入る。

カルロはケルビを捨てて戻ってきて、未だにショックから立ち直れないアニータをちらりと見た。

「いんな、ひどい………なんで………」

腐臭はそれほど酷くはなく、すでにキャンブ地に入ったときの半分ほどに薄れている。しかしアニータは虚ろな目でケルビの死体があつた場所を見て、うわ言のようにいていた。

「お嬢様」

その後ろに立つて、執事がアニータを慰める。

「仕方がないのです。生あるものは、いずれ皆死んでしまいます。それがあのよう
に無惨な結末であつても、珍しいことではありません」

「……知っています。そんなこと」

アニータは弱々しく答える。

「そんなこと、知っていたはずなんです。でも、やっぱり、私は世間知らずなんです
ね。実際に見たら、知っていたことと、全然違つて」

震える少女の肩は、何かを懸命に飲み下そうとしているようであつた。執事はそれ以上何も言わず、ベースキャンブの掃除をしに下がつた。

「ケルビの血が服に着いたから川で洗つてくる」

そう言つて外へ出ようとするカルロに、ハツと振り返つたアニータが声をかける。

「あつ、待つてください。私も、川に行きたいです」

「…… 晩飯の食料もついでに捕つてくるから、戻るのは夕暮れ時くらいなるぞ」

「私は構いませんわ。ねえ、いいでしょう？」

カルロはアニータの瞳を見た。

好奇心はあるが、気球船からここに来るまでであった浮かれ気味の熱がなりを潜めてい
る。動物の死を見た彼女の、複雑な感情が揺らいでいるようだった。

アニータが執事の方を向くと、執事は「まあ、いいでしょう」と言ってくれた。

「分かった。ただし俺のそばを離れるな。それから、兵士ども、お前は付いてくる
な」

アニータのすぐ後に続こうとしていた五人の衛兵たちが、カルロの言葉に憤慨した。

「なにを言う！ 我らもお嬢様の護衛係りだ。それとも何か、この機会にお嬢様に
いかがわしいことでもしようと思んでいるのではあるまいな」

睨み付けてくる兵士を、カルロはまるで相手にしない。

「その鎧でガチャガチャ音を立てられた迷惑だ。それと下手に大人数で群れれば、
さつきみたいなランポスに目をつけられもする」

ハンターであるカルロの指摘に、護衛兵たちはぐっ、と言葉に詰まる。

それに助け船を出すように執事が横から言った。

「まあ、夕刻に戻られるのなら、大丈夫なのでしょう。それに彼は契約主義者とし
て有名ですから、依頼主を傷付けたりはしないでしよう」

自分達より目上の人間にそう言われてしまえば、兵士たちからは何も言えない。

カルロが悔しそうな彼らを意にも介さずキャンプ地から出て行く。アニータも大人たちのいさかきにオドオドしながら、カルロに付いていった。



シルトンの川の透明度は、いくつかの詞や言い回しに取り上げられるほどに素晴らしい。その水を使うことをこだわりに行っている料理人もいるほどだ。

そんな世界有数の清水で、カルロは血を洗い落としていた。底の浅い川に膝まで浸かって上着を大雑把にもみ洗いしている。

彼についてきたアニータは川にあれほど興奮していたにも関わらず、今は川原に座って顔を両手で覆っていた。どうやら視界を塞ぐ仕草のようだが、指の間に隙間をつくり、ばつちり目の前の光景をガン見している。

上着を一枚脱いだカルロは上半身裸となっている。長身に見劣りしない引き絞られた筋肉と、それを支えるいかにも強靱そうな骨格が彼の身体には備わっていた。

最初、裸になり始めたカルロに対して小さな悲鳴を上げて何事かと混乱した。箱入

り娘に男の裸体は、上半身だけとは言え刺激が強すぎた。

「待つて待つて」と叫ぶアニータを鬱陶しそうに無視して、カルロは川へと入った。果然としていたアニータは、「むしろこの場で不自然なのは私なのかも」という考えに至り、どうしようもなく、ただ草むらに腰を下ろしてG級ハンターの肉体美を盗み見るしかなかった。

堂々とすることはできない。それをしてしまったら貴族の、元より乙女としての恥だとアニータは考える。

そんな誇り高い彼女の頭には目を逸らしたり後ろを向いておくという選択肢は微塵もなかった。

「……いつまでそうしているんだ」

カルロに振り向かれて、アニータはサツと目を隠す。人差し指と中指の間を閉じるだけ。瞬きにも満たない早業であったが、カルロには彼女の様子は筒抜けだった。

「見てません、見てませんわ」

「そんなに珍しいか」

弁明いいわけを流され、直球の質問に動揺する。

珍しくないわけがない。幼少の頃から、父とすら風呂に入ったこともないアニータにとってでは恐らく、人生初に見る男の身体である。

しかもそれが並みでないとくれば、まじまじ見てしまうのも仕方がなかった。そう、仕方がないはずよ、アニータ・リオハート。少女は胸の内ですう唱える。

「…… 思っていたより、傷は少ないですね」

物語の中の英傑たちは皆、屈強な肉体にその経歴とも言える古傷を負っているのが常だった。アニータのなかではそんな傷だらけの、いかにも歴戦の戦士然とした体が英雄のイメージであった。

しかし実際に見てみれば、カルロは想像よりもずっと健常な身体を保っているようだ。さすがに全く無いわけじゃないが、それでもG級という、非凡の領域に辿り着いた男にしては傷跡が少なかつた。

「重傷を負って、生き残れるほど甘くはない」

そう言いながら川から上がってきて、洗い終わった服を固く絞って木の枝に干す。流石に慣れてきたのか、アニータは横目でカルロを見ながら話を続けた。

「怖くはないんですか？」

「何がだ」

アニータはカルロに追い出されてキャンプから出てきた三匹のランポスのことを思い出す。

あの時はカルロの奇行にばかり考えが行ったが、物陰から見たランポスは、遠目から

でも恐ろしいものだった。ひよっとしたら動物の全てと仲良くなれるかもしれないなどと思っていたアニータは、人間を越えるサイズのトカゲを見て、あれらには自分は獲物ではないという恐怖を膨らませた。

「いつか、そんな重傷を負うかもしれません。いえ、一歩間違えたら重傷などでは済まないかも。死ぬかもしれない環境に身を置くことが、怖くはないのですか」

「……分かります。長いこと続けすぎて、麻痺しているのかもしれない」

カルロはいやに真剣なアニータの瞳を受けて、真面目に返さざるをえなかった。正直なところ、哲学めいたことを考えるのは苦手な性分だ。

しかし、この少女は答えを探しているらしい。

自分の心に確固とした基盤を築きたいと、真つ直ぐな視線が語ってきていた。その感情は、彼女とはまったく違ったの生き方をしてきたカルロにも馴染みのあるものだった。

「だが俺は俺の意思でこの世界にいる。俺が決めた道を前に進むだけだ」

「そう……なんだか、羨ましいですわ」

アニータの寂しげな呟きは、川のせせらぎに消え入りそうなほど小さい。

「お前は、何がしたくてここに来たんだ」

その質問はアニータの核心を穿った。キャンプをしに、などという答えで済ませられ

る質問ではない。

アニータはやけに飲み込みづらい唾を喉に押し込んだ。

「成長、するためですの。私はあまりにも世間知らずだと、お父様が言いました」

「お前は成長したいのか」

カルロの問いの切り口は鋭い。アニータは静かに首を振った。

「それは……分かりません。けど不安なの。このキャンプが終われば大人の仲間入りをして、許嫁の方と結婚して……決まっているはずの道なのに、さっぱりそこにいる自分が想像できないんです」

土手に咲く花をそっと撫でてみる。

花にも不安はあつたりするのだろうか。土と太陽の恵みを受けて育ち、そしていつかは種を残して枯れ落ちる。決まりきった一生を不安に思うことは珍しいことなのか。自分が認めることができれば、納得さえできれば解決する問題なのだろうか。

たとえ誰も、実の父でさえ、自分を省みてくれないとしても。

「分らないわ。何も、分らない」

アニータはそれつきり膝を抱えて黙ってしまった。

隣に腰を下ろして足を投げ出したカルロもまた、彼女の現状を知らないがために、かけるべき言葉など分からなかった。出てきたものと言えば、アドバイスや慰めなどでは

なく、

「川に入りたかったんだろう。行ってくるかい」

カルロに言われて、アニータは細い清流を眺める。

「…… そうですね。ちよつとだけ」

重い腰を上げて、川に近づき恐る恐る手をその中に浸してみる。

常に流れ続ける川の水は、アニータが予想していたより冷たかった。ビツクリして手を引つ込めかけるが、緩やかに流れる水の感触が気持ちいいことに気が付く。

足も入れたらどんなだろう。

靴と長いソックスを脱ぎ、スカートをたくしあげて爪先からゆつくり川に入ってみる。これもまた冷たく、ひんやりした感触が背筋を上って身体を震えさせた。しかし慣れてみれば心地が良い。足裏で触れる丸まった石の滑らかな表面が印象的だった。

「素敵…… あつ、カルロさん、見てくださいな。魚が泳いでるわ。この子はなんていう名前ですか」

いくらか元の調子を取り戻したアニータの呼び声に、カルロは内心で安堵しながら、彼女が指差す川面を見ようと立ち上がった。



アニータとカルロがベースキャンプに帰ったときには、日が暮れかけていた。四方を岩の壁が囲んでいるキャンプ地は暗くなるのが早く、執事たちはもう火を焚いていた。

「おおつ、お嬢様。心配していましたよ」

「やい貴様、本当に変なことはいないな」

喰い気味に食って掛かる護衛兵たちに返事をするともなく、カルロは抱えていた獲物を焚き火の側に降ろした。

「お疲れ様です。それが、今晚の食材というわけですな」

カルロが持ってきたもの、一頭のモスを見て執事が口髭を擦る。

モスとは背中が苔むした小柄の豚だ。苔は直接モスに寄生しているわけではなく、モスが身体に塗たくつている泥に生えている。その茂り具合で個体の年齢が分かる。

「10人前くらいなら十分だろう」

カルロは執事の横にある、大きな葉っぱに乗せられた木の実や山菜を見た。三人のハントーたちが採ってきたらしい。かなり豪華な食事になりそうだ。

「ねえ、本当に食べますの？ 本当に？」

不安げにアニータはカルロの袖を引つ張る。ここに並べられた食材を食べたことが無いわけではないが、見たことがあるのは料理された美味しそうな形だけであって、

採ってきたそのままの状態は馴染みがないアニータは本当にこれらが食えるのかとたじろいでいた。

「今から作る。黙って待つてろ」

なにせ、モスを仕留めてからキャンプに戻る道中でもしつこく聞かれていたので、カルロは鬱陶しそうにしながら料理にとりかかった。

苔を削ぎ落とし、既に血抜きを済ませてあるモスの腹にナイフを入れて臓物を取り出す。そのグロテスクさにアニータは「ひいつ」と悲鳴を漏らし、護衛兵たちもどよめいた。

腹を水で洗い、塩を擦り込んでから果実とキノコ、茹でて灰汁抜きした山菜を詰めこむ。そしてのりこねバツタで切り口を止めて、あつという間に下拵えが終わった。料理人も顔負けの手際に一同は舌を巻く。

「あとはタレを塗りながら焼くだけだ。おい、もつと火を強くしろ」

カルロの指示に従って皆が動く。アニータはキャンプの物置から長い鉄串を探しだしてきた。錆びていないことから察するに、ハンターたちはよくこれを使ってご飯を作っているらしかった。

鉄串に刺さったモスが遠火で炙られる。カルロはランポスたちを追い払った時よりもずつと真剣に、一定の速さで串を回転させる。

ハチミツで作ったタレを塗る役はアニータが務めた。最初はモスがあまりに可哀想で躊躇っていたし、実際にやってみてムラなく塗るのは存外に難しかったが、仕事を任されたことが嬉しかったのか、額に汗をかきながらアニータはやり遂げた。

初めは惨めな姿をしていた豚が、茶褐色にこんがり焼けている。香ばしい香りがキャンプ場を満たし、否応なしに口いっぱい生唾を湧かせた。

「スープも出来ました」

もう一つ火を起こしてモスの胃袋のスープを作っていた執事が言った。

日は完全に沈んで夜も深まった頃に、お嬢様一行の食卓は整った。たった二品ながら、圧巻のポリウムを誇るご馳走がアニータの脳髓を打った。今までにパーティーなどに出席し、多くの豪華な料理を食べてきたアニータだったが、それらとは違った野性味溢れる旨さが堪らない。

「これも知らなかったわ。温かいものが食べられるって幸せなことですね」

思い出すのは気球船での昼食のこと。あの味気ない食事のあとだから、余計に美味しく感じる。

アニータたちは心からモスに感謝しながら、腹を満たしていった。



「星は見えませんのね」

食べ終わつたアニータはしばらく経つても苦しいお腹を気にしつつ、のつぺりと暗い空を見上げている。彼女の隣に立つ執事が、同じようにして上を仰いで答えた。

「雲が出てきてしまいましたから。カルロ様が雨は降らないとおっしゃつていたので、その点については心配なさらずともよろしいですよ」

「明日は、見えるかしら」

少しの間を挟んで、執事はアニータに笑いかける。いつもと変わらない、優しくも何を考えているか分からない笑顔だった。

「ええ、きつと。そろそろ寝ましようか。皆さんも寝てしまいましたし」

「あら、まだカルロさんが起きていますわ」

アニータが小さくなった焚き火の方を振り向けば、その番をしているカルロと目が合う。少女のアニータや初老を過ぎていく執事はともかく、他のハンターたちさえ差し置いて遙かに多い量を食べたにも関わらず、カルロはけろりとしていた。

「彼は見張りをしてくれませぬ。他のハンターたちと交代でされるらしいので。さあ、お嬢様はお休みください」

しかしアニータはまだ眠たくないのか、その提案に渋った。

「私はもう少し起きていますわ。あなたは先に寝ても構いませんのよ」

カルロの方を見ながらそう言うアニータに、執事は一礼した。深く深く、たとえ仕えていた相手だとしてもそこまでやるのかと言うほどに、恭しくお辞儀をした。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。お嬢様もできればお早めにご就寝ください」

そう言って執事が天幕の中に入ったのを確認してから、アニータは小声でカルロに話しかけた。

「そちらに行ってもよろしくて？」

「……好きにしろ」

もう失礼な口調も気にはならなくなり、アニータは腰かけていた簡素な椅子ごとカルロの隣に来て、静かに座った。

炎が時おり火の粉を散らす音だけが、夜闇に響く。

「夕食の時はびっくりしましたわ。だってカルロさんたら、鼻まで食べるんですもの」

「美味いぞ。お前も食べばよかつたのに」

詰め物の部分や肩肉などを食べるアニータたちの傍らでカルロは積極的に鼻や足といった末端の部位を頬張っていた。

彼にしては珍しく積極的に、食ってみると勧めてきたが、まだ野生初心者のアニータには厳しいものがあつた。断つた際の、少し残念そうなカルロは印象深かつた。

しばらく火の粉を吹く炎を見つめながら、他愛もない会話をぼつりぼつりとしていた。

気球船で手摺に止まっていた鳥に餌をやつたこと。底の平たい靴が歩きやすくて好きになつたこと。魚を捕まえようとしても素早く逃げられてしまつたこと。死んでしまつたケルビヤモスが可哀想だつたが、夕食は美味しかつたこと。

そんなことを喋つていて、アニータは不意にとても幸せな気持ちになり、うつとりと言つた。

「私、来て良かつたですわ。出発の前はずつと不安だつたのに、今は楽しくて仕方ないんです」

カルロは黙つてアニータの言葉に耳を傾ける。彼女はまた、悩んでいるのだろうか。しかし隣に座る少女を見ればそれは杞憂のようであつた。

「お父様に見てほしいって、その一心でした。けどこんな自然の中にいたら、なんだか遠い過去の、なんでもない悩みに思えてきて」

「そうか。良かつたな」

素つ気なく返すカルロ。アニータはそんな無愛想なハンターに笑つてみせた。

「貴方のおかげです。最初はどうなることかと思いましたが、貴方が付き添って、私が聞いたことを丁寧に教えてくださって、胸のつかえが小さくなった気がするの」

「俺は仕事をしているだけだ」

「それでも、いいんです。あと二日間、よろしくお願いしますね」

どことなく嬉しそうなアニータに、カルロは頬を掻きながら頷いた。

しばらくして交代のハンターが起きてきて、カルロとアニータを交互に見やつてから、快く寝ることを勧めてくる。

自分専用に建てられたテントに入り、寝床に潜ったアニータは明日のことで頭がいっぱいになった。

明日も美味しいものが食べられるかしら。今度こそあの可愛いケルビと仲良くなりたい。きつと星も見られる。今日より遠いところへ足を伸ばして、そこでまた、カルロに色々なことを教えてほしい。

今や結婚を控えた貴族のご令嬢ではなく、アニータは一人の少女となっていた。キラキラと輝くような楽しみを胸に抱き、夢の世界へと意識を落とす。

自分をちゃんと見てくれる人がいる。そう思うだけで安心して眠ることができる。温かく幸福な夜が、アニータを迎え入れた。



そんな夜に、火竜の咆哮が轟いた。

世間一般において火竜といえ、あらゆる物語に登場するほどに有名なモンスターである。しかし、その名の普及率に反して実物を見たことがある人はほとんどいない。個体数の少なさや、そもそも人の暮らしと関係が薄いなど理由は様々。

そして、あの恐ろしく強大な竜を本気で見てみたいなどと思う人間も極々小数である。出会ってしまったが最後、高火力でウエルダンに焼かれ美味しく食べられてしまうことは想像に難くない。

幸い火竜も人にはそこまで興味がないようで、お互いに不干渉の平穏は保たれている。村が襲われるなんてことはそれこそ物語の中だけの話である。現実の火竜はその見た目同様、王者のごとく雄大かつ悠々と生きており、アプトノスなどの草食竜と比べて可食部が少ない人間をわざわざ狩りはしない。

生態系の王である彼らにとって危険と呼べるものはおらず、従ってランポスら小物のようにやたらに騒ぎ立てたり喚き散らすような品のない真似はしない。する必要がない。

もし仮に、食物連鎖の頂点に君臨する火竜が雄叫びを上げる局面があるとすれば、そ

れは繁殖期における求愛戦争が起こったか、或いは、彼らの生を脅かすほどの危険因子が近くにあるかの二択となる。どちらにせよ人とは関わりのない、稀有なものだ。

ましてや火竜の出現報告すらない場所でその咆哮を聞くだなんて、到底あり得ることではない。



夜闇を引き裂くように鳴り響いた雄叫びに、カルロは飛び起きた。

完全に眠っていた状態から臨戦態勢で外に転がり出るまでを一秒で済ませる。

岩壁に囲まれたキャンプ地からでは周りの様子は分からないが、カルロは先ほどの咆哮が夢のものではなく、現実を起こったことなのだと断定していた。

カルロと同じテントで寝ていたハンターの三人が彼のあとに続いて出てくる。

「なんだってんだ、一体」

一人が混乱した様子でカルロに尋ねる。カルロがなにか言おうとするが、それよりも早く再び爆発的な咆哮が大気を揺るがした。

この依頼の中心人物であるアニータも大慌てで専用のテントからパジャマ姿のまま駆け出してくる。動揺するあまり足がもつれて転びそうになるのをカルロが受け止め、

そして深刻な表情で告げた。

「火竜だ。それも、激怒している」

事態がまだ飲み込めないのか啞然としている周囲を見回してみる。アニータさえすぐに外へ出てきたというのに、彼女の執事と護衛兵たちの姿がない。彼らが寝ているはずのテントを開けてみるが、そこには人の気配すらなかった。

「こいつら、どこに行ったんだ」

寝床が冷たく、しばらく前から不在だったことを確認しつつ、カルロが呟く。

ハンターチームのリーダー格がそれに答えた。

「俺が最後に見たのは、火の番を変わったときだ。護衛兵のやつらが起きてきてな。代わらせてくれって言うんで、お言葉に甘えて俺らも寝させてもらったのさ」

カルロはキャンプ場の中心で焚いている火を見た。消えかけで、燃えカスに僅かな赤い光が残り燻っているだけだ。彼らがいなくなってから結構な時間が経っているらしい。

アニータが何か言おうと口をパクパクとさせる。しかし言葉にならない。事態は彼女の常識を遙かに上回っていて、少女に処理できるものではなかった。

そんな彼女を座らせて、カルロが言った。

「火竜の咆哮といい、明らかに異常だ。俺が様子を見てこよう」

「一人で大丈夫かい」

リーダー格の男にカルロは頷いて見せる。

「むしろ動き回るのは俺一人の方がいい。お前らはここでそいつを守っている」

カルロが顔色を蒼白にさせて震えているアニータを顎で指す。ハンターの三人は二つ返事です承した。

「それから必要な荷物をまとめておけ。いざつてときに、すぐに逃げられるようにな」

いざつてとき。

それが具体的に何なのかは、アニータには想像がつかない。しかし彼女でさえも、その時は自分の命がいつ散ってもおかしくないのだらうと予感した。

カルロはただ怯えるだけの依頼主に歩み寄り、片膝を地面につけて彼女と視線を近づけた。近づけてなお数十センチもある背丈の差は埋まらず、アニータは空を仰ぐようにカルロを見上げる格好になる。

少女は今にも泣きそうだった。純粹無垢な瞳が溜め込んだ涙で潤んで、自分を覗きこむ大男を映している。わけの分からぬ状況の中ですがるようにカルロを見つめる少女は「置いていかないで」と言っているようであった。

カルロはらしくもなく罪悪感に躊躇ったが、踏ん切りをつけてアニータにあるものを

手渡した。

「お前は武器なんて持っていないだろう。困ったらこれを使え。導火線に火をつけるだけでいい」

アニータの両手には、紐付きの小さな球体が四つとマッチの箱が乗っている。ハンター御用達の音爆弾と煙玉だ。

適切に使う自信などアニータには無いが、渡されたこれは、彼女の心細さを僅かにでも和らげようとしたカルロの思いやりだ。

何の可愛らしさもない使い捨ての道具。しかし無愛想な男の気遣いとしては妙に似合っている。アニータは「大切にします」などと本末転倒なお礼を言った。

「咆哮は森の奥から聞こえてきた。まずはそっちに向かって火竜の様子と爺さんたちの所在を確かめてくる」

▼
そうしてカルロは松明をかざして、夜の森へと駆け出した。

森丘の森部分を担うシルクオーレは樹海のような様相をしている。磁石を狂わせる磁場などは持たないが、その迷宮ぶりは幾人ものハンターたちを泣かせてきた。

カルロはそんな森を、闇の中でも迷わず進んでいく。松明の火に足元を照らされているとは言え、地図を頭に叩き込んでいるとは言え、夜の密林を鹿のように軽やかに駆けることは並大抵のことではない。

三度目の雄叫は聞こえてこなかった。火竜への驚異は過ぎ去ったということか。だが情報が何もかも足りていないカルロは発端の地に行き確かめるしかない。

カルロには火竜がいる場所の検討が付いていた。雄叫びが聞こえてきた方角は森の奥地、ベースキャンプからでもその頂上が見える、この辺りで一番高い岩山だ。その中にはベースキャンプとは比べ物にならないほどの規模の洞窟があるという。そこに火竜が居を構えている可能性は非常に高い。

しかしなぜギルドは『危険生物の報告なし』などという情報を寄越してきたのか。火竜なんて一級の危険を見逃すなどと、彼らの仕事ぶりはそんなにザルだったのだろうか。これではもう、ギルドから離れてG級の称号も返還してフリーのハンターとなる方が良いのかもしれない。

そんなことを考えて走っていけば、森を抜けて岩山に続く丘を登るところまで来ていた。ここからは山の中腹辺りも見えて、火竜の巣があるだろう場所の周りも様子を見るくらいならできそうだった。

実際に岩山まで行き、巣を覗いてみようなんて気は全くない。いくらG級でも火竜と

何の準備もせず出会すなんて、自殺行為だ。交戦だけは絶対に避けなければいけない。目をつけられまいと松明を消し、雲の合間から覗くうつつすらした月明かりで観察しようとする。

その時だった。

何かがこちらに近付いてくる気配がする。夜の暗がりでも輪郭がボヤけた影が、しかしはつきりとカルロに向かって歩いて来ているのが見えた。

それはどう見ても人間であり、さらに近寄ってくれば、その人影はカルロが探していた者であった。

「おやおや。お早いお着きですな、カルロ様。さすがはG級ハンターでございます」
闇の向こうから現れた人物、リオハート家の執事が温和な口調でカルロにそう言う。彼が生きていることに一瞬安堵したカルロだったが、そのすぐあとに疑問を持った。

「あんたか。無事そうだなによりだ。それより、こんなところで何してるんだ。五人の兵士どもは何処にいる」

こんな真夜中になぜ外に出て、森を抜けたところまで来たのか。その疑問は当然、キャンプ地を出発する前からあった。

彼らが何らかの用で連れ立って外出し、火竜に襲われたという最悪の展開までは予想していた。執事がこうして一人で現れたのは、護衛兵たちが火竜の餌食となったことを

示しているのかとも思った。

しかし、執事の態度は実に穏やかで、火竜に襲われた様子は一切ない。それなのに護衛兵の姿は見えない。

よしんば執事と護衛兵たちが全く別の意図で別々に行動していたとして、それでも火竜の咆哮を聞いたであろう執事の落ち着きぶりは異常に思えた。一般人にとつては未曾有の恐怖はずだ。

不可解に不可解が重なり、事態の真相を謎に包んでいる。カルロはきな臭さを感じていた。

「彼らですか。そうですねえ、そのこともお伝えしなくてはなりません。ですが、まあまずは一つ、ビジネスについてお話ししましょう」

執事は明朗な声で、要領が掴めぬことを言う。

カルロが何も言わず執事の様子を伺う一方、執事は一呼吸置いた後、まっすぐカルロの目を見た。

「契約を変更しませんか」

「………なんだと？」

聞き返すカルロに、執事は話を続けた。

「ですから、契約の変更でございます。現在カルロ様が受け持っているお嬢様の護

衛という契約を取り止め、私と新たに契約を結んでほしいのです」

何を言っているんだこの爺は。

その思いを全面に出してカルロは言った。

「意味がわからん。一体、何の話だ」

具体的に言えと睨み付けるカルロに対して、執事の姿勢は変わらない。むしろより笑みを深くした。

「ふむ、以外に察しが良くありませんな。あまり品性を損なう言い方をしたくはないのですが、仕方ありませんね。率直に申し上げます。寝返つて頂けませんか」



時は遡り、まだ真夜中のキャンプ地が平穏で満たされていたあたりのことである。

護衛兵たちが、火の番をしていたハンターに代わる旨を告げ、火を取り囲むようにして座っていた。

「感心ですな、皆さん」

彼らに続いてテントから起き出してきた執事が言った。護衛兵の一人が苦笑する。

「あなたが提案してくれたのではないですか。皆で火を守るべきだと。こんな大人

数でやることでもないでしょうがね」

「いえいえ。一人では心細くなりますよ。さつ、せつかく男だけで火を囲んでいるのです。お嬢様の前では出来なかつた話などもここでは許されますよ」

愚痴とかね。

執事がそう言ったのを皮切りに、護衛兵たちのお喋りは段々と盛り上がっていった。アニータの眠りを妨げぬよう小声ではあるが、日頃の鬱憤から始まり、ちよつとした下世話ネタまで話し合う。

しばらくそうしていて、護衛兵の中でも一際真面目な兵士が眉を釣り上げて呻いた。

「しかし、なんなんだあいつは。あのカル口とかいう、お嬢様が雇われたハンター。何様なのだ」

酒で少し酔っているようで、顔が赤い。彼に同調するように他の者も愚痴をこぼす。

「まったくだ。G級だからって、偉そうに」

「ありやならず者の類いと一緒だよ。粗雑な振舞い、お嬢様に対してもあの無遠慮な話し方。忌々しい限りだ」

「料理は美味かつたけどさ」

「お嬢様も我々がいるというのに、何故あんな者を選んだのかなあ」

不平不満は言い出せば歯止めが効かない。

それもそのはずで、彼らは今日、何一つ仕事らしい仕事ができなかったのだ。お荷物
の自覚が芽生え始め「何故俺たちはここに居るのか」と齒軋りを立てていた。

さらにはアニータがカルロにくつついて離れず、なんでもかんでも頼っている様が面
白くないのだ。蚊帳の外に出されるというのは辛いものである。

そんな護衛兵たちの鬱憤は溜まりに溜まり、その矛先は嫉妬と一緒にカルロに向けら
れた。とにかく、蔑ろにされている自分達の立場が気に入らなかつた次第である。

カルロの悪口を羅列する護衛兵たちに微笑んで、執事は話に割って入った。

「皆さん、相当腹に据えかねているようですね」

「当たり前ですよ。あんな鼻持ちならない奴はいません」

しばらく間を置いて、執事が「そうだ」と人差し指をピンと立てた。兵士らは自然と
その先に注目する。

「良いことを思い付きました。ねえ皆さん、名誉挽回のチャンスです」

劣等感の塊となっていた護衛兵たちは、執事のもたらした垂涎の話に積極的に耳を傾
けた。

執事の言う策とはつまり、以下のことである。

「いいですか。このまま普通にキャンプを過ごしてしまつては、お嬢様の中のあ
なた方の存在価値は朝靄のごとく霧散してしまふでしょう。しかるに、逆転の手を打た

ねばなりません」

「そんなものがあるのですか」

「ありますとも。実は私が密かに入手した情報によりますと、この森丘にそびえる岩山には、かつて火竜が住み着いていたらしいのです。ギルドの報告では現在はいないようですが、そこには彼らの生活の痕跡が残っていることでしよう」

「ふむ。それでどうするのです」

「察しが悪いですねえ。火竜、それも巢を守るならば雌火竜リオレイア。その鱗が落ちている可能性が高いのですよ。やるべきことは一つでしょう」

何人かが「おおっ」と感嘆の声をあげる。

「リオレイアと言えば力の象徴。我らがリオハート家の家紋にもなっています。お嬢様も、そんなモンスターへの興味は大変強く持つてらっしゃいます。もし、この度リオレイアの鱗を貢げたのなら、必ずやあなた方の扱いは一変することでしょう」

護衛兵たちはこのトレジャーハント計画に唸った。

確かにそんな素晴らしい贈り物さえあれば、あのネームバリューで良い気になっているカル口めをギャフンと言わせられるに違いない。

色めき立つ護衛兵たちに執事は最後の発破をかけた。

「それでは、善は急げ、今から行きましょう」

「ええつ、今からですか。さすがに性急すぎるのでは」

「昼間ではカル口様の目があります。私たちが勝手に遠くまで足を伸ばすことは許さないでしょう。彼を出し抜く必要があるのです」

明日がどうなるかなど分からん。好機はすぐ目の前にある。

そんな風にして口先のみで護衛兵たちを束ね、執事は雌火竜の元住処である岩山への案内を開始した。

それから多大な時間と労力をかけ、森を抜けて岩山をよじ登った。途中で落ちそうになったりもしたが、若く体力もあつた彼らは助け合いながら進む。

老人と言つて差し支えない執事は先頭に立ち、一人で難なく目的の山頂に辿り着いた。

「さあさあ。お入りくださいな」

「わつ、わつ、押さないでくださいよ」

不気味に大口を開けている洞窟に躊躇う兵士たちの背中を執事が押す。松明を持った五人は、暗がりには怯えながら固まって進む。

そして暫く進み、足元を見て歓声を上げた。

「う、鱗だ、ほら！」

「おおおつ、なんとも頑丈だな。これが火竜の鱗なのか」

「見ろつ、奥に行くほどたくさん落ちているぞ」

護衛兵たちは四つん這いになり、地面を舐めるようにして鱗を夢中で拾い集めていった。もはや前は見ず、ひたすらお宝探しに執心する。

アニータへの貢ぎ物としてはもちろんのこと、火竜の鱗はその一枚を持って帰っただけでもまとまった金になる。目の前に金貨が散らばっているような状況に彼らは血眼になった。

そうして奥へ奥へと這って行き、そこかしこに鱗が落ちている場所まで来た。

「おい、なんだか随分温かいな」

真面目な一人が言った。

「そうかあ？あまり変わらない気もするが」

「風がないからだろ」

「いや、確かに洞窟にしちゃ温かいぞ」

そんな会話をする護衛兵たちの後ろから風切り音と共に何かが飛来した。振り向くより早く、それは彼らの脇を通り抜け、暗闇にぶつかった。

ぶつかると同時に小規模な爆発が起きる。

火薬の臭いが立ち込め、その爆発が人工のものであることを示した。

何事かと護衛兵たちが慌てたその時、洞窟内の温度が明らかに上昇した。

どんより覆っていた雲が晴れていき、天井に空いた穴から洞窟内へ月明かりが差し込む。

そして彼らは畏怖と驚愕に目を見開いた。

火竜が以前住んでいただなんて、とんでもない。それならば鱗が誰にも採られず手付かずのまま放置されているのは不自然過ぎたのだ。

薄い月光に、現役の鱗がきらめく。荘厳な二つの瞳は、強かに侵入者を見下ろしている。爆発物を突然叩き付けられた「彼女」にとって、目の前にいる有象無象の人間どもは、文句なく我が家を脅かす敵である。

雌火竜リオレイアが咆哮をあげた。



執事の口から語られた話を、カルロは苦虫を噛み潰したような気持ちで聞いていた。淡々と語る執事には仲間を失った悲しみも、化け物に襲われた苦しみも見られない。まるで予定通りと言わんばかりの態度である。

「なぜ、そんなことを」

カルロの質問に、傷を負うどころか服さえほとんど汚れていない執事が、穏やかな笑

顔を全く崩さずに答えた。

「もちろん邪魔だったからです。それに、彼らも亡くなった方が後々の言い訳がしやすいのですよ」

邪魔と言ったか。

カルロの背筋に冷たい汗が伝う。少しづつ話の整合性を取るうちに、最悪の予想が首をもたげてくる。

それを表情には出さず、あくまで冷静に話を続けた。

「それだけのために、随分と回りくどい手を取ったな」

「一石二鳥でしたので。彼らを退場させるにも、それなりの舞台は必要でしょう。

それに、あなたはこうして、お嬢様から離れて来てくださった」

疑心が膨れ上がる。執事が投げた一石によって落ちた鳥は二つ。護衛兵たちと、そしてカルロだ。

アニータとカルロを引き離すことの意味。不可解な出来事。執事の暗躍めいた行動の正体。それらの辻褄を合わせた先にある答えは一つしかない。

「…… 今回のキャンプを企画したのは、確かお前だったな」

「はー」

「お前が雇った三人のハンター。依頼書にあった日付では、奴等とけっこう前から

連絡を取っていた」

「そうですね」

「この森丘を指定したのもお前か？なら、不可解な出来事は全て……」

「その通りです」

執事、もとい老年の暗躍者は躊躇うことなくあつさり肯定していった。

カルロの疑念が確信となる。やられたと思うには、もはや遅すぎる。キャンプ地へ、アニータのもとへ駆け戻りたくなる衝動を押しさえつけるのに多大な精神力を必要とした。

「目的はなんだ。誘拐して、身代金でも稼ごうって魂胆か？」

淡い期待を持って問いたです。誘拐ならば、少なくとも命は繋がっている。まだ何とかなる道もあるかもしれないと、そんな蜘蛛の糸にしがみつくと気持ちで言った。

しかし老人は首を振り、今度はカルロの言葉を否定した。

「誘拐ですか。残念ながら、違いますな。人質を取れるような仕事でしたら、こんな大それた仕掛けなど必要なかったのですが」

一縷の望みを絶たれて顔をしかめたカルロに、老人は語りかける。その笑顔は穏やかだったものから、だんだんと深くなってきた。

「後ろめたさは無いのか。相手は少女で、しかも長年仕えてきた人間だろう」

「どうでしょう。少なくとも、リオハート家に仕えてきたのは今日のためです。貴族と水面下の抗争は切っても切り離せません。跡取りを絶つて衰退させるなんて、いつの時代も使われる常套手段でしょう」

カルロが押し黙る。

「カルロ様は聡明でいらつしやいますから、もうお分かりですよ。すでに、あなたのクエストは失敗しているのです」

護るものもないのに強情を張ってどうするのだ。老人は言外に告げていた。

「さあ、決めてください。この件を口外せず、私共と口裏を合わせていただくだけで結構なのです。当然、世間からの風当たりはありますが、このまま帰るのと、情報を操作して被害を減らすのでは雲泥の差がありますぞ。もちろん契約ですので、こちらから謝罪も含めた報酬を弾みましよう」

あなたには、メリットしかないはずです。

老人はそう締め括ってカルロの反応を待った。それ以上急かすこともなく、悠然と大男の答えの行く末を見守っている。

カルロはしばらく黙つたままだった。単に迷っているだけなのか、それとも、メリットについて思案しているのか。

強い風が吹いた。背丈の低い草木を煽り、巨体のハンターと老年の暗躍者の間を荒涼

と吹き抜けていった。

「断る」

カルロの答えに、老人は一片も動揺は見せない。むしろ面白がるようにさらに笑みを深めて「何故です」と聞いた。

「俺をお前らの基準で測るな。メリットだなんだと小賢しくて反吐が出る」

侮蔑のこもった啖呵を受けて、老人は手を叩いて褒め称えた。執事が仮の姿であるにも関わらず、実に優雅な仕草である。

「さすが、さすがは孤高のカルロ様。一人の男として尊敬申し上げます」
そして拍手の余韻を残したまま、右手を外套の中に入れる。

「しかしながら現実として、契約を結んでいただけなければ、私はあなたの敵にならざるを得ません。あなたを始末するのは骨が折れそうですから、避けたかったですからね」

懐から取り出した手には銃が握られていた。ハンターが使うボウガンを極限まで軽量化した、片手でも取り回せる代物。その射線がカルロの額にぴたりと合わせられ微動だにしない。

カルロは大嫌いな道具を見て眉間にシワを作る。人間同士のいさかいにしか役に立たぬ物なんて、唾棄すべきだと思っていた。

銃口が向けられても動じることもなく、敵となった老人を睨み付ける。

「私が連れてきた三人は、この手の仕事に秀でています。無論、私も。四人の暗殺者から逃げ切る自信はありますか？」

「返り討ちにしてくれる」

雄々しい即答。老人の笑みは、もはや悪魔的に歪んでいた。

凄い速さで流れる雲に伴い、月明かりが一触即発の二人の上で明滅する。

緊張が最大限に膨らみきり、まさに老人の指が引き金を引かんとした時であった。

「カルロさんっ！」

あり得るはずのない声が響いて、両者を呆然とさせた。それは少女のものであり、既にこの世から去っているはずの声だった。

アニータ・リオハートが息を切らして駆けてくる。

彼女はカルロを見つけた安堵から笑顔になり、その後、カルロに対して銃を構えている執事を見て、困惑の表情を浮かべて立ち止まった。

判断は一瞬で下された。銃口がカルロから、呆然としているアニータに向く。老人は躊躇せず、すぐさま発砲した。

鮮血が夜闇に散った。

暗殺者である老人が放った弾丸は、肉に食い込み血管を破った。カルロが舌打ちをする。

「カルロさん……？これ、え、なんで」

カルロの腕の中で無傷のアニータが混迷の声を漏らす。キャンブから走ってきたであろう少女の息は弾んでいるが、途切れ途切れの言葉は、それとは関係ないだろう。

カルロの二の腕からは血が溢れていた。

「逃げるぞ」

老人が次弾を撃つより早く、カルロは痛みを無視して煙幕を張った。指折りの実力者だからこそできる早業である。

視覚が効かなくなった草地で銃弾がやたらめつたら放たれる。それを肩に掠めながら、左手にアニータを抱えて煙の中を森へ向かって駆けた。

風が煙を散らした後にはもう人影はなく、老人は構えていた銃を下ろしたため息をついた。先ほどの緊張感はずでに煙と共に霧散して、しばらくは雲から出てきた月を眺めていた。

丘の麓に広がる森から三人の人間がやって来る。ハンター、いや老人が雇った男たちが、依頼主を見て苦々しい表情で言った。

「すまん。逃がした」

そんな彼らに視線を移して、老人は相変わらず穏やかな口調で話しかける。

「いえ、仕方がありません。しかし一体何があつたのです?」

「煙玉と音爆弾を使われた。カル口の奴がキャンプから出ていく時にアニータに渡していたんだ」

リーダー格の男が悔しそうに足元の石を蹴飛ばした。

「しくじったぜ。取り上げておきや良かった。まさか、素人が咄嗟に使えるだなんてよ」

老人は不思議に思った。

幼少の頃より長らく仕えてきた彼女は、マツチを着けたことがあるかすら怪しいものだ。三人の男に囲まれ殺されそうになった、そんな身も心も凍るはずの異常事態のなかで、あの箱入り娘がハンターの道具を有効に使ったと言うのか。いや、それだけに留まらず、たった一人で鬱蒼とした暗い森を抜けてきたのだ。

老人は銃を懐に戻してフツと笑った。その笑顔はカル口と対峙していた時とはまるで気色が違う、好好爺に見えるものだった。

「お嬢様も、私の知らないところで成長してらっしゃるのでしようかね」
事態に似合わずのんびり呟く老人に、偽のハンターたちは困り顔で訪ねた。

「それで、これからどうする。来る途中に煙幕が見えたが、この状況からしても交渉は失敗したんだろ？」

「ええ、こちららも貴方たちに負けず劣らず大失敗です。素晴らしく高潔な人でしたよ。カルロというハンターは」

「奴が敵か。厄介だな。兵士のやつらも大概邪魔だったが、生きる伝説を相手に戦わにやならんのか」

生きる伝説。誰とも組まず、単身で最高の榮譽であるGの称号を得た男。

それを聞いた老人の顔からはまた穏やかさが隠れ、口元が陰惨に吊り上がった。

「腕が鳴るじゃありませんか。それに悪いことばかりではないですよ。伝説とは言葉、実際は手負いの人間。さらには大きなお荷物が付いています」

松明を持つていた一人が、その炎を消す。森に逃げ隠れた相手に位置を知らせるだけの物に成り下がるからだ。そんな明かりがなくとも彼らには、暗殺者として鍛えられた夜目と嗅覚がある。

「さて、一仕事終えてしましましょうかね。ほらどうです。雲も程よく無くなり、おあつらえ向きの、良い月夜ではございませんか」

男たちはハンターの装いを捨て去る。必要なものは夜の森で音を立てずに動き回れる身軽さと、人を殺せる程度の攻撃手段のみである。月からも姿を隠すように黒い布を頭から膝下まで覆い、四人の暗殺者は野犬のごとく瞳を殺気で光らせる。

老人が闇に向かって宣告した。

「さ、狩りの時間ですよ」



アニータは震える手で、カルロの外套をぎゅつと掴んでいた。彼の右腕に手を回せれば、それが一番楽そうであったが、血が流れ続けているであろうそこに触れるのは何としても避けたかった。

「カルロさん、カルロさん。もう休んでください」

涙声でそう言うアニータに「まだだ」と短く答えて、カルロは森の中を走り続けた。右腕で蠢く痛みをまるで感じさせず、息すら荒げることなく森の奥へと進む。

力強い彼に抱えられていると、何処からか安心感が湧いてきてアニータの緊張を解してしまふ。彼女はそれが堪らなく嫌だった。苦痛をおくびにも出さないこのハンターは、現実として傷を負っているのだ。それも、自分のせいだ。

「ごめんなさい」

もう何度目かになる謝罪を口にする。カルロはさして興味もなさそうに決まった答えを返した。

「気にするな」

「私が、私がバカだったんです。浮かれて油断して、こんな所まで来たのに何も変わらない、貴方にも、迷惑をかけて」

何やら固い葉っぱが宙ぶらりんのアニータの足を掠めて浅い切り傷を付けていく。そんな、以前なら深刻にとらえていたはずの事にさえ今の彼女は気付きもしない。

カルロはひた走った。

さしもの彼も呼吸が乱れ始めた頃に、ようやくその足は止まり、左腕に抱えていた少女をゆっくりと地面に下ろした。

木々が余すところなく生い茂り、空の様子を完全に断絶している。暗すぎてアニータにはよく見えないが、一方が断崖の岩の層で塞がれている、視界も敵が来る方向もたった180度に限定される場所。

カルロは明らかに、ここで敵を迎え撃つ腹だった。木に背を預けて不安そうにカルロを見上げるアニータは、そんなことも露知らず銃弾を受けた彼の傷を心配するばかりである。

「お前には感謝している」

カルロが唐突にそう言つて、アニータは豆鉄砲を食らつたようにキョトンと目を瞬かせた。

「俺はもう、駄目だと思つていた。お前は生きていないものだと言つた」

アニータはカルロが去つた後に、キャンプ地で起こつた出来事を思い返して震え上がった。あの時突き付けられた焼けるような殺気が、今でもひしひしと伝わってくるようで、彼女の喉を乾かさせる。

「だがお前はここに今、生きています。それはすごい奇跡だ」

「はい。運が良かったんです」

「いいや、決して運などで片付けられる話じゃない。俺が渡した道具を使い、スカート裾を破いてまで夜の森を走り抜けて俺のところまで来た。それは、お前の勇気があつてこそその奇跡なんだ」

「勇気……」

私はそれほどに凄うことをしたのかしら。

実感が湧かず、半ば呆けてオウム返しに単語を呟く。そんな物語でしか聞いたことがないものが、自分に備わっている気はしなかった。

カルロが腰に巻いていた小さな麻袋からいくつかの小道具を取り出しながら、いつに

なく饒舌に話す。

「誰もが持てるものじゃない。ハンターだって、本当の意味で勇気を胸に抱いているやつは、たぶん黄金ほどに珍しいだろう」

カルロはアニータに笑いかけた。暗闇ではまだ夜目が効かないアニータにはよく分からない。けれども確かに、今まで無愛想だったカルロが彼女に見せた微笑みだった。

「俺は感謝している。お前の勇気と、それが起こした奇跡に……ありがとう」
生きていてくれて、ありがとう。

アニータの目に涙が溜まる。16年も生きてきて、初めて言われた気がする。誕生日は毎年祝ってもらってきたが、心の底からこの矮小な命を祝福されたことがあったかどうか。

今にも泣いてしまいそうなアニータの肩に手を置き、カルロは言った。

「泣くのは後にしろ。お前、まだマッチは持っているか」

アニータが胸ポケットから、カルロに煙玉などと一緒に渡されたマッチ箱を取り出す。

「玉は全て使ってしまったけど、これはまだ一本も使ってませんわ」

「じゃあどうやって煙玉と音爆弾に火を着けた」

「転んだすぐ後ろに焚き火の燃え残りがあって、こう、背中で隠すようにして着けら

れたの」

ご令嬢にしてはなかなかブツ飛んだ武勇伝にカルロは愉快的な気持ちになった。こんな切羽詰まった状況だというのに、アニータとの会話は意外に楽しい。

マツチの火でピンセットの先を炙ると、カルロは覚悟を決めるように息を強めに吸った。

「何か、布みたいなのはないか。汚れていても良いから」

それでしたら、とアニータは自分のスカートを破ろうとして、カルロが押し止める。

「やっぱりこれで間に合う」

欲しかったのは声を押さえるための、猿ぐつわだった。さすがのカルロも、少女が履いているスカートを口に当てるのは抵抗がある。

カルロは手近に落ちていた枝を口の端し深くまでくわえ、ピンセットを右腕の傷口に突っ込んだ。

額に脂汗が滲む。麻酔もなしに痛覚神経をまさぐる苦しみはどれほどのものか。

十秒ほどして引き抜いた先端には、歪に変形している弾が摘ままれていた。比較的軽い銃弾がカルロの腕の中で潰れ、その切っ先が筋肉や血管をスタスタに引き裂いたことだろう。狩りには必要ない、人間に苦痛を与えるためだけの機能。

カルロは吐き捨てるように弾を地面に投げ、千切れた服の糸屑なんかも取り除いたあ

と、傷口を水筒の水ですすいで自分の服の端を破き、それでキツく縛り上げた。

あつという間の出来事だったが、カルロの苦悶を耳にしたアニータは、すっかりその顔から血の気が引けていた。蒼白になって、カルロにおずおずと尋ねる。

「大丈夫？　死なない？」

「死なん」

「さ、触つてもいいかしら」

「駄目だ」

心配からか意味不明なことを言うアニータを突き放して立ち上がる。カルロの傷ばかり気にかける彼女もまた、泥だらけになって体の節々に擦り傷を負っていた。

「手伝え。ここで奴らを狩る」

カルロの言わんとしていることに理解が遅れて呆けているアニータに、詳しく言つてやる。

「もう追つてきている。生き延びる道は、奴らを打倒した先にしかない」

ポーチから束になった細いロープを取り出してそれをアニータに放り投げる。

両手でロープを危なっかしく受け取ったアニータが「どうして」と聞いた。

「銃で撃たれたのに無茶ですわ。ここで隠れていましょうよ。ね？」

「隠れていても事態は好転しない。きつと奴らは俺たちを探す手段を持っている。

「ここがバレるのも時間の問題だ」

「じゃあ、逃げるのは」

「それこそ無茶だ。ここは気球船で来ることが前提とされている狩場だ。地図にも載っていない中を、徒歩で街まで辿り着くことは不可能だ」

アニータは閉口した。カルロが自分を庇ったときのことか、思い出され、胸が苦しくなった。あの死地がもう一度来るといえるのか。

「罫を作る。そのロープを持ってこい」

木の間に、地面すれすれの高さにロープを張る。草むらに隠れて昼間でも意識しなければ見つけれないだろう。

その周りにカルロはまきびしを蒔いた。アニータが何気なくそれを素手で触ろうとして、厳しい声で「止めろ」と言われる。

「これは毒液に浸したハリの実のまきびしだ。大型モンスターに使うための強力な毒だ。人は触れるだけでしばらくその部位が動かさなくなる」

アニータは心底恐ろしく思った。

大型モンスターといえば下手な小屋よりずっと大きく、体の作りも非常に頑丈なものだ。本来それに使うはずの道具を、人に対して使おうとしている。触れるだけでも危険ならば、もしロープで転び、身体中に刺さってしまったらどうなるのか。

一瞬、止めようとしたが、アニータはそれが場違いな意見だと気付いて口をつぐんだ。今はそれだけ深刻な状況なのだ。

他にもカルロとアニータは、大木を中心地としていくつかの罾を仕掛けた。全てに殺傷能力があるわけではないが、どれもこれも人に向けて使用するには躊躇われるものばかりだ。

カルロはまた左腕でアニータを抱え、大木の手頃な枝まで器用によじ登った。たった4、5メートルほどの高さだが、片腕の負傷と人を一人抱えた状態での木登りは常人の技ではない。

「見えるか」

枝に座つてもまだしがみついているアニータにそう聞くと、彼女は大きく頷いた。

「ええ。すごいわ。さつきまで瞼を閉じているのと何も変わらなかったのに」

アニータには今、罾を張り巡らせた下方の様子がおぼろ気ながら見えていた。あの暗殺者たちが音もなくやって来ても、そのシルエツトでどうにか気付けそうである。

「目が慣れたんだな。若いだけあって順応が早い」

褒められたと思つたのか、アニータは少しだけ得意気に鼻を鳴らした。

「そう？　すごい？」

「普通だ」

今度は拗ねてそっぽを向く。殺されそうだとこのに意外と余裕があるものだと、カルロは苦笑した。

早くも機嫌を治したらしく、アニータはカルロに話しかけてきた。

「まだ、少しだけお話してもいいかしら」

カルロは見えない彼我の距離を考える。シルクオーレの森の広大さ。暗殺者たちの優秀さ。自分たちが今いる場所の見付けにくさ。精査して、もうしばらく余裕はありそうだと判断した。

「少しだけならな」

そうしたら嬉々として話し始めるように思われたが、実際のところ、アニータは暗い口調で厳かに語りかけた。

「ねえ、執事と何か、話したんでしょう」

「…… ああ」

「なんて言っていたか、教えてくださる？」

どうしたものか、とカルロは考えた。裏切られたばかりの少女がどんな答えを望んでいるのかは見当がつかない。結局は、真実を脚色なく告げる他なかった。

「ネタばらしと、あとは事件の隠蔽の手伝いを迫られただけだ」

アニータの口元が固く結ばれる。彼女にはその情報だけで十分すぎた。執事はもと

から、自分を殺すつもりだったのだと納得できてしまった。

「そう……彼らは、護衛兵の方々は、どうなったのですか」

期待のこもっていない口調。どうやら、察しはついているらしかった。

「爺さんの奸計でな。リオレイアを利用したらしい。たぶん、一人も生きてはいない」

「痛かった、でしようね」

「どうだろうな。痛みを感じる間もない一瞬の出来事だったかもしれん。火竜は、人のいる世界とは隔絶した存在だ」

重い沈黙が流れる。その間は、まるでアニータが亡くなった兵士たちに黙祷を捧げているようであった。

「……彼らとは、あまり話したことがありませんでした。けど何人かには奥さんや子どもがいて、そうでなくとも大切に思ってくれる人達がいたと思います」

あまりにも、浮かばれません。

そう言うアニータの声は、とても少女のものとは思えない深い哀愁を感じさせる。

カルロは言い様のないやるせなさを覚えると共に、彼女に真の貴族の姿を見た。利権も利益も関係ない、人の上に立てる高潔な器。こんなところで死なせてはいけないと思つた。

「どうして、私なんかのために、ここまでするのでしよう。酷いわ。私なんかには彼ら五人や、カルロさんの命が釣り合うはずないもの」

アニータが静かに憤る。そんなことはない、とカルロは言う。

「命に優劣はない。ただ、何に価値を見いだすかは人それぞれだ。ギルドは一枚岩ではないし、それと癒着しているような貴族などに良識なんてない。そんな奴は、何でもやる」

つまりそれは、あの暗殺者を差し向けた貴族やギルドの派閥にとつて、アニータの命もカルロたちの命も、利権とやらの前では塵ほどの価値しかないということである。

生きる上では何の意味もない理由で殺される。アニータは昼間にキャンプ地で見たくルビの死体に、自分の姿を重ねた。

「あの、死んでいたケルビも……」

「そうだな。あれは故意だろう。あわよくば、真つ先にキャンプ地に入ったお前をランポスたちに殺させる気だったんだ」

カルロの言葉は率直で、アニータの胸中を散々に掻き乱した。許されないうことだと思つた。自分もそんな貴族の一部なのかと考えると吐き気がするようだった。

袖を握るアニータの拳に力が入り、カルロは諭すように言った。

「だが、お前には良識がある。勇気もある。それは誇つて良いことだ」

「ありがとうございます」

照れ臭そうにアニータは微笑んだ。父親に学業の成績を誉められるより、ずっと嬉しかった。

それから幾ばくかの躊躇いの後、アニータは顔を赤らめ、カルロに囁きかけた。

「ねえ、それじゃあ、もし無事に帰れたら……」

そこまで言いかけて、大きな手で止められる。

空気ががらりと変わった。カルロから伝わる緊張が一気に膨れ上がる。

アニータにはまだ何の気配も感じられない。しかし命運を分ける時が、すぐそこに迫っているのだと理解することはできた。

カルロが岩のように身動きすらせず息も潜めているのに習い、アニータも精一杯自分の気配を殺す。

夜の森に虫の鳴く音と風の僅かなうねりだけが響く。

そしてついに、カサカサと葉を掻き分けるような音が聞こえてきた。まるで小動物が何の気なしに移動しているような音。

暗順応したアニータの目が森を這って進む影を捉えた。マントを頭から被っている暗殺者は、パツと見では人の輪郭とは分らない。あれが自分たちを殺すために動き回っているのだと思うと、毛が逆立つような恐ろしさを感じる。

影は右往左往しながらも確実にカルロたちがいる大木へと近付く。そして罠のある領域まで踏み込もうとしたその手前で、ピタリと止まった。しゃがみこんでロープやまきびしが隠れている周囲を確かめている。

気付かれた。

アニータが凍りつく。

声はしない。手招きをするようにジェスチャーを送ると、他の三人の影が森の奥から出てくる。彼らは付かず離れず等間隔で進み、手信号によって互いの状況を連絡し合いながら来たのだ。暗殺者の周到さ。油断は見られなかった。

罠を見つけた一人のもとに全員が集合する。何かを示し合い、彼らはその一帯の搜索を始めた。

次々に罠が見つけれられ、越えられていく。ロープとまきびしも、自動式の毒矢も全て見破られる。ロープは切られ毒矢の仕掛けは解除された。

アニータは死を間近に感じていた。絶望的な心境でカルロを横目で見るが、彼はまだじつとして、影たちの様子を観察していた。

「おかしい。近いはずなのに」

ボソリと暗殺者の一人が呟く。虫の音に消え入ってしまいそうな小さな声。

罠は見つけられてしまったが、アニータたちにはまだ気付いていないようだった。し

かしその発言からして、すでにこの近くに潜んでいることは分かっているらしい。また手信号がやり取りされる。

この場所を隈無く探そうということか。見つかるのは時間の問題だ。もうそこまで来ている。すぐ真下だ。

近い、見つかる。

緊張で頭がおかしくなりそうに思えたその時、カルロの手がアニータの目の前で人差し指を立てた。事前の打ち合わせを思い出し、アニータは目と耳を咄嗟に防いだ。

カルロが神速でライトボウガンを構えて放つ。

まるで無駄のない動きは、充填済みの散弾をほぼノータイムで発射させた。

しかし暗殺者たちの動きも洗練されていた。殺気を感じ取った彼らは一瞬にしてその場を離れる。

人には当たらず地面に着弾した弾は、その直後に爆発を引き起こした。火薬を内蔵した拡散弾では出ない規模である。地面に埋めておいた爆弾が、一緒に爆発したのだ。

カルロがアニータを庇うように外套を広げる。爆風によって石が高速で巻き上げられ、暗殺者たちを襲う。360度に飛来する天然の散弾は二人の背中を撃ち抜き、一人の脇腹を掠めた。残りの一人は上手いこと地面に転がり逃げている。

背を打たれた暗殺者が前のめりに倒れ、その先にあつたまきびしに刺された。突如す

さまじい叫び声をあげ、その次には事切れるように動かなくなる。対大型化け物用の毒の作用。

しかし、仕留め損なつた二人がそこで反撃に出た。カルロが次弾を装填するが、さすがに間に合わない。

いち早く照準を定めた暗殺者が発砲する。殺気から逃れるようにカルロはアニータを小脇に枝から飛び降りた。彼らが居たところに暗殺者の榴弾が着弾し、小規模の爆発と共に人を二人支えていた太枝をへし折る。

軽々と着地したカルロが、アニータを下ろす暇もなく片手でライトボウガンを構える。両手で扱うように設計された武器を、負傷した片腕で取り回す剛力。

カルロともう一方の暗殺者が発砲したのは全く同時であつた。

暗殺者の貫通弾はカルロの手の先から肩までを貫き、カルロの散弾は暗殺者の全身を吹き飛ばした。

ボウガンを取り落とす。カルロの右腕が力なく垂れ下がる。もはや腕としての用をなしていなかった。

膝を着いて動きを止めてしまったカルロに、最後の一人の凶弾が襲いかかろうとする。

「やめて！」

決着がつこうとしたその刹那、カルロの腕を離れたアニータが拾った石を無我夢中で投げた。

まるで遠心力が活かされない、少女の投げ方。

しかし石は、アニータに気を取られた暗殺者の頭を強かに打った。暗殺者が痛みに頭を抱えて呻く。

その隙を見逃すほど、ハンターは甘くない。

カルロは自由になった左腕で投擲用のナイフを投げた。暗殺者の首元を狙ったそれは大幅にズレて腹を刺した。

それでも十分だった。血を吹いた暗殺者は、身を翻して逃走する。

追おうとして、カルロは自分の力が急速に抜けていくのを感じた。失血と常人でも耐えられない激痛が、さしもの彼をも追い詰めていた。

「ぐっ…… うぐ……」

「カルロさんっ!?!」

生き長らえた安堵に浸ることもなく、苦しむ相棒にアニータは駆け寄った。

酷い傷だった。いや、これはもう、傷と呼べるのか。腕が丸々、破裂しているようだ。まともな明かりの下であれば、破れた皮膚と露出した筋繊維や骨が見えることだろう。

「ああ、そんな！しつかりして、カルロさん！」

泣き叫ぶアニータ。

強靱な精神力か、己が護る少女の声に呼び覚まされたか、カルロは大丈夫だと言うようにアニータの肩に左手を置いた。

「追う、ぞ」

重そうに腰を上げ、カルロはよろよろと立ち上がった。アニータは涙を溢しながら首を横に振る。

「やめてっ、もうやめてください。死んじゃうわ」

「ここにいても、死ぬ。奴が、俺たちを殺せる可能性は、なくなって、いない」

カルロは肩口で乱暴に止血を施し、最後の暗殺者が逃げた方向へと歩き出した。先ほどのように牡鹿のごとく森を駆けることは叶わず、身体を引っ張っていくように進む。

「ギルドの気球船を待っている時間はない…… 昼頃に、ベースキャンプを挟んで、この反対にある丘のすぐ側を、観測隊の定期船が通るはずだ。決着をついたら、そこへ行こう」

カルロは現実的な希望を口する。

生きること。ただそれだけのために歯を食いしばって前へ行こうとする彼を止める

術は、アニータにはなかった。彼女も涙で顔を濡らしながらも、その小さな体でよろめくカルロを支え、共に歩いた。

木々の葉の隙間から見える空は、いつの間にか白み始めている。風の向きも変わった。

夜が開けようとしていた。



「…… お早い、お着きですね」

おびただしい血の跡を追えば、またしても森を抜け、老人とカルロが対峙していた丘に出た。

そこにマントを被った人影が座り込んでいて、やって来たカルロとアニータを見てそう言った。

暗殺者の生き残りは、執事であった老人だった。彼の顔からは生気が全く失せて、もう飄々とした雰囲気も丁寧な物腰も、微塵も感じない。腕がはげたカルロよりも死に迫られているように見える。

「終わりだ、爺さん」

カルロが左手でボウガンを構える。アニータは彼の後ろに隠れながら、自分に仕えていたはずの老人を見つめている。その揺れる瞳は憎しみや嫌悪ではなく、悲しみと哀れみに染まっていた。

そんな少女の様子に、穏やかな微笑みを浮かべて老人は言った。

「その……ようですね。いやはや、ここまでは」

老人には、暗殺者としての積み上げられた自信があった。今回の仕事も、筋書き通りであれば何の問題もなく事が運ぶはずだった。それは兵士五人という障害を持たされたとしても揺らぐものではなかったはずだ。

しかしカルロが、一人でハンターの頂点にまで登りつめたこの男が、計算をことごとく狂わせたのだ。

そんな男を雇ったのが、今回の暗殺対象である何も知らなかった少女だというのは、もはや笑えてしまうほど数奇な運命である。

「対人に、恐ろしく慣れてらっしゃる。四人同時に撃ち取るなど……ふふつ、狩ってきたのはモンスターだけでは、ないようだ」

「上へ行くこうとすれば、しがらみも多大になるものだ。その中には俺を疎んだり、邪魔に思ったりする奴が何人もいた。あんたなら、よく分かるだろう」

「ええ……それはもう、馴染み深いものです」

負の感情が馴染み深いなどと言う老人は、それだけでも確かに、闇で生きる者なのだと伝わってくる。

「私も、歳ですな。万全に万全を、保険に保険をかけたつもりが。その回りくどさ故に、目的を、果たせぬとは。恥ずかしい限りだ」

老人が項垂れながら悔恨を語る。

それまでカルロの影に隠れていたアニータが、戸惑いがちに彼の隣に立ち、老人に話しかけた。

「どうして、どうしてこんなことをしなければいけなかったの。こんな危険で、恐ろしくて、辛いことを」

そこまで言ったアニータを、老人は睨んで黙らせた。まるで、その先は口にするなど言うように。

「お嬢様。貴女には分からぬことです。生涯を陽の当たらぬ場所に捧げた、愚者の気持ちは」

老人がちらりとアニータの足元に視線を移す。

彼女が履いているのは、老人が贈った靴だ。履きやすく、歩きやすく、丈夫な、アニータの足に合わせて作らせた靴。

あれが無ければアニータは今こうして生きていることはなかったのだろうが、老人に

そのことを悔いている様子はなかった。むしろ満足そうな顔さえしている。その筆舌にし難い感情は、当人にもよく分かりはしないだろう。

「さて……」

老人は座ったまま、懐を探る。

その動作からアニータを庇うように引き寄せたカルロだったが、そんな彼らの様を見て、老人はうつすらと笑みを浮かべた。

「ご心配、なさらず。もはや、私に、逆転の手段はございません」

それは真実だった。今の老人が攻撃を仕掛けても、それより早くカルロのポウガンが火を吹くことは明らかである。

しかし、と老人が言う。

「奥の手ならばあるのですよ」

彼が取り出したものは、銃ではなかった。大きな角のような形の、無骨な物体がその手に握られている。

それは角笛だった。その用途は、モンスターの注意を吹いた方に向けるというものだ。ハンターなら誰もが知っているが、仲間の緊急時以外で使いはしない。

老人の笑みは悪魔にとり憑かれたように凄惨なものになる。

意味を図りかねたカルロだったが、青白い顔がだんだんと焦燥により歪んだ。

「やめ——！」

やめろとカルロが言う前に、発砲する間もなく、老人は角の先端を口に当ててありつたけの息を吹き込んだ。

その音は夜明けの空を突き抜けた。

山を越え、谷を越え、森丘にモンスターの咆哮にも似た盛大な笛の音が響き渡った。

「くそつ、本当にやりやがった！」

どういうことかと、突然の出来事に追いつけないアニータがカルロに聞こうとした。

しかし少女の声は、もう一度鳴り響いた音に阻まれた。力を使い果たした老人が二回目を鳴らしたわけでも、山びこが返ってきたわけでもない。

それは、真夜中に聞いた、火竜の雄叫びであった。

大空から滑るようになって彼らの前に降り立った竜が唸り声をあげる。

朝焼けの空よりも鮮烈に赤い甲殻。雌個体よりも戦闘に特化した体型。

空の王者、リオレウスが爆発的な咆哮を轟かせた。

火竜は首を伸ばし、近くにいた老人を無造作に捕食する。立ち上がることすら出来ない老人は無抵抗のまま、リオレウスの強靱な顎に噛み砕かれた。

そして飲み込まれる刹那に、してやったり、と言いたげにカルロたちを見て、そのまま竜の口の中へと消えた。

自分の迂闊さに、カルロは齒噛みした。

夜に聞こえた雌火竜の激怒の咆哮。あれはただ攻撃された訳ではなかったのだ。卵を守る親竜が、その守るべきものに危害を加えられたことにより、種の存続の危機として打ち鳴らした警鈴だった。

そしてそれは一種の救難信号となり、つがいであるもう片方の親竜を呼び寄せもした。

そんな竜たちのヘイトを、老人は角笛でもって一手に集めたのだ。お前らの敵はここにいと。

「ひっ」

アニータが短い悲鳴を上げた。

難なく人を平らげたりオレウスが、今度はアニータたちを睨む。完全に人間を敵と見なしている。

圧倒的な力の化身を前にして立ち竦むアニータ。

カルロは固まった少女に激を飛ばした。

「行けっ！ 逃げろ！」

ボウガンに弾を装填し、火竜の眼前に立ちはだかる。

「ベースキャンプまで逃げて、昼になったら狼煙を上げろ！ 観測隊に助けを求め

るんだ！」

「で、でも、カルロさんが……」

「いいから行け！ アニータ！」

躊躇は一瞬だった。

呼ばれた自分の名に突き動かされるように、アニータは踵を返して走り出した。

どちらから食おうか迷っていた様子のリオレウスの首が、逃げたアニータに向きかける。

それをカルロの榴弾が止めた。顔面で爆発しても傷一つ負いはしないが、その意識だけはカルロの方へ向かせることができた。

やったと喝采を上げられるのも一瞬で、その直後にリオレウスは一步前へ踏み出して噛み付いてきた。つい先程、人を食い殺した凶悪な牙。

カルロはそれを横に転がることで何とか避け、反撃の体勢をとる。

しかしそこに、槍のような棘が何本も生えている尻尾が、超速で迫ってきた。

手負いのカルロがボウガンの銃身でそれを受けられたことは神業に近いが、それでも竜の一撃は重すぎた。

カルロの身体が手鞠のように地面を跳ねて、無様に転がった。上体すら満足に起こせず血へドを吐く。内蔵はズタズタに傷付き、皮一枚で繋がっているような状態だった右

腕は完全に千切れて何処かへいつてしまった。

リオレウスは瀕死のカルロを眺めてから、再び遠くなつていくアニータへ意識を切り替えようとする。

だがそれだけは、カルロが許さなかつた。

着火させた小型の手投げ爆弾をリオレウスに投げ付ける。強肩の面影はすでになく、爆弾は竜の足元にコロコロと転がって爆ぜる。

もちろんダメージなど望めるはずもない。リオレウスは鬱陶しそうにカルロへ近付き、その尻尾をまた無造作に振つた。

今度は紙屑のように宙へ舞い、ドサリと地面に落ちた。か細い、正しく虫の息である。もうこれ以上攻撃されなくても、すぐに死にそうな風体だった。

三度、リオレウスはアニータを捕らえようと動く。少女の姿はすでに視界からは消えているが、彼が飛び立てばすぐに見つかり、八つ裂きにされることは必至である。

「つれ、ないな……」

血の泡を立てながらカルロは不敵に笑つた。散々になつた肉体で、もう這うことすら出来ない。

「何度も、よそ見、するなよ」

それでも諦めてはいなかつた。

何の因果か、吹き飛ばされた先には、老人が使った角笛が落ちていた。この惨劇を呼んだ魔笛を、カルロが拾う。

視界にはもう何も映らず、音もやけに遠く聞こえる。笛を持った感触もなく、痛みなどどつくに消え失せていた。

しかし、あと一呼吸。息を吸い、吐き出す力があれば、それでいいのだ。

「爺さん……角笛つてのはな、こうして吹くのだ」

尖端をくわえる。

吹き鳴らすその直前に、瞳を閉じたカルロは、アニータのことを想った。

今まで人を避けるようにして生きてきたが、彼女と過ごした時間は、嫌いではなかった。天涯孤独の人生が少し、彩られた気がしていた。

さらばだ、アニータ。前を向いて生きろよ。



アニータは何度も振り返りそうになった。その度にカルロの必死な顔を思い出し、自分を叱る。

ろくな運動もしてこなかった少女の体力はすでに限界を越えていたが、それは止まる

理由になどならない。生きねばならぬと、その思いだけを胸に、アニータはがむしやりに駆けた。

途中で靴が脱げてしまいが、それでも止まらない。裸足のまま、ヤワな足の裏が擦り切れようとも堪えてみせる。

しばらくして、後方で凄まじい音が轟いた。

アニータにはその音が、執事の角笛よりも、火竜の咆哮よりも、力強く雄大なものに聞こえた。涙が溢れて仕方がなかった。

アニータは走った。走って、走って、ただひたすらに前へと走り続けた。

エピソード

その事件は、けっこうな期間、新聞の大見出しを独占した。

貴族であるリオハート家の令嬢、アニータ・リオハートが森丘に出向いたところ、火竜に襲われたのだ。

成人を間近に控えた貴族の跡取り娘が死にかけたこと、そして一級の危険生物に狙われても生き残ったことは世間の関心を大いに惹き付けた。

影ではギルドや貴族の一部が情報規制に乗り出そうとしていたが、彼らが手を打つよりも早く、アニータは奇跡の人として熱狂的な市民たちに祭り上げられてしまった。

それもこれも、アニータがギルドの息がかかっていない観測隊に助けられ、そこに記者が同行していたことが大きく関わっているだろう。

情報は一瞬にして拡散し、アニータは一躍時の人となった。

世論は概ね、彼女に同情的である。キャンプなどに行つたことの是非を問う声はあるが、そもそも安全であるなどと盛大に嘯うそぶいたギルドに対する非難が表立っている。火竜という代表的な大型モンスターの確認すら出来ないのかと、世間はギルドに落胆した。

ギルド内部では前々からあった派閥どうしが責任のなすり付け合いを泥臭く行つて

いるが、そんなことは民衆には知ったこつちやない話である。

混乱はギルドだけに留まらない。

当初予定していた事態よりも遙かに規模が大きくなってしまった話に、手ぐすね引いて高みの見物を楽しんでいた有力者たちは観覧席から転落し、大慌てで事件の收拾に励んでいる。

その方法が、都合の良い話をでっち上げてのらりくらりと煙に巻くだけだというのは、呆れるばかりであるが。

そんな各々の騒乱を尻目に、アニータは一度だけ、広場での公開記者会見の誘いに応じた。街へ生還した三日後のことである。

アニータが出した情報は少なかった。

元々、事件の全容を公開する気のなかった彼女は『火竜に襲われたこと』、『付き添いのハンターや執事たちが死亡し、自分だけが生き残ったこと』、『ギルドの情報が間違っていたこと』、その三つを淡々と端的に語った。

最後の一つに関しては一部の記者からの追求が激しかったが、アニータはそれ以上言及せず、「しばらく療養します」とだけ言って会見の場を後にした。

療養とは名ばかりで、医師によるケアも受けず、アニータはただ自分の部屋に引きこ

もっていた。

慣れ親しんだ可愛らしい内装の自室。しかしそこに居てもアニータの心が晴れることはなかった。彼女の脳裏には強烈すぎる一昼夜の出来事が焼き付き、一晩のうちに何度も帰りたいと願った自室は、もう色褪せてしまっていた。

否、変わったのは自分である。

価値観も人生もぐるりと向きを変えてしまい、もうかつての自分はいなくなってしまうのだ。外を知るには、あまりに濃すぎる時間を過ごした。

使用人が持つてくる食事にも手を付けず、アニータは時に呆然とし、時に考えに耽り、時に大いに心を乱して泣き続けた。

そんなことを繰り返していたある日のこと、アニータは父がいる書斎まで足を運んだ。事件の收拾に没頭していた父が、ここしばらくは帰って来ていた。とにかくアニータを使わなければ、事を治めきれないと判断したのである。

リオハート家の現当主である男は、ようやく顔を見せた娘に安堵した表情をした。以前のアニータであれば、その顔を向けられ喜びを覚えたかもしれない。

「おお、アニータ。ようやく落ち着いたかね」

「はい」

いつもは犬のようにじゃれ着いてきた娘が、短く平淡な返事をすることを怪訝に思いつつ、男は言った。

「お前を待つていたのだよ。成人のパーティーに婚約先との打ち合わせ、何より我がリオハート家を罵倒する者たちを論かなければならん。それらのことはお前抜きには出来ないのだ。頼りにしているよ、アニータ」

はにかむ父親の優しい口調にニコリともせず、アニータは彼を真つ直ぐに見据えた。男が言葉に詰まる。「頼りにしている」などと言えば簡単に尻尾を振っていたはずの小娘が、まるでこちらの胸の内を見透かすような目で見てくる。

二の句を継ぐ前に、アニータがしゃべった。

「お父様、お願いがございます」

「なにかね」

「王立の大学院に通いたいです」

「……は？」

男の手から羽ペンが滑り落ちる。この娘は馬鹿なのかと思った。

大学など、女の通う場所ではない。研究者や、箔を付けたい貴族の次男などが行くところだ。貴族の女は、アニータは名のある他の家と結ばれば、それで用は済むのである。

それなのに学業を選ぶというのは、機会を棒にふり、婚約を捨てることに他ならない。「な、何を言っているんだ、アニータ。婚姻が控えているというのに、そんなこと出来るはずがないだろう」

呆れた様子の父に、彼女は肅々と答える。

「婚約は申し訳ありませんが、なかつたことにしていただきます」

「はあ!？」

「成人パーティーにはちゃんと出ます。今回の件の弁護に関しては、する気もありませんが」

男は怒りに震え、文机へ乱暴に平手を打った。

「ふざけるんじゃない! 貴様、自分が何を言っているのか分かっていないのか?」

アニータは机を叩いた音や、父の剣幕にまるで動揺しない。強かに、父を見つめてい

る。

「もちろんですわ。この数日で、考え抜いた上でのことです」

「じゃあ何故そんな馬鹿げたことを言うんだ! これからのお前の行動に、リオハート家の将来がかかっているんだぞ!」

「お父様」

ずいつ、とアニータが一步、父に歩み寄る。その気迫に飲まれるように、男は戸惑っ

て閉口した。

「こんな小娘が背負えるものなど、何もありません」

アニータの口から出たのは、父を非難するものではなく、己を卑下する言葉だった。

「私は火竜に襲われました。人が、死ぬ瞬間も見ました。価値観が逆転したような気持ちです。けれど、それだけでは足りませんの」

足らないとは。父が聞く前に、アニータは話を続けた。

「私は今も無知です。世間知らずなのです。そこから脱却しなければ、将来などとも掴めません」

そう断言するアニータからは確固とした意志が感じられた。父を見つめる瞳には、静かな炎がたぎっているようだった。自分を世間知らずの小娘と評する彼女に、少女としての浮わついた雰囲気は欠片もなかった。

「正気か……？ そんなことをすれば、私の、この家の計画は台無しになるんだぞ。アニータ。家を追い出されたくなければ、言うことを聞きなさい」

すこむ言い方をする父の口調は、その言葉に反してどこか、すがり付くようだった。

「ならば追い出して構いません。私は、たとえ一人でも生きて行きます」

それをアニータが切つて捨てる。父は折れたように浮かせていた腰を椅子に深く落ち着け、ため息を吐いた。

その様子を見て、アニータは言う。

「心配なさらずとも家督は継ぎますわ。私が成長した後で、ですが」

「女であるお前が当主になる気か？ 本当に、正気の沙汰ではない」

政治に女性が関与する例は極めて稀である。他の貴族だけでなく、世間やギルドなどの大規模な団体からの困惑と非難の目は避けられないだろう。

「そんなことに臆しては、何も出来ません」

しかしアニータの決意は揺るがない。何がこの甘ったれの心を動かし、惹き付けているのか、父親である男にはまるで分からなかった。

「それでは、私は志願書と今までの学業成績を大学に提出しに行つてきます。通知が来ましたら、お父様に通しますので、よろしくお願いしますね」

アニータはそう言つて、未だに呆然としている父に背を向け、書斎から出て行くことをする。

扉を開けたアニータに、父が疲れきった顔で尋ねた。

「一体、どういふつもりなんだ」

アニータはくるつと振り向き、不敵に笑つた。

「前へ進むんですよ」

二人の女性は、車窓から見える景色を眺めていた。なだらかな丘が連なり、その間を細い川がいくつも流れている。

アニー・タリオハート事件から十年余りが経ち、通商ルートの開発が進んだ現在では、草食竜が引く竜車に乗ってこの森丘まで来れるようになった。

女性の一人が、向かいに座る相手に話しかける。

「綺麗なところですね、初めて来ました」

スーツをパリッと着こなしているその女性とは対照的に、話しかけられた方の女性はラフな格好をしている。それなのに座り方にただならぬ品性を感じさせるのは、その女性を持つ経歴によるものか。

「そうですね。少し前までは、ハンターの方々以外はほとんど来られない場所だったから」

ラフな格好の女性がそう答える。スーツ姿の女性は向かいの彼女のつま先から視線の上に上へと視線を這わせ、そして言った。

「しかし局長、その格好は些か、そのう」

「あら、何か変かしら」

局長と呼ばれた女性はおどけるように肩をすくめた。

無地の麻のズボンとシャツ、そして履き潰した革靴。飾りと言えば両手首にはめてるブレスレットくらいか。明らかにお偉方のする格好ではなかった。

「動きやすいのよ、これ。外の視察に行くんだし、あなたも次はこういう格好で来なさいな」

おかしそうに笑う上司に、困り顔で頬をかく。

「えー、仕事で人と合うんですし、正装するべきですつて。それに局長は美人なのに、勿体ないですよ」

「ありがと。まあ大丈夫よ。今回お会いするのはユニークで寛容な方だからね」

窓から差し込む光はやわらかい。のんびりと行く竜車に乗っていると眠たくなってきてしまう。

しばらくしてスーツ姿の部下がうつらうつらとし始めた頃に、ラフな格好の上司が彼女の肩を揺すった。

「ほら、着いたわよ」

慌てて起きて謝罪を繰り返す部下に笑って、向こう側から開かれた扉の先へ出ていった。

「んー、良い気持ち。久々ねー」

局長と呼ばれている女性は草原に降り立つと、手を組んで上へ伸びをした。肺一杯に清涼な空気を吸い込む。続いて竜車から出てきた部下も同じような仕草をした。

竜車の外装には、彼女らの組織の紋章が施されている。翼を広げる竜の大きな紋章の下に組織の名前が記されている。

『ギルド公正保安委員会』

約五年ほど前から発足したこの組織は、今までの警察組織であるギルドナイトや民間の警備団体とは一線を画す存在だった。従来の組織が一般的な犯罪を取り締まるのに対して、この委員会のターゲットは王公貴族の汚職や商業団体の不当な商売などにあつた。どれもこれも、裁こうと力を入れねば尻尾さえ掴めなくせ者だ。

ギルド直属の公的機関であるにも関わらず、汚いことに手を染めていればギルドであろうと取り締まり、今や敵味方を問わず恐れられる存在となつている。うっかりこの組織の設立を認めてしまったギルドの重鎮たちの一部は大変頭を悩ませているとのことだが、もはや後の祭りである。

ギルド公正保安委員会が脚光を浴び、民衆の支持を強く得ているのは、名のとおり公平性から来るものだろう。情報の出し惜しみはせず、どうしても世に出せない情報ならば、出せるように下地を整えるのも委員会の仕事だ。

今では彼女らを邪魔に思う貴族たちでも、迂闊に手を出せぬほどに成長した。潰そう

と思つた時にはすでに遅く、爆発的な速度で人気と規模を拡大していったためである。下手を打てば、自分達の汚職が公の場に晒されて瞬く間に失墜、没落コースとなる惨状が目に見えよう、悪どい彼らは戦々恐々としている。

「お嬢様方。遠いところへ、ようこそお出でくださいました」

童車から降りて景色と空気の良さを満喫していた二人に声がかかる。竜人の男が友好的な笑顔で、局長である女性に握手を求めた。

局長はその手をとって言った。

「毎回お世話になり恐縮です。それでは、早速ベースキャンプの方から回って行きたいのですが」

森丘の管理を担当している男は視察の催促に快く応じて、案内を始めた。

童車が止まった場所のすぐそばには洞窟の入り口があり、そこを抜ければ岩壁に四方を囲まれた天蓋のないキャンプ地に着く。

今回、彼女らは不定期の現場視察に訪れていた。平たく言えば、ギルドとハンターがしっかり協力関係を持っているかを見に来たのである。そんなことを局長自らがやるなど、と怪訝に思う者もいるが、それがまた支持を勝ち取る要因の一つになっている。

「わあっ、素敵ですね。立派なテントに、池までありますよ」

部下がはしゃぐのを微笑ましく見ながら、局長は感慨に目を細めた。

男の説明を聞き、少し休んだら森や他の設備の案内をしようということで一端の区切りをつけた。

「そういえば局長は、ここに何度も足を運んでらっしゃるんですね」

キャンプ地から出て、少し散歩をすることにした二人が護衛を伴って歩く。川縁を伝い、緩やかな丘を登ったり下ったりする。

「ええ。忙しすぎて来れない時期もあつたけどね」

設立当初、委員局の創設者であり局長である彼女が受ける非難の主なものに、彼女が貴族の出自を持つていることがよく取り挙げられていた。貴族を取り締まる機関のトップが貴族であるのは何事かと。

しかし彼女はそれに対して、自分の家の利権を全て剥ぎ取ってギルドへ譲渡し、自ら没落貴族になるという大胆不敵な行動によって、己の正当性を示した。その前代未聞の事件はかつて大いに世間を沸かせた。

彼女の父、つまり前当主である男はショックのあまり失禁しながら菓子喉に詰まらせて死んだという噂が立っているが、真偽は定かではない。

「でも視察に来る場所の中では、一番好きよ。思い出深いところでもあるし」

川の水に触れてみる。清く冷たい感触が気持ちいい。水面下では魚が泳いでおり、名

前を聞いてくる部下に、この魚がサシミウオであることを教える。

「あ、局長、見てくださいあれ」

ささやく部下が指差した方を見ると、対岸で二匹のケルビが水を飲みに来ていた。彼女らの視線に気づいたらしく、こちらをじつと見つめている。

やがて危険はないと判断したのか、川に口を付けて水を飲み始めた。

「かーわいいー」

うつとりと小声で呟く部下。

「夫婦かしら」

局長は落ち着いた様子で言った。

「きつとそうですよ。あんなに仲良さそうですし」

いいなー、と言う部下の左手の薬指には指輪がはまっている。つい最近、婚約したのだと興奮気味に聞かせてくれた。あのケルビたちに自分を重ねているのだろうか。

「そういえば局長からは浮わついた話なんてぜんぜん聞かないですけど、本当にいないんですか？そういう人」

聞かれて、女性はうつすらと笑った。温かさで寂しさが入り交じった大人の笑顔だった。

「そうね……心に決めた人なら、いたわ」

「じゃあその人と結婚しないんですか」

率直に言う部下に苦笑して、互いの首をすり寄せ合うケルビたちを見つめる。

「できないのよ。会いたいけれど、私を置いてずいぶん遠くへ行つてしまったから。きつと、もう二度と、会うことはないのでしょうね」

「なんてこと！」

部下は憤然として立ち上がった。その勢いにビツクリして、ケルビがまたこちらを凝視する。

「ひどい人ですね。局長みたいな素敵な女性を置いてどっか行っちゃうなんて」

「ふふつ、そうかも。最初に会ったときは、すつごく無愛想で、嫌いだって思ったわ。でもね、本当は優しくかったのよ。それはもう、優しい人だった」

一瞬だけ、鼻にかかったような声になる。彼女が涙を堪えたことに、部下の女性は気付いているだろうか。

「何も知らなかった私に、世界の広さを教えてくれたわ。前を向き続ける強さも、その人からもらった」

二匹のケルビが遠ざかって行く。昼下がりの陽の光に照らされて野を駆ける彼らは、幸せの象徴のようにも見えた。

そんな二匹を見つめる彼女の瞳には、確かな意志の力と、遠い憧憬に恋い焦がれる思

いが同居している。

気を張らねば、懐かしさに負けて、少女のように泣き出してしまいそうだった。

「だから……もしその人と会える日が来たなら、私は胸を張って会いたいわ。そのため、前を向いて生きるのよ」

ある一人のハンターが少女に託した思いがあつた。それは今もなお、彼女の心の支えとして、勇気の源になっていることだろう。

麗らかなある日のこと。世界は以前より、ほんの少しだけ平和に見えた。



く英雄の意志は受け継がれるく